十六夜の月

銀花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十六夜の月

【Ｎコード】
Ｎ５９３３Ｚ

【作者名】
銀花

【あらすじ】
関ヶ原の戦から二年が過ぎた。
両親がなく、育ての親も死に、ぶらぶら一人旅をしていた空（そら）は、偶然出会った侍の良明（よしあき）と行動を共にすることとなった。
良明も幼い頃から慕っていた人を戦で亡くし、国元を離れ一人旅をしていたという。
苦い記憶を背負ったまま二人は侍の故郷、江戸へ向かう。

／／／　長編、和風ファンタジー。日本史実上の人物も出てきますが、歴史的要素はほとんどありません、あくまでファンタジーです。

／／／　著者の創作サイト「梅金魚」で連載している小説の転載になります。

序　空と海

わたしは、ふこうなんかじゃない。

だってここまでいきてこられたから。

だから、それ以上のことは望まないつもりだった。

竈用の薪を両腕に抱え、そらは夕日を見つめた。真っ赤な夕焼けはそらの顔も赤く染めた。

今日は一人で薪拾いに出かけた。今はその帰りである。

そらの住まいは裏店で、それでも苦しい生活をしているわけではない。一緒に住んでいる若い夫婦がいるのだが、彼らはそらの両親ではなかった。二人には子がなく、あるところから引き取ったのだと聞かされている。

気さくで優しい二人に、そらも素直に甘えることができていた。本当の親のように慕っていた。七つのこの年まで育ててくれた彼らに、いつか必ず恩返しが出来たらと幼いながら密かに思っている。

そらは夕日を見上げながら笑みを浮かべた。柔らかい風が、そらの黒漆色の髪を揺らす。いつもと変わらない、初秋の夕暮れだった。

そらは裏店の木門を押し開け、自分の家へ駆け足で近付いて行った。

「ただいまぁ」

勢い良く開いた戸の向こうの光景に、そらは凍り付き、目を見開いた。薪が全て腕から落ちる。出迎えてくれるであろうと思っていた人たちは、今変わり果てた姿で床に転がっていた。

「……え……」

立ちすくんだまま混乱する頭を抱えるしか出来なかった。何が起きているのか全く分からない。広がる血の色と、立ち込める血の臭いに眩暈がした。

そらが口を押さえて俯いた時、何かの動く音が聞こえた。顔を上げると一人が呻き声を上げている。そらは草履も履いたまま部屋に這い上がり、急いで彼女に近付いた。

「お峰さん！」

「……そら……無事だったのね」

血まみれの身体を動かし峰は仰向けになった。彼女の血の気のない唇は安堵したように微笑んでいた。

「なんで……どうして」

そらは涙を浮かべて峰の顔を見つめた。

少し離れた場所に倒れている峰の旦那はピクリともしない。既に

事切れているようだった。彼の手には今までそらが見たこともなかった刀が握られていて、それが静かな死闘を物語った。
峰は優しく微笑みそらの頬を撫でた。
白い肌に、血の筋が引かれる。
「……あんたはまだ知らなくて良いのよ……大きくなったら……」
きっと、分かるから。
そう言って、峰は目を閉じた。ゴトと峰の腕が床に落ちる。
そらは呆然と彼女の顔を見つめていた。

「――遅かったか……」

開け放たれたままの戸の外から急に男の声がして、そらは振り返った。そこに髪の長い、長身の男が一人立っていた。
彼は床の亡骸を見て、そこに座り込んでいるそらに視線を向けた。そして苦笑を浮かべ、後ろ手で戸を閉めた。
「大きくなったな……いくつだ？」
少し目元がきつかったが、男の声は思っていたより優しかった。
そらは質問には答えずに、無言で彼を見上げていた。彼の存在がどこか懐かしく、初めて会った訳ではないような気がした。
そう感じた瞬間、そらの目から涙が零れ始めた。

訳が分からなかった。

突然、一人ぼっちになってしまった。

男は部屋に上がり、そらに近寄った。

「悪かったな……俺がもう少し――」

早く来ていれば、そう言いかけた時そらの身体がグラリと傾いた。男は咄嗟に手を伸ばして彼女の小さな身体を受け止めた。腕に中の少女を見下ろし、男は短く息を吐いた。

「気を失ったか……無理もない」

そらの身体を抱き上げ血の海から離れたところに横たえた。

「さて……どうするかな――――」

二つの遺体を見下ろし、男は一人言ちた。

＊　＊　＊　＊　＊

暗闇の中で何かの気配を感じ、政長は目を覚ました。機嫌悪そうに重い瞼を開くと、そこにそらの姿があった。彼女は頬杖をついて政長の髪をサラサラといじっている。

そらを連れて行動を始めてから一月が過ぎていた。

政長は盛大にため息を吐いた。

「勝手に出てくるのは構わないが、俺を起こすな。何刻だと思ってる」

「外に出ていくなと言ったのは、あなただわ」

そう言って、そらは不満そうに頬を膨らませる。

彼女は容姿に似合わず、落ち着いた大人の声をしていた。雰囲気も、どこか大人の女性を思わせた。

それに良く見れば、彼女は青白い光をまとっている。真夜中の部屋の中は明かり一つないのに、そらは表情までもがはっきりと見えるのだ。

政長は頭を掻き、寝返りを打ってそらに背中を向けた。

「その身体がそらの物だからだ。一人で遊んでろ、うみ」

「うみ？」

「お前の呼び名だ。そらの反対で、うみ」

面倒臭そうに説明する政長の顔を青い瞳で覗き込み、うみは微笑んだ。

「わたしに名前を付けるなんて、不思議な人」

「……お前、誰なんだ」

うみに目も向けずに、政長は尋ねた。うみはにっこりと意味深に笑い、首を傾げた。

「さあ？」

それだけ言って、うみは消えた。

チラと振り返り、静かに寝息を立てているそらを確認して、政長はもう一度ため息を吐いた。

序　空と海　終わり

一、遠い記憶　（1）

温かい日差しの中で、風が桜の花びらを舞い上げた。至る所にある桜の木は満開を通り越して、少しずつ葉が息吹を上げ始めている。
頭上は気持ち良いくらいの快晴で、浅葱色がどこまでも広がり、その中を薄い雲が流れていく。浅葱と桜の彩りは目に優しく写り、また立ち止まって見惚れてしまう程に鮮やかだった。

その晴天の下の細道を、景色に似つかわしくない数人の男達が騒々しい足音と共に走ってきた。

「あんのクソガキ！　どこ行きやがった！」

桜の木の下で立ち止まった彼らの一人が苛々と舌打ちをする。

「そのクソガキに金すられてる辺り、俺らマヌケだよなー」

他の一人が呑気に笑うと、先程の男がそいつを殴った。

「てめぇが一番間抜けだ！　おい、まだそう遠くには行ってねえはずだ！　絶対に見付けろ！　殺してでも奪い返せ！」

男が怒鳴ると、全員が走り出した。殴られた男も渋々、文句垂れながら走り出す。

彼らの様子を、近くの高い木の上から見下ろす者がいた。
ひょこと顔を出して通りを見下ろすその者は、無造作に切られた黒漆色の髪に、子供のようなかなり小柄な体格だ。名前をそら、と言った。

見ただけでは大概気付いてもらえないが、これでも今年で十六である。

（捕まってたまるかっつの。せっかく手に入れた金、誰が返すか）

バーカ、とそらは小声で呟いた。そして、自分が今置かれている状況に大きくため息を吐く。

追われる勢いでこの木に登ったは良いものの、降り方が分からない。大分高い所まで登ってしまったようで、下の道がかなり遠く思えた。

（どうすっかな……）

唸って考え込んだ時、再び下から足音がしてそらは咄嗟に身を屈めた。

（何だよ、あいつらもう戻ってきたのか？）

そっと身を乗り出して道に目をやると、そこに一人の男が通りかかった。編笠を被っていて顔は分からないが、腰に刀を差しているのが見える。

先程の男達ではないと分かり、そらはホッと胸を撫で下ろした。

「おーい！　そこのお侍さーん！」

木の上から大声で呼びかけると、彼は足を止めて辺りを見渡し始めた。

「こっち、上だ！　悪いけど、助けてくんない？」

侍が被っている編笠を後ろに傾けてこちらを見上げ、そらはニコニコと手を振った。

「降りれなくなってさー！　頼むよ！」

侍は木の上のそらを見つめたまま不機嫌そうに顔をしかめた。そして何も言動せずに歩き出す。

「ちょっと待てぇーっ！」

彼の行動には怒鳴らずにいられなかった。

「何だ何だ！　か弱い少女が助けを求めてるんだぞ！？　それを無視するのか！　お前はそんなやつなのか！」

そらは腕をブンブン振り回し、大声で喚き散らした。これだから侍は嫌いだと心底思った。

去りかけた侍は面倒臭そうに戻ってきて、また顔を上げた。

「か弱い？　どこが。ただのガキにしか見えねえな」

「んだとーっ！　喧嘩売ってんのか！」と叫んだ時だった。

メキメキという嫌な音がした次の瞬間には、そらの乗っていた枝が激しい音と共に折れた。

「ふえっ！？」

枝もろともそらは真っ逆さまに落ちていく。

この木がどれだけの高さだったかとか、死んだら金盗んだ意味ね

ぇとか、色んな思考が一気に頭を駆け巡った。
全身への衝撃を覚悟して身体を丸めたが、落ちた先は柔らかだった。近くで折れた枝の落ちる重い音がした。

そらが混乱したまま硬直していると、不意にチリンと鈴の小さい音がして、キツく閉じていた瞼を開いた。
そこにはさっきまで自分が怒鳴っていた侍の顔があった。受け止めてくれたようで、そらの身体は侍の腕に抱えられていた。

「……思ったより軽いな」

彼の第一声はそれだった。

「お前、この木が桜だって分かってて登ったのか？　桜は折れやすいんだぞ」

呆れた口調で彼が言ったため、そらは少々ムカッ腹が立った。

「うるせえ、勢いで登っただけだ！　下ろせ！」

「おーおー、それが助けてもらった奴の言うことか？」

そらの身体を地面に下ろしてやりながら、侍が首を傾げる。そらは眉を吊り上げ侍を睨んだ。

「ありがとよっ」

まるで礼など込めていない、ぶっきらぼうな口調で吐き捨てた。
一度去りかけたくせに、と内心悪態づいた。
やれやれと侍が肩をすくめる。

「素直じゃねえな――」

「いたぞ！　アイツだ！」

突然、背後から怒鳴り声がして侍は驚いた。振り返ると、そこに数人の男達がいた。

「げっ、もう戻ってきた！」

「やっべ」と小さく呟き、そらは数歩後退った。

男達がズカズカと近寄って来る。

「おいガキ！　俺らから金盗むたぁ良い度胸じゃねえか！」

先頭の男が掴みかからん勢いでそらに手を伸ばした。それを素早くかわし、そらは隠れるように侍の後ろへ回り込んだ。

「……は？」

侍が困惑した様子で、背後のそらに目を向けた。

「ここで会ったのも何かの縁だ！　そいつらやっつけてくれ！」

「はぁ？」

侍は目を丸くして、突拍子もないことを言う彼女から、目の前の男達に視線を移した。彼らはかなり殺気立っている。

「やんのかぁ？」

「そのガキ寄越せば、てめぇは見逃してやるぜ？」

指をボキボキ鳴らしながら、男達は近付いてくる。

侍は短いため息を吐き、一歩横に動いた。そしてそらの腕を掴み前へ引っ張り出す。　そらはキョトンとして、引っ張られるままに前へ足を進めた。

「どうぞ」

「ちょっと待てーっ！」

そらは再び怒鳴り、振り返って男の胸ぐらを両手で掴んだ。

「助けを求めてるんだぞ！　それでも男か！」

「だって……痛い目遭いたくないし」

「ヘタレか！　第一何だ、その腰にあるのは飾りか！？」

そらが怒鳴りながら彼の腰の刀を指差すと、侍は疲れたため息を吐いた。

「何か期待してるようだけどな、これは竹光だ。何も斬れないぞ」

彼はゆっくり柄を撫でる。そらは眉を寄せた。

「使えねぇーっ！」

そう叫んだ途端、誰かに腕を掴まれ引っ張られた。

「おら、金返せやガキ」

すぐ近くに男達の顔が見え、そらはベッと舌を出した。

「誰がやるか、これはうちのもんだ」

「ふざけんなてめぇ……殺すぞ！」

腕を掴む男の手に更に力が入り、その痛さにそらは顔を歪めた。

その時、そらの横を何かがかすめ、腕を掴んでいる男に当たった。男が怯んだ隙を逃さずにそらは腕を振り払って男達から離れた。飛んできたものをよく見たら、それは侍が被っていた編笠だった。

侍に目を向けると、彼は刀の柄を握りながらニヤリと笑う。

「盗んだ半分、おれに寄越せよ」

そらはポカンとした。彼の言ったことをすぐには理解できなかった。助ける代わりに盗みの半分をやれと、侍は言ったのだった。条件付けるなんて男らしくないし、やっぱり侍は嫌いだと思ったが、そう文句は言ってられそうになかった。先程、男達が短刀を手にしたのが見えたのである。

そらは腕を摩りながらニッと口の端を上げた。

「四割だ。それなら良い」

「んー、ま、それで妥協してやるよ」

侍は明るく笑い刀を抜いた。それと同時に男達も短刀を抜き、じ

りじりと間合いを詰める。

「三対一か、まあいいや。かかってこいよ」

腰を沈めて刀を構えると、一斉に男達が襲い掛かってきた。侍も彼らに向かって躍り出た。

最初に振り下ろされた短刀を身をひねって避け、柄で男のこめかみを打った。気を失って崩れてきた彼の胸倉を掴んで投げ飛ばすと、次いで斬りかかろうとしていた男にぶつかり二人とも地面に転がった。それを見届けずに、もう一人に視線を移し、刀を構える。

残った男は面倒臭そうに舌打ちすると、転んだ二人を睨んだ。

「おい！　やめだ！」

そう怒鳴ってまた視線を良明に戻した。

「チッ……あいつどこに行きやがった……てめぇら覚えてろよ、今度会ったらぶっ殺してやる」

ずらかるぞ、と言って男は走り出した。その後に気絶した者を担いだ男がついて行った。

彼らが見えなくなったのを確認して、侍は刀を鞘におさめた。その様子を眺めていたそらは、振り向いた彼と目が合い僅かにたじろいだ。彼の刀捌きに見とれていたことを悟られないよう、慌てて笑顔を作る。

「や、やー、すげぇなあんた！　ありがと」

「あれぐらいならな。それに礼を言われる程のことはしてねえよ、

金のためにやったようなもんだし」

肩をすくめて、侍は言った。

そらは笑顔を引きつらせた。礼を言って損をした気分になった。どうしてこいつはこんなに可愛くないことを言うのだろう。まあ、侍が可愛いこと言ったら引くけども。

彼を見つめたままそらは首を傾げる。

「お前、名前は？」

「名前を聞くときは自分から名乗れ」

侍に冷たく言われ、そらは少し口を尖らせた。だが彼が言うことは一理あるから反論は出来ない。

「うちは、そらだ」

「……そら？　そらってこの？」

そう言って、侍は上を指差した。そこには青い空が広がっている。

そらは肩をすくめた。

「さあ？　それは分からん。うち字知らないからな」

「多分、空だろ。それしか思い付かねえしな」

「ま、それで良いよ。で、お前は？」

「良明だ」

彼が躊躇いなく名乗ってくれ、空は表情を明るくした。

「良明かー、じゃあ“よっしー”だな！」

「何でそうなる」

良明が怪訝そうに眉をひそめ、空は無邪気に笑う。

「この空様が付けてやったんだ、喜べよ」

「誰が喜ぶか」

くだらないとばかりに良明は呟き、頬を膨らます空を無視して肩をすくめた。

「お前、家は？送るから帰れ。ガキがこんなとこウロウロするな」

そう言った途端、空が良明の脚を力の限り蹴った。良明が声にならない声で唸り、空は彼を睨んだ。

「ガキ扱いすんな！　うちは十六だ！」

「……は！？　十六！？　その大きさで？」

良明は蹴られた箇所を擦りながら、小さな彼女を目を丸くしてマジマジと眺めた。

正直、心底驚いた。どこからどう見ても十歳程度にしか見えない。顔も、十六と聞いても疑ってしまうぐらいに幼かった。

「俺と二つしか違わねぇ……」

「へー、あんた十八か、見えねえな。どっからどう見てもおっさんだ」

空は嘲るように顎を突き出し、鼻で笑った。良明は間髪入れずに空の頭を片手で掴んでいた。空の身体がビクリと震える。

「ほー……おっさんな。お前も捻り潰してやろうか」

彼の冷たい笑顔に、空は思わず息を飲んだ。

「じっ……冗談だって！　間に受けるなよ！」

慌てて弁解して、良明の手から逃れるように空は一歩後ろに下がった。

予想に反して良明があっさりと手を放して、不思議に思いながら空は彼を見上げた。

「スリなんて女がすることじゃねえなー」

そう言って、良明は藍色の銭入れを目の高さに持ち上げた。中から鈍い金属音がする。

空はその銭入れを見て目を見開いた。彼が持っている銭入れは、先程空が盗んだ物だった。

「へっ、あれ！？」

慌てて懐や袂を押さえるも、勿論そこには何も入っていなかった。

「おっお前……いつの間に……！」

空は奪い返そうと手を伸ばしたり跳んだりしたが、その行動も虚しいことに意味を成さなかった。良明にヒョイとそれを高く持ち上げられ触ることも出来なかった。

空は眉を上げ、彼を睨んだ。

「返せよ！　人の盗るんじゃねー！」

「いやいや、言ってること矛盾してるから」

良明が呆れたように笑う。

「それに四割はおれのもの、って約束だったよな？」

良明にそう言われ、空は言葉を詰まらせた。彼の勝ち誇ったような笑みに更に腹が立った。

「わ……かったよ！　勝手に取れば良いだろ！」

空はかなり不服そうに腕を組んだ。

（自分がスリだってのに……すられるなんて……一生の不覚だ！）

空が大きく舌打ちをし、それを聞いた良明は吹き出した。

「面白いなー、じゃあ遠慮なく」

銭入れを開け、音を立てながら物色する。

その間、空は頬を膨らませて彼を見つめていた。
他人とここまで喋るのは久しぶりな気がした。それなのにここまで人を苛立たせるとは、良明の振る舞いに少し呆れもした。
暫くして自分の取分を手にしたまま良明は銭入れを空に投げ返した。受け取った空は、その重さに首を捻った。

「ありがとな、これでしばらく食いっぱぐれなくて済みそうだ」

良明は笑って言い、地面に落ちた編笠を拾い上げ、埃をはたいてから被った。
空は眉をひそめたまま彼を眺めていた。銭入れの重さが、大して変わっていない。

「家まで送らんで大丈夫か？」

空を見つめ、良明は尋ねた。

「ん？　あぁ、うちに家はないから……旅してんだ」

「へえ、一人で？」

「そうだよ。お前もか？」

尋ね返すと良明は一度頷いた。

ふーん、と興味なさげに呟いた空だったが、すぐに意味深な笑顔を良明へ向けた。その笑みに、良明は嫌な予感を覚える。

「なぁ、お前についてってもいいか？」

「イヤだ」

あっさり拒否して良明は空を置いたまま歩き出した。空は彼の答えの早さに眉を吊り上げた。

「即答かよ！　少しは考えろよ！」

空が早足で追うと、良明はため息を吐き振り返った。

「イヤだって言ったろ、ついて来んな」

「イヤだね！」

背後で空が怒鳴る。

「意地でもついてってやる！　逃げたって無駄だかんな！　うち足速いんだからな！」

追い付いた空を横目に良明は更に盛大なため息を吐いた。

「お前……うるさそうだからイヤだって言ったのに……ていうか実際うるさいんだけどな」

「へっ、シケた旅するよりマシじゃねえか。お前つまらん旅してるだろ」

頭の後ろで手を組んで、空はニヤリと笑った。

良明はやれやれと宙を仰いだ。静かな方が自分には合っているのに、と言いたくなった。

「まぁ……シケた一人旅してたのはうちも同じかな」

浮かぶ雲を見上げ、空がポツリと呟く。その彼女の横顔が、淋しそうに見えた。

「なんつーかさ……あんたとなら大丈夫かなって思って……ほら、旅は道連れ、なんて言うじゃん」

空が恥ずかしそうに頬を掻いた。

空がどんな理由で、いつから旅をしているのかは知らない。でも、こんなに小さい、しかも女が一人で行動するということは、心細くて当たり前なのかもしれない。

（でも口悪すぎだろ）

良明は頭を掻き、長く息を吐き出した。

「あ～もう……好きにしろ」

そう言った途端、空が満面の笑みで振り向いた。突然向けられた表情に良明はたじろいだ。

「そうこなくちゃ！」

空が嬉しそうに良明の腕を叩き、良明は短く笑ってヤレヤレと叩かれた腕を擦る。

「よし、じゃあ飯でも食いに行こうぜ。金もあることだしっ」

空が金の入った銭入れを鳴らした。
「良いけど、空のおごりな」
「は？　何でだよ」
「おれは四割、空は六割。どっちが金持ちだ？」
良明は笑いながら首を傾げた。
「男が女におごらすのかー？」
頬を膨らます空の肩を、良明はポンポンと優しく叩いた。
「旅に女も男もないんだぜ」
そう言ってニコリと微笑む彼を、空は暫く睨んでから口を開いた。
「……今日だけだかんな！　うちが誰かにおごるなんて、滅多にないんだぞ！」
怒ったように言い、空は足を速めて良明より前に出た。
（金……少ししか取ってないくせに）
そう考えて、空は苛ついた。
良明なりの優しさなのかもしれないけど、約束は守らないと気が済まない性分だった。自ら言えば良いのだろうが、言ったらそれで

終わってしまいそうで言い出せなかった。
彼を信用できる気がしたのは、嫌々ではあったが、結局は、自分の事を助けてくれたからだ。これまで誰とも行動を共にしようとはせずにいたし、そうしなくても一人で生きてこられた。しかし良明に会って、何故か心細さを覚えた。ぶっきらぼうだったとしても、久しぶりに触れる人の優しさは、空には温かいものだった。
それに、初めて会ったはずなのに、彼は懐かしい匂いがした。

この感覚が何なのか、空には分からなかった。

目の前を歩く小さな背中を見て、良明は微笑んだ。

飯屋に入り、二人で適当なことを喋りながら遅い昼食を取っていた。昼を回って大分経ってからここへ着いたためか、客は空達だけだった。
ふと、良明の隣に立掛けられた刀が目に映り、空は尋ねた。
「なぁ、お前の刀、何で竹光なんだ？貧乏侍か？」
良明はチラリと空を見て、また手にした茶碗へ視線を落とした。
「別に、自分からこれにしてるだけ」
「ふーん……何で？　今の時世、竹光とか馬鹿にされねえの？」
飯を口に運ぶ手は止めずに空が首を傾げ、良明は箸を持ったまま

机に頬杖をついた。

「お前……知りたがりだな。さっきから質問ばっか」

「いいじゃん、聞かないとよっしーのこと何も分かんねえだろ」

そう言って、味噌汁をすする彼女を見ながら良明は眉をひそめた。

「その、よっしーってもう決まりなのか？」

「他に思い付かねえもん」

「普通に名前呼べよ。お前頭悪いな」

「うるせぇ、ぶっ殺すぞ」

空は酷い形相で良明を睨んだ。彼が楽しそうに笑う。

「てゆーか話そらすなよ。何で竹光なのかって」

空は良明の顔を覗き込んだ。良明は箸を置き、茶の入った湯飲みに手を伸ばした。

「そうだな……本音を言えば、罪悪感から。かな」

良明が静かに言い、湯飲みに口を付けた。

「罪悪感？」

空は訳が分からないと首を傾げる。一息ついてから良明はまた口

を開いた。

「二年前、戦があっただろ……美濃で」

「美濃……あぁ、それなら知ってる」

時の太閤、豊臣秀吉が逝去してから二年後、徳川率いる東軍と石田率いる西軍が美濃の関ヶ原でぶつかった。この大規模な戦は、二年経った今でも記憶に新しい。あまり関わりのない事だったが、噂ぐらいは甲斐で暮らしていた空にも入ってきた。

「それで？」と空は身を乗り出した。

「おれもそれに参加した」

良明があっさりと呟き、空の思考は暫く停止した。

「……へっ？　えっ……あ、そうなんだ」

目を丸くして、良明を見つめ続けた。

そうなんだ、としか言いようがなかった。戦がどのような物なのか空には分からないが、先程の良明の刀捌きや身のこなし等を思い返すと、参加していても別に不思議ではなかった。

（だけどなんで今は浪人なんてやってんだろ）

空は怪訝そうに眉をひそめた。

大名同士の戦であったのなら、良明もどこかの大名に仕えていた武士なのではなかろうか。立ち居振る舞いを見ていても、少なから

ず足軽ではないように空には思えた。

（もしかして負け戦……だったのかな）

そう疑問に思ったが空は尋ねることが出来なかった。二人の間に沈黙が流れる。

「え、えっと……それと竹光とどんな関係が？」

空は慌てて口を開いた。

「……人、たくさん斬ったからな……それが罪悪感」

良明が視線を落としたまま苦笑する。

血と火薬の入り混じった匂いに、山のような数え切れない程の死体の中に立つ自分。今でもよく思い出してしまう、残酷な光景だった。

「……でもさ、そうしないと、よっしーが死んでたかもしれない訳だろ。そこまで引きずらなくても良くね？」

空はキョトンとして言った。彼女の表情に、良明は思わず力が抜けた。

「楽観的だな。ま、あそこにいなかったお前には分かんないだろうし……人に言うつもりもないし。この話はこれでおしまい」

一気に喋り、自ら話を打ち切った。空に全部を聞かせるような内容でもないと、良明自身が判断したからだ。

一方、空は俯に落ちていない表情をしていた。

「まぁ、別にいいけど……」

空は拗ねたように口を尖らせて、卓上を睨んだ。

出会って間もないから、良明が何もかも話してくれるとは思ってはいない。でも何故かつまらなくも思えた。

「あらあら、こんな真っ昼間から若い者が暗い顔して」

二人が沈黙していた時、急に近くから女の声がした。そちらに目をやると、この飯屋の女がクスクス笑いながら近寄ってきた。

「食べ終わったんならこれ下げちゃうよ」

「あぁ、全部持ってっちゃってー」

だらけた空が手をプラプラ振る。

「何だい、元気ないねぇ」

盆の上に食器を重ねていき、女は二人の顔を交互に見つめた。空は彼女を見上げ、肩をすくめる。

「元気は有り余ってるから、ご心配なく」

「ふーん、じゃあ二人でケンカしちゃったとか」

どうやら彼女は詮索好きのようで、ニコニコしながら更に尋ねた。

空と良明は目を合わせ、ヤレヤレとため息を吐く。

「おっ、おっかあ！　またアイツらが……！」

女の娘だろうか、窓近くにいた少女が慌てた様子で走り寄ってきた。途端、女の顔は険しくなった。

「あいつら？」

空は彼女を見上げ、首を傾げた。

一、遠い記憶　（2）

女は苦笑を浮かべ、空達に目配せする。

「……取り立てなんだ。最近しつこくてね……騒がしくなるけど、ちょっと我慢しとくれよ」

そう言って、女は戸口へ向かった。その後ろ姿を空と良明は目で追っていく。

女が戸口に辿り着く前に、戸が激しい音と共に開かれた。

「しつこいよ、あんたら」

女は強気に腕組みし、取り立て屋と見られる男達と対峙した。

その男達を見た空と良明は、大慌てで机の陰に隠れた。彼らはさっき空が金を盗み、良明が気絶させた者達だった。

「な……何でよりによってあいつらなんだよ……！」

「おれが知るか」

二人はひそひそと喋り、事の成り行きを陰から見守った。

「お泉さんよ、金の準備は出来たのか？」

「今日で期限も切れるぜー」

男達はズカズカと店の中に入り、泉の周りを取り囲む。

「誰が払うって言ったかい。ふざけんのも大概にしな」

泉は腕組みをしたまま、彼らを睨み付けた。彼女の目の前にいる男が、ニヤニヤしながら更に泉に近寄る。

「相変わらず強気だな。でもな、こっちには誓約書っつーもんがあるんだわ」

そう言って彼は懐から紙を取り出す。

机の陰に腰を下ろしていた良明は、まだ近くに少女が佇んでいるのに気付いた。見たところ彼女は空より少し若いくらいで――空の方が断然幼く見えるが――襷に前掛け姿であるからこの店の手伝いをしているのだろう。この母娘の他に人は見えないため、この店はきっと泉と呼ばれた先程の女の店だ。その娘はオロオロと母親を見守っている。

「おい」

良明が小さく声を掛けると、少女は微かに身体を震わせ慌てて振り向いた。彼女を手招き、自分達の前に座らせる。

「あいつら、何の取り立てしてんだ？」

良明がヒソヒソと尋ねる隣で、空は良明から少女へ視線を移した。少女は居心地悪そうに床を見つめている。

「それは……去年死んだおっとうが、あいつらに金を借りたらしくて――」

「ははーん。親父が死んだから、代わりに払えってやつか。よくある話だな」

呆れたように、空は片膝を立ててそれに頬杖をついた。少女は俯いたまま、膝の上で両手を握り締めている。

良明は少女の様子を見て、空の頭をはたいた。

「いでっ」

「お前は喋んな」

空は頭を押さえて良明を睨んだ。

「……あいつら、理不尽な額請求してきて……払えるわけないじゃない……」

震える声で少女が呟く。

「でも払えなかったら、この店を取り上げるって言うし……あの誓約書のせいで――」

彼女が言いかけた時、けたたましい音が響いた。

「おっかあ！」

空達が振り向くと同時に、少女は飛び出して行った。壊れた机の間に、泉が倒れている。

「いい加減にしろよぉ？俺ぁ金すられて胸糞が悪いんだよ」
男が椅子を蹴散らす。泉は娘に支えられながら起き上がった。男達は二人を見下ろした。
「金払え。払えないならこっから出ていけや」
すると、急に少女は立ち上がり、彼らを真正面から睨み上げた。
「……で、出ていくのはあんた達だ！」
「お千代！　やめな！」
泉は慌てて娘の手を引っ張ったが、千代はそれを振り払った。
「あんた達に出す金なんかないって、言ってるだろ！」
千代がそう叫んだ途端、男に首を掴まれ軽く持ち上げられた。
「母親といい娘といい……調子に乗りやがって」
首を締め付けられ、上手く呼吸が出来ない。
「何なら、お前の身体で返してもらおうか？」
千代の顔を覗き込み、男がニヤリと笑う。千代はべーと舌を出した。
「誰がそんなこと――あっ！」

右頬に衝撃を受け、千代は床に叩き付けられた。

「な――――」

泉達を静かに見守っていた空は、驚いて目を見開いた。同時に怒りも湧いてきた。

良明が空の様子に気が付いた時には、既に彼女は立ち上がって机の上によじ登っていた。

「待て待てーっ！　お前ら女に手ぇ上げるたぁ腐ったマネするじゃねえか！」

ドンと机を踏み鳴らし、空が響く声で怒鳴る。

良明は「あぁ……」と片手に顔を埋めた。

（待つのはお前だ……）

こうなることは、予想していなかった訳でもない。でも予想外に、空が切れるのは早かった。大きなため息を吐き、良明も立ち上がる。

「調子乗ってんのはテメェらだろーがっ！」

「はいはい、落ち着こうね。ていうか下りなさい、はしたない」

良明が空の腕を掴んだ。それでも空はそこから動こうとしなかった。

「な……お前ら！　こんなとこにいやがったのか！」

千代を殴った男が驚いた表情を見せ、空は薄笑いを浮かべた。

「お前らが結構な金持っててくれたんでなー、お陰で飯が食えたぜ。ありがとよ」

「挑発すんなって……」

良明が面倒臭そうに呟いた。一方男達は、額に青筋を浮かべ今にも暴れ出しそうな雰囲気をしている。彼らの様子を見て、良明はあることを閃いた。

「……空。お前特技は何だ」

「は？　スリだよ」

いきなり何聞くんだと、空は眉をひそめて良明を見下ろす。

良明は人差し指をちょいと動かし、彼女に顔を近付けた。空も怪訝そうに、頭を彼の高さに合わせた。

「要するに、あの紙がなければ良いんだろ？」

良明が小声で言い、ニッと笑う。空は彼の顔を見つめ、暫くしてから口の端を上げた。

「わかった、そういうことなら任せろ。でも援護はしてくれよな」

「わかってるって」

二人は頷き合い、男達の方へと身体の向きを変えた。空が机から身軽に飛び下りる。
腕組みしている男が空達を睨み付けた。
「金を渡す気あんのかぁ？」
そう尋ねられた空と良明は一度目を合わせ、同時に口を開いた。
「「ないね」」
男が懐から匕首を取り出し、それに倣うように他の男達もそれぞれが武器を手にする。良明は頭を掻いた。
「おいおい、物騒な奴らだな。空、お前だけ丸腰だけどどうする」
「へん、心配すんな。うちも武器くらい持ってら」
空は懐から棒のような物を取り出し、それを良明に見せた。何の装飾もされていない、真っ黒な懐剣だった。
「紙盗んだらよっしーに投げるからな、お前が処分しろよ」
それだけ言って、空は颯爽と男達目掛けて走り出した。
「え！？　おい！　もう少し作戦とか――何でお前は即行動なんだよ！」
馬鹿野郎！と叫びながら良明も彼女の後に続く。しかし良明は男達の方ではなく、泉達に走り寄った。

「お泉さん！　二人共奥に逃げててくれ！」

「……あぁ、わかった。無茶はしないどくれよ！」

急いで立ち上がり、泉は千代を連れて奥へと走って行った。
彼女達を見届け、良明は暴れ回っている空に目を向けた。小さいこともあってか、彼女は襲いかかる男達の隙間をすり抜けていく。

（刀相手がやけに慣れてるな……誰かに鍛えられたのかな）

空の動きにこっそり感心しながら良明は刀を抜き、地面を確かめるようにトントンと爪先で数回蹴った。

右に突き出された短刀をかわし、近くにいた男にわざとぶつかる。
ついでに足掛けをしてその男を転ばせた。

（よっしゃ、成功！）

空は手にした紙を握り締めた。

（後はよっしーに……えっ？）

良明の方へ振り返ったところ、そこに男が一人立ちはだかっていた。驚いたのも束の間、彼はすぐに崩れてしまった。空は何度も瞬きをした。更にその後ろに、良明が刀を手に立っている。

「空、紙は？」

「……あ、盗った！」

空は紙を握り締めた手を挙げ、それを見た良明が笑う。
「じゃあそれ持って調理場行け。そんで竈にでも放り込んでこい」
「おう！　任せろ！」
空が良明の横を走り抜けて行った。
一方、空に転ばされ尻をついた男が慌てた様子で懐を探っている。
「……ねえ！」
「あれー？　どうかしたのかなー？　無くし物？」
ニヤニヤ笑いながら良明が首を傾げる。
「てっ、てめぇら……っ！」
男は頬を引き吊らせて立ち上がり、良明を睨んだ。
「ぶっ殺せ！」
男が叫ぶと、彼らは一斉に良明へと襲いかかった。
「相手が悪かったな」
良明は刀を鞘に収め、床に転がっている男達を見下ろした。同時に後ろから軽快な足音と共に空が走り寄ってきた。

「よっしー、紙燃やしたからな！　お前大丈夫だったか？」
「余裕。こいつら片付けるから、空も手伝え」
「よしきた」
空は揚々と頷き、転がる男達を引っ張り始めた。
二人で彼らを店の外に放り出し、中に戻ると泉と千代が笑いながら近付いてきた。
「あんたらやるねぇ！　ありがとう！　すごく助かったよ！」
泉がバシバシと二人の肩を叩き、その激しさに空はよろめいた。
良明は苦笑して頬を掻いた。
「いや……なんというか、お泉さん達が殴られたのに責任感じてな」
「ん？　どうしてだい？」
泉が首を傾げる。
「あいつらから金盗んだのうちらなんだ」
空は愉快そうに笑った。
「あらまあ、あんた……そんなに小さいのに盗みができるのかい？」
「小さい言うなっ！　ガキじゃないから！　十六だから！」

「あら、十六？　本当に？　お千代より上じゃない、小さいわね」
泉が目を丸くする隣で、千代も驚いた様子で空を見ていた。空が眉を吊り上げる。
「だーかーらー、小さいって言――よっしー？」
良明に目をやると、彼は何故か戸口を見つめていた。空は眉をひそめて彼の顔を覗く。
「よっしー、どうしたんだ？」
そう言って袖を引っ張ると、良明はチラリと空を見てすぐに戸口に視線を戻した。彼は始終、険しい表情をしている。空は怪訝そうに首を傾げた。
「……血の匂いがする」
ポツンと呟くと、良明は足早に戸口へ向かった。
「血？」
空も引かれるように彼の後を追った。
良明が開いた戸の向こうの光景に、空は凍り付いた。地面にも家屋の壁にも飛び散った大量の血痕。そこはさっきとは一変して、血の海だった。
無惨に転がる首の無い死骸。斬られた箇所からは、まだどす黒い

血が溢れ出ている。その向こうに、この身体の持ち主達であろう顔の崩れた首が、転がっていた。通りにいる人々は悲鳴を上げ、ざわついていた。
その光景と匂いに、空は胃から込み上がってくるものを覚えた。

「……う……」

両手で鼻と口を押さえ、目をキツく閉じた。

遠い、過去の記憶が蘇ってくる。思い出したくない記憶が。

「馬鹿……何で見るんだよ」

良明が空の頭を引き寄せた。彼にしがみついて、空は呼吸を繰り返した。それなのに空気が身体に入っていかない。

「何だい？　どうかした――」

「来るな！」

良明が大声を出し、近寄ろうとした泉達は驚き足を止めた。

（誰がこんなこと……）

良明は軽く舌打ちした。どう見ても、この死骸は先程良明が気絶させた者達だった。目を離したのはほんの少しの間だった。その間に全員の首を斬れるとは、これを犯した者がどれだけの力量があるのか計り知れない。
嫌な予感が頭をよぎり、良明は無意識に腕を擦った。

「大して力も無いくせに出しゃばるから」

突然側から男の声がして、良明は反射的に空を後ろに庇った。戸口の横の壁に着流し姿の男が一人立っていた。彼は無表情で血の海を眺めている。黒い着物に返り血を浴びているのに、気にも止めていない様子だ。腰には二本の差料もある。

良明は目を見開き、同時に全身で警戒した。

「……お前……何で」

良明の口から漏れた言葉に、男はボサボサの髪を揺らし顔だけを向けた。その唇がニヤリと笑みを形作る。

「何でここにいるかって？　聞きたいか？」

良明は眉を寄せて彼を睨んだ。

「……別に、興味ない」

「まぁそう言うなよ。俺はな、あの日以来色んなとこを転々としてんだ」

良明の言葉を無視して、彼が勝手に話し出す。

空は良明の背後からそのひょろりとした男を盗み見た。

真っ黒な単衣に付いた血は乾き始めていた。背丈は良明よりも高かった。細く見えるのは単衣の色のせいで、良く見ればそれなりにがたいのいい男だった。太陽は照っているというのに、彼の髪は生気を失っているかのように光を反射させていない。それでも黒い目の奥には確かな光があった。

「面白い事探してんだ、暇だからな。そしたらこいつらに会ってよ。少し同行してたけど、もう飽きたな」

「……だから殺したのか？」

良明が低い声で尋ねると、彼は嘲るように笑うだけで何も言わなかった。良明は舌打ちした。

「相変わらず……無慈悲な野郎だな」

「慈悲をかけて何か得するか？　俺は仏じゃないぜ」

壁から離れ、男は死骸に近寄り、それを踏み付けた。反動で地面の血が飛び散る。

「ちょっと大人しくしてれば、調子乗って殴ってきやがる。うざいだけだ」

彼はそう吐き捨てるように言い、急に良明へ振り返った。良明は思わず身構えた。

「流石に、お前にこんなとこで逢うとは思わなかったな」

男は喋りながらゆっくり良明へ近づく。

「どうせ、まだ俺の事を恨んでるんだろ？　なぁ、良明」

嫌味に笑い、良明の顎に指を添えてクイと上を向かせた。良明はずっと嫌悪の眼差しを彼に投げていた。

「あの頃と全然変わってねえな、その眼」

「……触るな」

良明は彼の手を払い退けた。すると、急に通りが騒がしくなった。

「おっと、役人登場か。じゃ、俺はずらかるぜ」

そう言って、男は歩き出した。しかしすぐに立ち止まり、また振り返る。

「お前とはまた逢うかもな。お前が俺を恨んでる限り、な」

ヒラリと手を振り、男は今度こそ姿を消した。

良明は戸に寄りかかり、長く息を吐き出した。無意識の内に緊張していたらしく、それが解けてドッと疲れが溢れた。

「よっしー、あいつ知り合いか？」

突然背後から話し掛けられ、良明は驚いた。慌てて振り向くと、空が不思議そうにこちらを見上げている。彼女がいたことをすっかり忘れていた。

「まぁ……知り合いと言えば、知り合いかな」

「ふーん……何か気色悪い人だったな」

空は男が消えた方へ目をやった。その反対側から役人が走ってき

ている。

「……人じゃない」

良明がポツンと呟いた。空はまた良明を見上げた。

「あんなやつ……人じゃないよ」

彼は無表情で、何を考えてそう言っているのか空には分からなかった。

この日は泉の強い勧めから、彼女の家に泊まることになった。良明が最初それを断っていたが、空は強引に彼を引き止めた。あの後に出発しても野宿になりそうだったから、空にしては泉の申し出は有り難かった。それに良明の口数がやけに少なく、二人きりになるのが不安だったのもあった。

夜になり、二人は借りた部屋で就寝の準備をしていた。その間も良明の無言は続いた。

空は自分の布団にうつ伏せに倒れ込み、長く息を吐き出した。

「……火、消すぞ」

良明がチラと目を向けたので空は頷いた。行灯の火を吹き消し、良明も布団に横になった。

「……よっしー」

暗闇の中、空は小さく呼び掛けたが、彼からの返事はない。空は頬を膨らませた。

「もう寝たのかよ」

「……何だよ」

良明がため息混じりに尋ね返した。

「昼のあいつ……誰なんだ？」

空が尋ねても、良明は返答せずにまた黙り込んだ。

静かな時間が流れていく。沈黙があまりに長く、空が諦めて寝ようと思った時、良明が口を開いた。

「あいつは……おれの……師匠を殺した」

「え……？」

良明がため息を吐いたのが聞こえた。

「師匠って言うかおれが慕ってただけなんだけど……ガキの頃から面倒見てくれてたから」

空は無言で、声のする暗闇を眺めていた。

「……あの時おれは何も出来なかった」

その言葉の後に、微かに乾いた笑い声が聞こえた。

空は目を伏せ、闇を睨んだ。良明の話と共に自分の過去が頭に蘇った。自分はただ守られるだけで、弱い生き物だと思い知らされる、あの日の事が。空は唇を噛み締めた。

「……空？」

急に呼ばれ、空は小さく身体を震わせた。

「ん、何？」

「あぁ、寝たのかと思った……ガキだから」

「……てめぇ殺すぞ」

空が低く唸ると、良明は明るく笑って寝返りを打った。

「おれ、もう寝るからな」

「勝手に寝ろってんだ」

空も拗ねたように寝返りを打ち、良明に背を向けた。掛布団を握り締めて、暫く闇を見つめる。良明とは今日初めて出会ったはずなのに、それなのに。

「よっしー」

「……ん？」

良明が返事をすると、何故か空は黙り込んだ。不審に思い彼女の

方へ顔を向け、良明は首を傾げる。

「何だよ」

「あんたとうち……似てる」

「は？」

どこが？、と良明は尋ねた。

「――似てるよ」

空はもう一度繰り返し、すぐに目を閉じた。

「あ～あ、お泉の料理は名残惜しかったな」

朝日の降り注ぐ道を歩きながら、空が呟いた。今日も快晴で、穏やかな一日になりそうだ。

泉は今日の朝餉と、握り飯を拵えてくれた。昨日も思っていたのだが、泉の料理は美味かった。お袋の味、という表現が一番合う気がした。母親の料理なんて、一度も食べたことはないから、想像の内の話だが。

「お前さっきからそれしか言ってねえぞ。そんなに食いたいなら戻れば？」

良明は呆れ果ててため息を吐く。

「イヤ、めんどくさい」

あっさりと言い、空が大きな欠伸をした。

「じゃあ二度と言うな」

「はいはい、すみませんねうるさくて。あ～あ、お泉の料理食いたい」

空は頭の後ろで手を組んだ。良明は無視することに決めた。

「……なぁ、よっしーの旅の目的は？」

空は隣を見上げた。

「昨日聞いてねえよな？」

良明は前を向いたまま何も喋ろうとせず、空は頬を膨らませ彼の横っ腹を殴った。良明が盛大にむせた。

「いってぇな」

「シカトしてんじゃねえ！」

「……別にシカトしてねえよ。何言えばいいか考えてただけだ」

良明が怒ったように言った。空は彼を見上げたままキョトンとした。

「そんなに複雑な目的なのか？」

「んー……そこまでは……」

再び考え込むように良明が腕を組む。空は視線を彼から地面に移した。

「じゃあ……師匠の仇討ちとか？」

ポツンと呟いた彼女に良明は振り向く。少し俯く空は何故か拗ねた様子だった。そういえば昨夜その話をしたと、良明は思い返した。

「仇討ちね……まぁ、それを少しも考えてないっつったら、嘘になるかな」

「ふーん……」

「でもそれが本当の目的じゃない」

顔を上げた彼女と視線を合わせ、良明は話し続ける。

「おれがすぐ勝てるような相手だったら、昨日の内にやってたさ」

「それも……そうだな」

「あいつとはいつか殺り合うことになるかもな」

あまりに軽い口調で彼が話すため、空は呆気に取られて返す言葉が出てこなかった。

（殺り合うって……お前の刀、竹光……）

こちらは心配に思っているの、彼はけろりとしていた。余計に脱力してしまう。

「空は？」

「……何が？」

不意に良明が振り返り、空はやる気なく首を傾げた。

「旅の目的。聞いたならお前も話さないとな」

彼は悪戯っぽく笑った。

「うちは……簡単に言えば人探しだ」

「へえ、誰を？」

「……教えない」

空はプイと顔をそらした。

「えー、卑怯じゃねー？」

「うっせぇな、お前には関係ねぇだろ」

ぶっきらぼうに吐き捨てる空を見下ろし、良明は眉をひそめた。

「お前、何拗ねてんの？」

空はギクリとした。

「べ、別に拗ねてねー……から」

あからさまに動揺しきった声になった。

自分が良明の事について尋ねたら、彼はそれなりにちゃんと答えてくれる。それなのに自分の事となるとどうも話せなくて、それがもどかしくて、自分に腹が立つ。別に隠すことはないのだけど、ただ、昔の自分を思い出すのが嫌だった。

「おい」

思い詰めた表情で俯いていたら、良明が顔を覗いてきた。顔を上げると、彼がため息を吐く。

「あのな。拗ねるのは別に構わないけど、暗くなるなよ。うるさいのがお前の取り柄だろ」

目をパチクリとさせ、空は良明を見つめた。

「違うか？」と彼は首を傾げる。

良明の言うその取り柄はどうかと思ったが、でも何故か単純に嬉しかった。空はへへと笑った。自分の事を話すのはいつでも出来る。だから、ゆっくり少しずつでいいかなと、良明の一言でそう思えた。

良明が空の頭をクシャクシャと撫でた。

「シケた旅は嫌なんだろ？」

「……そうだけど……やめろ！　ハゲる！」

両手を使って良明の手を払い退けると、良明が短く笑い声を上げた。空は髪を整えながら彼を見上げた。

「で、今からどこ行くんだ？」

「さあ？」

良明は肩をすくめた。

「さあって……もしかして、今何も考えないで歩いてんのか」

「うん。行き着くとこに行けばいいかなーなんて」

「お前な……」

空は思わずうなだれた。こんなに何も考えないやつだとは思いもしなかった。

「それなら、空が行くとこあったらそっち行こうぜ」

良明にそう尋ねられ、空は暫く考えを巡らせた。

「ない！」

「だと思った」

良明が大きく頷く。

「じゃあもう行き着くとこに行くしかないだろ」

「……そんなんでいいのかよ」

「え、だって今までがそんなノリだったし」

笑いながら良明は手をプラプラと振る。

（うわぁ……後先不安）

そう思いながらも、人の事は言えないと気付き、口にはしない空だった。

一、遠い記憶　（3）

＊　＊　＊　＊　＊

――血の匂いしかしない。

戦は既に結果を与え、裏切り諸々により西軍は壊滅、四散した。戦は終わった。しかし辺りを漂う粉塵はまだ消えようとしなかった。それはまるで良明の晴れない心情を表しているようだ。周り中、数え切れない程の死体が転がっていた。

自分の腕の中に横たわる息絶えたこの人の顔を、どれぐらい見ているのだろう。既に死んでいたのだが、この人の首を狙い、多くの敵が襲いかかってきた。それを阻止する為に修羅の如く刀を振り、一人残らず斬り伏せた。

良明も槍で突かれ、鉄砲で撃たれ、具足はぼろぼろになり至る所に傷を負った。身体中に激痛が走り、血が大量に抜けて意識も朦朧としている。だが、それでも倒れようとはせず、この人の傍らを離れようともしなかった。

この人の死は突然すぎて、良明の未熟な心ではすぐには受け止められずにいた。

「――ここら、全部お前が殺ったのか？」

その男は突然、背後から話し掛けてきた。

「その紋……徳川か。若いのに大したもんだ」

傍らに折れて倒れている旗を見て、男は笑った。その男の笑い声は、何故かずっと耳に残る響きをしていた。

「勝ったっつーのに、浮かない顔だな」

目の前の男が自分の命を狙う敵であったとしても、闘う気力など、既になかった。何の為に生きているのかも分からない。

どうして自分は此所にいる。

無気力に、良明は口を開いた。

「なぁ……おれを……殺してくれないか」

死体を覗いて回っていた男は動きを止め、振り返った。

「死にてえならな、他人に頼む前に、てめえで腹切れ」

男は良明の髪を片手で掴み、上を向かせる。

「これだけ人斬ったやつが、腹切る度胸もねえのか。小僧」

＊　＊　＊　＊　＊

木の葉の隙間から朝日が降り注ぐ。
昨晩は町にも村にも着かない内に日が暮れたため、道からそれた所の森で野宿をすることになった。勿論、空はしつこく文句垂れた。
良明は暫く眩しい光を眺めていた。まだ朝も早く、冷えた空気が肌には痛い。

（……腹切る度胸……か）

髪を掻き揚げ、長くため息を吐いた。
二年前の戦の夢を見る事はこれまで幾度となくあった。多分、これからもあの日の事からは離れられないと、何処か諦めている自分がいた。逃げる事は出来ないのだ、と。
良明はやれやれと思いながら身体を起こした。同時に腹の上から何か重い物が転がり落ちた。それを見た良明は呆れ果てた。
今は地面で寒そうに丸まって寝ている空だが、さっきまで良明の腹を枕にしていた事は間違いない。現に転がり落ちた事が不服だったのか、眠りながら空は唸っている。
良明は彼女の頭を軽くはたいた。空はビクリと身体を震わせ、勢い良く起き上がった。

「っ……何！？　…ってよっしーか」

良明は彼女を睨んだ。

「人の腹を枕にすんじゃねえよ」

そう言うと、まだ頭が働かないのか、空はキョトンとした。しかし次の瞬間、彼女の顔が赤くなった。

「しっ……してねえよ！」

「はあ？　おれの腹から落ちたとこ見たんだけど」
良明が眉をひそめた。空は恥ずかしそうに視線を泳がせると、唐突に立ち上がった。その行動に良明は驚いたようだった。
「ち、近くに川あったよなっ、か、顔洗ってくるから」
身体の向きを変え、空は全速力で駆け出した。すぐに空の姿は見えなくなった。
「？」
一人残された良明は訳が分からない様子で首を傾げた。

川の畔に膝をついてバシャと顔に水をかけ、手で顔を覆ったまま空は固まった。
良明と共に行動して数日、既に彼といるのが当たり前になっている。彼の側にいると安心することを、空は覚えるようになっていた。
（あぁ……それにしても……はずかし）
両手の隙間から長いため息を吐く。
昨夜は満月だった。星の見えない夜空に、ぽつんと浮かび上がった白い丸。綺麗だと思うけれど、好きにはなれない物だった。
不安でたまらなかった。だから昨夜は良明にこっそり寄り添って寝た。彼の温かさは心地よく、不思議と落ち着けて眠ることもでき

た。
空は手を下ろし、水面に写った自分の顔をぼんやり見つめた。
「おら」
突然、そっけない言葉と共に横から手拭いが差し出された。そちらを見ると二人分の荷物を持った良明の姿があった。空は彼の姿を暫く眺めてから、手拭いを受け取った。
「ありがと」
彼女が顔を拭く傍らで、良明も数回顔を洗った。春と言えど川の水は氷のように冷たい。良明は空から手拭いを受け取り、顔を拭いてから川の水に付けて軽く洗った。
水が揺れる様子を眺めながら、空は思い付いたことを口にした。
「今日も町とかに着かなかったらどうすんだ？」
「いや、もうすぐ着くはずだ」
空は良明へと振り向き、眉をひそめた。彼の言い方が、まるで初めからどこかを目指しているかのようだった。行き着く所に向かっていたのではなかったのだろうか。昨日空達が発った村では、良明は道を聞いているような素振りは一切見せなかったはずだ。
「どこに行――――」
――――けて……！

空は弾かれたように顔を上げた。

「どうした？」

手拭いを絞りながら、良明は彼女へ目をやる。

「声がした」

「声？」

良明が怪訝そうに尋ねた。

空は立ち上がって辺りを見渡した。幻聴なんかではなかった。確かに聞こえたのだ。悲鳴のような子供の声が。

一度首を傾げてから良明は耳を澄ます。

「たすけてぇ！！」

二人は同時に川の上流へ顔を向けた。子供らしき姿が浮き沈みしながらこちらへと流れてきている。

「ほら、やっぱり」

「あぁ……本当だったな」

良明が面倒臭そうに答える。

「よっしー助けてやれよ」

「あ、やっぱりおれなんだ」

「当たり前だ、うち泳げねえもん」

胸を張って空が言う。

「それ自慢にはならねえぞ……」

呆れたようにため息を吐いてから、良明は裸足になって川に入った。流れはそれほど速い訳ではない。しかし水かさが良明の胸下まであり、子供にとってはかなりの深さである事が分かる。

泣きじゃくっている子供が良明の所まで流れ着き、その子供を片手で掴み、良明は空がいる岸へと戻った。

「うっ……ぅ……うわぁぁあぁぁあぁっ」

「はいはいもう大丈夫だから、泣くな」

腕に力いっぱいしがみつく子供の頭を良明は乱暴に撫でる。子供を抱えたまま岸に上がると、空が心配そうに見上げてきた。

「空、ゆうべ寝たとこに火おこして来てくれ」

「あっ、うん分かった」

空は慌てて来た道を引き返して行った。

それを見送った良明は子供を畔に下ろし、おもむろに自分の袴の帯をほどき始めた。

「あーあ……朝っぱらから水に浸かるって……空のやつ泳げねえとかありえん」

ぶつぶつ文句垂れながら良明は着物を脱いでいった。彼の傍らにいる子供は未だにしゃくり上げている。良明は子供を見下ろし、やれやれと肩をすくめた。

見た目は七、八歳くらいで、髪を肩の高さで切り揃えている。肌が透き通った白さをしていて、一見少女のようで、角度を変えると少年のようにも見えた。

良明は子供の前にしゃがみ込んで顔を覗く。

「お前も着物絞らねえと、風邪ひくぞ……て言うかお前いいナリしてんな。いいとこの子供か？」

良明は子供の着物の袖を触った。着物の素材は絹のようだ。白地に淡い色で何かの模様が描かれていて、緋色の袴も上等そうだった。

「白に緋って……巫女みたいだな」

良明は笑って言い、自分の着物を絞った。水が滝のように出てくる。そして絞り終わった着物の袖にまた手を通した。いつの間にか泣き止んだ子供は、興味深げに良明を見上げていた。

「冷てー……今日で乾くのかこれ」

半分諦め気味に良明が呟いた。それを聞いた子供は急に顔を輝かせた。

「わたしが乾かします！　助けてくれたお礼に！」

袴の帯を締めていた良明が「え？」と言うのと同時に、子供は懐から何かを引っ張り出した。ちらと白い石のようなものが見えた。すぐ両手で握り締めたため、それが何だったか良明には分からない。

小さな口が動き何かが呟かれた瞬間、どこからともなく突風が良明を襲った。

「わっ」

良明は咄嗟に両腕で顔を庇った。不思議と温かいこの風は、長いこと良明達の周りを巻き上げるように吹いていた。

がさがさと草木の揺れる音に空は振り返った。良明が子供の手を引いて現れた。

「よっしー遅かったじゃないか。風邪ひく……何か乾いてる？」

空は不審そうに眉をひそめた。見た目で分かる程、良明達の衣服に濡れた様子はなかった。良明が困惑したように頭を掻いた。

「いや、うん……乾いてる」

「は？」

空はポカンと口を開けた。

「こんな早く？」

「おれにも分かってねえんだよ……説明してもらったけど」

そう言って、良明は隣の子供に目を向けた。子供はニコニコして二人を交互に見つめている。空はどこか嬉しそうにしている子供へ

視線を移した。

「お前が何かやったのか？」

「うんっ」

子供が揚々と頷き、空は少し呆気に取られた。

「名前は？」

「円！」

円（つぶら）と名乗った子供は、どこからどう見ても七、八歳くらいのただの子供だった。空は良明を見上げて首を傾げた。彼は肩をすくめるだけで何も言わない。空はまた円に目を向けた。

「円……溺れたとき頭打ったんじゃないか？」

「ぇえっ、打ってないよ。ちゃんとわたしの力だもん」

円は怒ったように頬を膨らませた。良明が円の頭に手を置き、神妙に頷く。

「こいつが言ってることは本当だと思うぞ。実際おれが体験してる訳だし」

そう言った彼の声も、まだどこか半信半疑だった。空は自分の髪を掻いた。

「んー？　お前術か何かが使えるってことか？」

「んー……」

円は一瞬宙を仰いだ。そして何も言わないまま空に近付いて隣に座り、懐を探った。円が取り出したのは、紐が通された小さな乳白色の石だった。丸の一ヶ所を引っ張ったような形――いわゆる水滴の形――で、細まった方に穴が開けられおり、厚みは然程ない平石だ。空は怪訝に思いながら、石を握り締める円を見つめた。その後ろに良明が近寄る。

円の口が動き、小さな声で呟いた。空が何かの歌の一節かなと思った時、周りの木々がざわめきだし、突然、目の前の焚火が大きくなった。その爆発したような炎の音に空は身体を震わせた。

「……おい、空」

ごうごうと爆ぜる炎を見つめていると、良明がどこか緊迫した様子で空の肩を掴んだ。顔を上げて、空は辺りを見渡した。

青々としていた木々の葉が次第に色付き始め、赤や黄に染まっていく。瞬きを数回繰り返す内に自分の周りがすっかり秋の装いになり、空は目を見張った。時期の違う日差しのせいか、紅と黄金の色合いは、目を閉じたくなる程に眩しく鮮やかに感じられた。

そしてその葉も枯れ、一枚、また一枚と地面に落ちる。枯れ葉がはらはら散っていく様に、急に一人ぼっちになってしまったような、心細くなる程の不安を覚えた。生気を失って一斉に萎れていく音が、不気味さを際立てる。そこは一転して、寒々しい冬景色となった。ただその光景に違和感を覚えるのは、空気の温かさが変わっていないからだった。

視覚に感覚が追い付かず、混乱は増すばかりだ。鳥肌の立った腕を擦り、空は息を吸い込んだ。

その時、みずみずしい花と緑の匂いが胸を満たし、枝から小さな芽が息吹を上げ始めたことに気付いた。これまで嗅いでいた匂いに戻り、安堵を覚えた空は噛み締めるように深い呼吸を繰り返す。

円が振り返ってほうと息を吐いた。

「ここじゃこれが精一杯です」

円は手の甲で額を拭い、更に告げる。

「腕を見てみて」

空は怪訝に思いながらも袖を捲った。自分の腕を見下ろして空は息を呑んだ。昨夜、この森に入ってくる際に木の枝が当たってできた切傷が、今や跡形もない。一瞬、切傷は夢で見たことだったのだろうかと考えたが、切ったことによって血が出たことも、良明に文句垂れたことだって空は覚えている。塞がったのではなく、元から傷などなかったかのようにきれいに消えてしまったのだ。第一、円が怪我の箇所を的確に当てたことにも驚いた。何せ円には怪我をしていたことさえ教えていなかったのだから。

空は思わず困惑した視線を良明へ投げた。彼は空同様の表情をして円を見下ろしている。

「円……これどうやったんだ？」

良明の声には何とか自分で理解しようと考え込む色が混じっていた。にこにこと笑う円へ、空も顔を向けた。

「自然の力を借りました。ちょっと疲れもなくなってるでしょ？」

円の言葉に、空と良明は顔を見合わせた。言われてみれば、先程に比べて身体が軽い。野宿をした時によくある、拭い切れずに残った疲労が殆どなくなっている。
二人して黙り込んでいると、円は慌てて話し出した。
「ごめんね。説明もなしにいきなりこんなことされたら、驚くよね」
「いや、まあ、な」
「何が何だか」
空と良明が曖昧に返し、円は説明のために座り直して姿勢を正した。
「木や草、それから水とか、自然には治癒の力があるの。あまりに小さい力だから、人は気付かないけど。森や山で空気が濃く感じたことってない？」
少し考えてから空がコクと頷く。
「それが自然の力。病気で静養するなら自然のあるところがいいっていうのも、そのせいなんだ」
「……何で円がそんなこと知ってんだ」
自ずと空は不審がる口調になった。自分よりも幼い、小さな子供の口から出てくるにしては難しい内容だった。
空の問いに、円はにこりと微笑む。その笑顔は、不自然に思える程に落ち着いている。

「太古から、人は恵みを受け、自然は崇められて互いが尊重し合うことで共存が成り立ってきました。その均衡が崩れないようにするため、わたし達が調律しているのです」

円は小さな両手で、乳白色の石を握り締めた。

「人と自然の間で調和を築くのが、わたし達の役目」

空はポカンと開いていた口を慌てて閉じた。円の話は現実離れしているようで、それでも自分自身何度も経験してきたことのような、そんな感覚を引き起こした。その時不意に自身の影が動いた気がして、空は微かに肩を震わせた。小さな恐怖が胸の中で生まれたことに気付き、空はそれを押し殺した。何に対しての恐怖だったのかは空自身、分かっている。

無意識に顔をしかめていると、急に円がはにかんだように笑った。

「っていうのは母上の受け売りなんだけどねー」

更に明るい声で笑い飛ばす円を見て、空も良明も脱力感を覚えた。

「要はわたしにはそういう力があるってこと。自然の力を引き出して人に与えることができるし……逆に人の命を奪うこともできる」

「……そういう怖いことあっさり言うんじゃねえ」

気分が悪くなったように小さく呟く空の傍らで、良明は微かに笑っていた。

時に荘厳な雰囲気をまとい、時に幼くなる円を、空達は自然と超越した存在なのだと認識して、そして不思議とすんなり受け入れることができた。空は自分自身が少し異質故に多少のことには動じな

くなっていたから、円という存在も認められた。しかしどこからどう見ても普通の侍の良明が、何故驚いた風も見せずに笑っていられるのだろう。

空がチラと良明を見上げると、彼は怪訝そうに視線を合わせた。

急に円が真顔になり、探るように空の目を覗き込んでくる。そのまま暫く考えた末、円はゆっくり口を開いた。

「……さっき怪我を治した時もおかしいと思ったんだけど、空ってもしかして――」

円の続きの言葉は良明は聞くことは出来なかった。空の手が円の口を塞いだからだ。円は苦しそうにもがいている。良明は首を傾げながら二人の様子を見ていた。

「どうした？」

「えっ！　あ、いや、何でもねえんだ」

振り返った空の顔にはあからさまに焦燥が浮かんでいる。それを隠すかのように、空はまた円へ振り返り顔を近付けた。

良明は僅かに眉をひそめた。

「いいか、何も言うなよ」

そう釘を打ってから空は手を外した。解放された円は一息入れ、空を見上げて首を傾げた。

「隠してるの？」

「……そんなんじゃねえよ」

弱々しく否定した空だったが、動揺は隠し切れていなかった。円の術を見た時、自分の異質さを改めて実感させられた。自分はただの人だと何度言い聞かせても、抱えている存在のお陰で自分が何者なのか分からなくなる。

満ちていく月が空なら、欠けていく月はそいつだ。陰と陽の関係が、幼い頃から同じ身体に共にある。

円が静かに告げた。

「隠してて正解だよ、あまり外に出すものじゃない」

「え？」

「同じ類のを知ってるから、何となく分かるんだ。わたしと似ていて、極端に違う」

「……円は、これが何なのか分かるのか？」

胸に小さな希望が生まれた気がした。空は思わず円の肩を掴んだ。しかし、円は微かに首を横に振った。

「ごめんなさい、はっきりは分からない。けど」

「けど？」

空は肩を落としかけて、慌てて持ち直した。

「母上なら分かるかもしれない」

「母上？」

「うん、すごいんだよ母上。何でも知ってる」

母の話をする円は、見た目相応の無邪気さが溢れていた。空は急ききって尋ねた。

「円の母親に、うちも会えないか？」

「うーん、少し難しいかもしれない。わたしの家、結界が張ってあって簡単には出入りできないんだ」

円が申し訳なさそうに身体をすくめた。

「そっか……」

空が僅かに俯くと、良明が静かに声を掛けた。

「なあ、話が全然見えないんだけど」

「うっ……それは……夜になれば分かる。たぶん」

「たぶんってなんだよ。おれにも害が及ぶことなのか？」

「それは……そうなるかもしれない。たぶん」

どの問いに対しても空は曖昧な返事しかしなかった。

空が隠し事をしているのは一目で分かる。だがその隠し事が何なのか、数日共に行動していても良明には到底理解できるものではな

かった。それぐらい、そのことに関して空は無言を貫いていた。
良明自身は詮索するのは好きでなかったし、空が伝えたくないことを無理に聞く必要もないと思っている。それに夜になれば分かると彼女は言ったのだ。待つくらいならできる。

「まあいいや、その内分かるなら。話はこれぐらいにして、そろそろ行くぞ。明るい内に町に入っておきたい」

そう言って良明は立ち上がり、円を見下ろした。

「円はどうする？　何なら送っていくけど」

「本当に？　じゃあ江戸まで一緒に行ってほしいな」

円が嬉しそうに笑った。

「なんだ、ちょうどよかったな。おれらもそこに行くつもりだったんだ」

良明があまりに自然に返したものだから、空はそのまま聞き流すところだった。彼の言ったことは聞き捨てならず、空は眉をひそめた。

「いつ江戸に行くって決まったんだ」

「言ってなかったっけ」

「聞いてない！」

「じゃあ今言う。江戸に向かう」

あっさりと良明が言い、その飄々とした様に空は無性に腹が立った。何故行き先を一人で、しかも勝手に決めるのか。それでは共に行動する意味がないではないか。

空が無言で怒りの抗議をしていると、良明はやれやれと頭を掻いた。

「ここらに来てから気付いたんだよ、このまま行けばもうすぐ武蔵に入る。だから、江戸に行っておこうと思って」

「ふーん」

空は頬を膨らませたまま呟いた。

「何だその不服そうな顔は。江戸はおれの生まれ故郷だ。二年帰ってなかったから寄りたくなったんだよ」

「ふーん」と空はまた呟いた。

江戸に興味がない訳でもない。空自身は江戸を見たことがなかった。良明の故郷だということにも惹かれる。それに今や天下人となった徳川の本拠地を見てみたいという気持ちも少なからずあった。ただ良明が何も告げずに行き先を決めたことが不満なだけだった。

不意に良明が小首を傾げる。

「空が行きたいとこあるなら、そっち行くけど」

「……ない」

「だよな」

良明がケラケラ笑うのを、空は睨み上げた。その傍らで、円が面白いものを見るような目で二人を交互に眺めていた。

一、遠い記憶　（4）

武蔵で初めての町に入った時には既に昼を回り、日は傾き始めていた。町と言っても小さな所のようで、民家が軒を連ねてはいるが人通りは至極まばらである。

大通りから別れた暗い小道に入ったところに三人はいた。空と良明、それから円（つぶら）は家屋の影から、店に入っていく男を覗き見た。足元にしゃがんでいた円が慌てて二人へ振り返る。

「あれ何のお店かなぁ」

「どう考えても質屋だろ」

空が平然と答えると、円が仰天した声を上げた。

「ええっ、売っちゃうってこと？」

「そりゃ盗んだら売るって。うちだってそうする」

「えーっ」

円が悲鳴のような声を出し、空は思わず耳を塞いだ。

「そんなの困る！」

「お前が盗まれるのが悪い。何ですぐ気付かなかったんだよ」

「だってぶつかっただけだったから……」

ムスッとして円は両膝を抱えた。

先程、円の乳白色の石が盗まれた。それはほんの一瞬の出来事で、男とぶつかり、暫くしてやっと首から石がなくなっているのに気付いた。

あの石は円が円であるための証のようなもので、あれがなければ能力も半減してしまう。それに母から授かった大切な石なのだ。無くしたと分かれば、母はきっと悲しむ。

拗ねた様子の円を見下ろして空がため息を吐いていると、良明が前方を指差した。

「出てきた」

「え、もう？」

空はまた店へと目をやった。店から出てきた先程の男が気落ちした様子で店の暖簾をチラと見上げ、そして片手を握り締めて歩き去ろうとしていた。成程、と思いながら空は円に視線を移した。

「よかったな円、売れなかったみてえだ」

「ホントに？」

円が顔を輝かせて振り返った。空も笑って頷く。

「ああ、うちが取り返してきてやるよ」

そう言って駆け出した空の背中を、良明はため息混じりに見ていた。安堵しながら彼女を見送っていた円は不思議そうに彼を見上げた。

「どうしたの？」

「いや、空だとガキ扱いされるのがオチなんじゃないかと思って。おれ達もついてこう」

唐突に歩き出した良明を、円は慌てて追いかけた。

男は橋の欄干に寄りかかって頬杖をついていた。彼に近付き、空は自身の腰に手を当てた。

「おい、オッサン」

「あ？」

無気力に振り向く男を、更に睨み上げる。

「あんたが盗んだ石、うちの連れの物なんだけど。返せよ、どうせ売れなかったんだろ」

「ああ、これか」

男は手にしていた石をプラプラと揺らした。

「綺麗だからいくらか金になるかと思ったが……価値はそこら辺の石ころと大差ないらしい」

「お前みたいなんがそれの価値なんて分かるわけねえだろ」

「……言葉遣いには気をつけろよ、ガキが」

急に男の声が低くなり、空は内心怯んだ。数年前まで一緒に暮らしていた男が完全に切れた時のことを何故か思い出し、背筋が寒くなった。

気を取り直して言い返そうと口を開いた時、急に肩を叩かれて空はそちらに顔を向けた。良明が呆れた顔をして立っている。

「こうなると思った」

「どういう意味だ？」

空は眉を寄せて尋ねたが、良明は何も答えずに男へ視線を移した。

「それ、こいつの親の形見なんだ。返してくれないか」

良明の腰にしがみついて顔を覗かせる円の頭を、良明はぐいぐいと押さえるように撫でた。男は品定するように良明と円を交互に眺め、暫くしてから口を開いた。

「金にならん物を持ってても仕方ねえしな」

そう言って、男は良明に石を投げた。それを片手で受け取り、良明は苦笑した。

「悪いな、金にならなくて」

「ふん」と鼻を鳴らし、男は背を向けて去っていった。

（何か同じ匂いがするな）

遠ざかる男の背中を見ながら、良明はこそりと思った。彼も元は武士なのではなかろうか。何があって町人になったのかは知らないが、身のこなしも仕官当時の癖が抜けきれていないように思えた。それに気付く自分も、抜けきれていないのだな、と良明は内心ため息を吐いた。故郷を出て二年、その年月は人を変えるには長いようで短いものだ。

男を見送り、良明は円の手に石を載せてやった。円は嬉しそうにそれを握り締めた。

「ありがと――――あ」

急に、円は眉をひそめ、暫く考え込んだ。空も良明も、不思議に思いながら円を見つめた。

「さっきの人、追いかけてきます」

やはり唐突に円が言い、男が向かった先へ駆けて行った。

「あ、おい」

良明が呼び止めたが、円は振り向きもせずにずんずんと突き進んでいく。傍らで空が呆然と呟いた。

「何なんだあいつ」

「さあ」

二人は首を傾げ合い、円の後を追った。

六間先にある裏店への小道を見つけ、空と良明はそこに踏み入った。円の緋の袴がこの辺りで最後に見えたので、ここに入ったのだろうと推測した。

その裏店は古びてはいるものの人は多く、井戸端会議をする数人の女房の周りを小さな子供が遊び回り、にぎやかだった。少しの懐かしさと居心地悪さを感じながら空がきょろきょろ見渡していると、良明が隣から離れ女房達に近寄っていった。

彼女達に話しかける良明の背を、ポツンと佇んだまま空は眺めていた。何かを尋ねている彼を待っている間、手持無沙汰なままぼんやりしていると急に袖を引っ張られ、空は驚き振り返った。そこには円よりももっと幼い少女の姿があった。彼女は不思議そうな表情で空を見上げている。

空は少し困惑しながら腰を折り、少女と目の高さを合わせた。

「お前ここの子か？」

「るり」

小さな声で彼女が答え、それが名前なのだと空は解釈した。

「おねえちゃん、だあれ？」

るりに尋ねられ、空は腰を伸ばしてから答える。

「うちは空だよ。るり、赤い袴着た子、見てない？」

空が首を傾げると、るりは「あっち」と言って空の後ろを指差した。るりの言う方向へ振り返ると、ちょうど良明がこちらへ戻ってくるところだった。

「円ここに来たって。さっきの男のことも少し聞いた……って何だその子」

良明がおかしそうに、空の袖を掴んでいるるりを見下ろした。空も戸惑いながらるりを見つめた。

「いや、何故か離してくれなくて」

「気に入られたわけか……空が小さいから、何か通じるものを感じたんだろ」

「小さい言うな！」

ケラケラ笑う良明を、空は睨み上げた。

「それでっ、円は」

「ああ、とりあえず行ってみよう」

良明は空を促して歩き始めた。彼の後を、るりに袖を掴まれたままの空が追った。

格子窓から、円は家の中を覗いていた。そこら辺にあった桶を踏み台にしてはいるが、背伸びをして漸く目が格子の高さに届く。

家の中には、先程の男と他にもう一人、部屋に敷いた布団に座る少女がいた。誰だろうと思いながらうーんと唸っていると、急に身体が浮き、桶から足が離れた。

「わあっ」

「円、一人で突っ走るのやめろ」

振り返ると、良明の顔がすぐ側にあった。彼が円の身体を持ち上げている。

「なんだ、良明かあ。どうしたの」

円がにこにこと笑いかける。

「どうしたの、じゃねえよ。何見てたんだ」

良明の隣で空は怒ったように言った。彼女とその傍らのるりを見下ろし、円が少し首を傾げる。

「その子は？」

「知らん」

空がそっけなく返した時、急に円が覗いていた家の戸がするすると開いた。もしや先程の男が出てくるのではと三人三様に慌てたが、隙間から顔を覗かせたのは少女だった。淡い鶯色の寝着のような薄手の着物を着て、肌は青ざめて見える程に白い。

「あのう……うちに何か用でしょうか」

少女はおどおどとした様子で首を傾げ、三人の顔を見つめた後、るりの姿を捉えた途端目を丸くした。

「るり、どこ行ってたの」

「じんじゃ」

るりが空の傍らを離れ、少女の腰にしがみついた。

「神社……そっか」

少女は優しく微笑み、しゃがんでるりの目の高さに合わせた。

「お姉ちゃんは大丈夫。父さんがご飯作ってるから、るり手伝ってあげて」

そう言って、頭を撫でてやると、るりは頷いて家の中へ駆けて行った。彼女を見送ってから空が訊いた。

「あんた、るりの姉ちゃんか」

「はい、なえと言います」

なえと名乗った齢十四、五ぐらいの少女は、不意に眉を曇らせる。

「……るりか父が、何かしたのですか」

「ううん、良いんだ、被害はなかったから。それよりなえさん」

答えたのは円だった。空も良明も内心驚き、怪訝に思っていた。さっきから円の言動が唐突で、それに何を考えているのか二人には分からない。
円はなえの前に立ち、両手を差し出した。なえは不思議そうに瞬きを繰り返し、円を見つめる。

「ちょっと手を貸してください」

「手を？」

首を傾げながらなえは円の手に自分の手を重ねた。彼女の手を掴み、円は目を閉じる。途端、突風が吹き抜け、戸をガタガタ鳴らし、円が載っていた桶を吹き飛ばした。円以外の三人は思わず声を上げた。

風が止んだ頃には円は手を離して身体の後ろに組み、にこりと笑っていた。

「へへ、ありがとう。それじゃあ、わたし達、行くね」

「う、うん」

なえはきょとんとして、円の勢いに合わせて頷いた。踵を返す円の後を、空と良明は再び怪訝に思いながらついて行った。

裏店の小道から大通りへ出た三人は一斉に一息入れた。そして空が円へと振り返る。

「で、何だったんだ」

「あー、ごめんなさい。説明しなくて」

円が申し訳なさそうにちろと舌をだす。空はやれやれと腰に手を当てた。

「ホントにな。説明よりまず行動、ってのどうかと思うぞ」

「それはお前もじゃないか。考えもなしに即行動、円より悪い」

「うるせぇ」

呆れたように言う良明の腕を空は殴った。傍らで円が笑い声を上げ、そして浮いた涙を拭いながら話し始めた。

「あのね、石が返ってきた時、あの男の人の感情が流れてきたんだ」

「感情が？」

また意味の分からないことを言い始めた、と空が眉をひそめる。

「感情というか、わたしが感じられるのは人の病だから、あの人の心の病、って表現の方が合ってるかな」

「心の病……なえって娘のことか」

良明が考え込みながら答え、円はまた頷いた。訳が分からず、空は怪訝そうに首を傾げて二人を見つめた。

「どういうことだ？」

「あの人、六郎って言うんだけど……娘のなえが大病らしいんだ。医者もお手上げの、不治の病。このままいくと死ぬらしい」

「うそ」

空は驚愕した。

確かになえは顔色が悪かった。だが立って話も出来たし、優しく笑ってもいた。その彼女が死に向かっているとは予想だにしなかった。

「なえさんを治してやりたくて、六郎さんは悩んでた。心が病んでしまうくらい」

円が深刻そうに付け足す。

「このままなえさんが亡くなったら、六郎さんも、きっと危うくなる。そしたらるりちゃんが危ない」

「……母親はいないのか」

「るりを産んで亡くなった、って」

良明が声をひそめて言い、空は僅かに顔をしかめた。

「わたし、なえさんを治す」

胸の前で両手を握り締め、円が言った。それを聞いた空は眉を上げ、少し声を大きくした。

「何で円がそんなことしなきゃならねえんだ。その六郎ってやつは、お前から石を盗んだんだぞ」

「ちゃんと返ってきたもん。それに六郎さんが石を盗んだのは、なえさんの治療代が欲しかったからだって、空にも分かってるでしょう」

円も負けじと空を睨んだ。空は額に手を当て、首を振った。

「やめとけって。お前の力は人に見せるものじゃない。うちにそう言ったのは円だろ」

「そうだけど……」

円は一瞬言葉を詰まらせ、それでもなお口を開く。

「さっきなえさんの手を触って、病気の具合が分かったの。今なら少しの時間で治せると思うんだ」

「あのな」

「空はわたしが治せるのを知ってて、なえさん見放すの」

円の挑むような視線に、今度は空が言葉を詰まらせる番だった。すると急に隣で良明が笑い声を上げた。

「そこまで言われたら、空が引くしかねえと思うけど」

「はあー？」

空は不服そうに良明を見上げた。

「おれは円の意見に賛成。円が六郎に石を盗まれたことも、六郎の娘が病気なのも、偶然だけど偶然じゃない気がする」

「んんー？」

良明の言っていることは解釈できるのだが、何かが胸につっかえているようで上手く飲み込めない。それに簡単に言いくるめられた気がして、空は片手でぐしゃぐしゃと頭を掻いた。

一方で円は顔を輝かせ、有難そうに良明を見上げた。

「二対一で空の負けだね」

「負けって何だ、負けって」

空が憤然と言うのにも構わず、円は良明の袖を引っ張る。

「どうやって治すか考えよう。わたし町の中じゃあまり力発揮できないから」

「ああ、森の中とかがいいんだっけ」

自然の力を引き出して人間に与える、だったか。朝の話を思い返しながら良明が言うと、円が頷いた。

「神社があるみたいだから、とりあえずそこに行こう」

「神社？　どこにあるんだ」

「神社は大体、山の麓に建てられるの。だから、たぶんあっち」

円が遠くに見える山並みを指差した。それを眺め、良明は頭を掻く。

「じゃあ今日はそこに寝泊まりさせてもらうか、宿代も浮くし。空もそれでいい……ってめちゃくちゃ拗ねてんな」

振り返ると、最大限まで頬を膨らませた空の顔があり、良明は思わず苦笑した。

「お前の言い分はわからないでもねえよ。何のために治してやるのか、とか。初対面でそこまでする必要があるのか、とか。でも考え出すときりがない」

そう言いながら良明は腕組みする。

「おれと空だけだったら、なえにも会わなかっただろうな。そんでなえは病で死ぬだけだ。だから円がここにいるのも、運命なんだと思う」

「運命とか……くせぇ話」

空が呆れたように言うと良明は愉快そうに笑った。

「ははは、おれもそう思う」

彼の気楽な様子に脱力感を覚えた空は、大袈裟に肩を落とした。そして観念したように口を開いた。

「……わかった、協力するよ。ま、うちも宿じゃない方が少しありがたいからな、今日は」

「ああ……」

またも今朝のことを思い返しながら、良明は中途半端に頷いた。空に何があるのか未だ知らないため、何と返せばいいのか分からない。暫く彼女を見つめた後、良明は右手を伸ばして彼女の頭をぽんぽんと撫でた。

「……何だよ」

空が眉をつり上げたのを見て、良明は肩をすくめるだけで特に何も言わなかった。そして円に視線を移す。

「円、神社の場所、分かるんだろ？」

「うん、こっちだよ」

円が意気揚々と頷き、良明の袖を引っ張って歩き出した。

二人の少し後ろを歩きながら、空は浅くため息を吐いた。さっき良明に頭を撫でられたのは、気遣ってくれての行為なのだろう。何も訊かれないのは有難かった。空自身、訊かれてもどう説明すればいいのか分からなかった。説明できたところで良明が信じてくれるかさえ分からない。だから実際に見てもらう方が早いのだ。

気味悪がられてもしょうがないことだとは承知している。拒絶さ

れたその時は連れ立って行動するのを止めるだけだ。だけど、良明は円を受け入れられたのだから、もしかすると自分も受け入れてもらえるかもしれない。
空は独りよがりな淡い期待を抱いていた。

＊　＊　＊　＊　＊

――チリン、と鈴が鳴った。
発砲音が絶えず鳴り響き、怒号が乱れ飛ぶ。戦の口火は切られ、戦場は一進一退を繰り返していた。騒然とした中で、その小さな鈴の音はやけに耳に響いた。良明は足を止めて振り返り、濃い霧の中で目を凝らす。
二人の男の影があり、互いに向き合っているようだった。霧が深くて何をしているのかよく見えない。良明は怪訝に思いながら、霧をかいくぐるように彼らに近寄る。
「宗佑さん？　……一陽――――」
彼らまであと数歩というところで良明は足を止めた。状況をすぐには理解できなかった。
一陽（かずひ）の刀が、宗佑（そうすけ）の胸を貫いている。
どういうことだ。何が起こっているのだ。
答えのない問いが頭の中で渦を巻く。

愕然と二人を見つめていると、宗佑の震える手が一陽の肩を掴み、小さく何かを呟いたようだった。すると一陽が身を引き、宗佑から刀を抜いた。血を吐きながら宗佑がその場にドッと崩れ落ちる。血に濡れた抜き身の刀を身体の横で握り締め、一陽は横たわる宗佑を見下ろしていた。

何故こんなことになった。

良明は既に考える余裕すらなくなっていた。

呆然としていると、突然一陽が振り返り目が合った。彼の黒い瞳と冷たい表情に、背筋が寒くなる。良明は咄嗟に、自身の腰の刀に手を伸ばしていた。

自分が最も慕う人を、この男は殺した。許せなかった。だが、この刀を抜いて彼を斬る覚悟も、良明には備わっていなかった。一陽もまた、良明が幼き頃から面倒を見てくれた、慕っている人だったから。戸惑いと躊躇にさいなまれ、微かに手が震える。

刀を抜こうか抜かまいか迷っていると、突然小さな声がした。

「良明」

宗佑の声だった。慌てて目を向けると、彼はうつ伏せのままこちらを手招いている。宗佑はまだ息をしていたのだ。何故既に死んだと勘違いしていたのだろう。手当てをすれば助かるかもしれない。

良明は駆け寄って宗佑の傍らに膝をつき、彼を仰向けにして顔を覗き込んだ。

「宗佑さん」

「……何だその顔。戦はまだ続いてるんだぞ」

宗佑が渇いた笑い声を上げる。良明はかぶりを振り、急ききったように話した。

「一旦陣に戻りましょう、早く手当てを――」

「いや、いい」

ゆっくり首を振って、宗佑は未だ傍らに立っている一陽に目を向けた。一陽は相変わらず無表情だった。

「……悪いな、一陽。お前には迷惑をかけた」

何故宗佑が詫びているのか良明には理解できず、一陽を見上げるしかなかった。一陽は暫く目を閉じてから、良明に睨むような視線をやった。

「良明、恨むなら俺を恨めよ。相手なら、いつでもしてやる」

「……どういうことだ」

良明が尋ねたにも関わらず、一陽は身体の向きを変えるなり足早に去っていった。

「一陽！」

大声で呼び止めても、彼は一度も振り返ることなく霧の中に姿を消した。

「……良明、いいから」

仰向けになったままの宗佑に腕を掴まれ、良明は驚き振り返ってハッとした。宗佑の顔は青ざめ、口端からは血が垂れ、今にも目を閉じてしまいそうだった。

宗佑が死んでしまう。そう考えるだけで全身の血がざっと音を立てて引いていく。

「宗佑さん、戻りましょう。手当てしなきゃ――」

再度促したが宗佑は首を左右に振るだけだった。

「何で」と叫びそうになった時、宗佑が良明の頭を掴んで胸に引き寄せた。鎧と血の匂いが混じり、鼻を突く。

「……一度しか言わないからよく聞けよ」

荒い呼吸をしながら宗佑が話し出す。良明はギリと歯を喰い縛り、かぶりを振った。何も聞きたくなかった。

「いいから聞けって……一陽のことは恨むなよ。恨むのは筋違いだ」

「どういう意味……」

良明は顔を上げようとしたが、宗佑の手に阻まれ、彼の胸に額を付けたまま次の言葉を待った。

「良明はもう徳川に戻るな……俺も一陽もいないんじゃ、お前の身の保証はできない」

「……でも……おれは――」

良明が話し出そうとするのを、宗佑は軽く彼の頭を叩いて制した。

一、遠い記憶　（5）

「はは……もう力も入らんな……」

宗佑は長く息を吐き出し、目を閉じた。

「……出陣の前に言ったこと、覚えてるな？」

「はい」と良明が掠れた声で頷くと、宗佑が短く笑った。

「ならいい……お前に言っておけば、安心して死ねる――」

息を引き取った宗佑の手をゆっくりと外した。

良明はその場に力なく座り込んだまま、曇った空をずっと眺めていた。

＊　＊　＊　＊　＊

目を開いた先は真っ暗だった。自分がいる場所が何処なのか一瞬分からなかった。天井を見つめていて、漸く神社の堂の中だと思い出す。

混乱する頭に手を当て、良明は長く息を吐き出した。動悸が煩い

上に、全身から冷や汗が吹き出ている。ここまで鮮明で、感触や匂いまで蘇るような夢は初めてだった。江戸が近いからだろうか。そう考えて、少し自分に嫌気がさした。

（クソ……）

良明は片手で額を拭い、起き上がって考えを飛ばすように頭を振る。空の声がしたのはその時だった。

「だいぶ唸されていたけど、大丈夫？」

「いや……変な夢見てただけ……だ……」

返事をしながら、良明は空の声音に違和感を覚えた。振り返ると、姿勢よく正座する空の姿があった。

空であるはずなのに、全く別の誰かがそこにいるようだ。青白い光をまとい、彼女のいる所だけが仄かに明るい。それによく見れば、彼女の瞳は水をたたえたような青さをしている。

急に彼女がにこりと笑み、硬直していた良明は自ずと背筋を凍らせた。ただの笑顔が、何故か恐ろしかった。

良明は数回深呼吸をしてから声をしぼり出した。

「……お前、誰だ」

「あらまあ、一目見ただけで分かってくれるなんて。政長よりは素質があるみたいね」

そう言って、空の中の誰かは口元を押さえて上品に笑う。姿形は空そのものだから、仕草一つ一つが奇妙に思えた。今まで見ていた夢も相まって、良明の混乱は増していくばかりだ。

「……もしかして……空が言ってたことってこれか」

彼女の異変を見ていて、唐突に合点が行った。空がひた隠しする理由も何となく分かる気がする。クスクスと笑い続ける彼女が話す。

「隠す必要ないのにね。この子、私のことを相当嫌ってるの」

そう言って彼女は残念そうに眉を下げる。良明は気を取り直して彼女に向かい合い、どっしりとあぐらをかいた。

「あんた、何なんだ？」

「何、と聞かれてもねぇ……私のことは『うみ』と呼んでちょうだい」

「海？」

「ええ、空の反対で海。勝手に付けられた名前だけど、私気に入ってるの」

海が嬉しそうにふふと微笑む。

「貴方のことは良明でいいかしら？　それとも、よっしー？」

「……何でそれを」

良明は怪訝そうに眉を寄せた。

「私が何も知らないとでも思って？　空を通して全て見ているわ」

胸に手を当てて海がにこりと微笑む。

「ふーん」と呟き、良明は膝の上に頬杖をついた。二重人格とは訳が違うように思えた。別の誰かが空の中にいる。そう考えた方がしっくりくるぐらい、海と空はかけ離れている。まず光を身にまとうこと自体、異質だ。人ではない何かがそこにいる。

良明が探るようにじっと見つめていると、海は小首を傾げた。

「貴方、気味悪がったりしないのね」

「ああ……何でだろうな。おれこういうのに慣れてるんだよ。自分でも不思議に思ってる」

「へえ。でもたまにいるわよね、そういう人間」

「海は人間じゃないのか？」

核心を突くようなその問いに、海は微笑むだけで答えは返さなかった。代わりに良明に詰め寄り、顔を覗き込む。青い瞳が目前まで迫り、良明は僅かに身を引いた。

「貴方に頼みがあるの」

「頼み？」

「そう、頼まれてくれるかしら」

更には手を取られ、両手で握り締められる。良明は困ったように一瞬宙を仰いだ。まだ得体の知れぬ相手だ。迂濶に返答すれば自身

に何が及ぶか分からない。
海の期待のこもる視線を受けながら暫く考え、良明はゆっくり口を開いた。
「……内容にもよるけど――」
そう呟いた時、海の後ろの暗闇から小さな白い手が伸びてきて良明は目を見張った。その小さな手は海の目を覆う。
「引きなさい」
次いで円の声がした。
海の目が隠れたことに良明は内心ホッとしていた。あの青い瞳は透き通りすぎていて、気を抜いたら呑み込まれ、逆らうことが出来なくなりそうだった。
海がため息を吐いて良明の手を離す。
「なーんだ、あなた」
「何をしたいのか知らないけど、わたしの前で悪さはさせない。引きなさい」
有無を言わさぬ口調で円が再度命じると、海がやれやれと肩をすくめる。
「残念ね。まあ、今日のところは引っ込んであげる」
その言葉の後すぐ、フッと青白い光が消え、空の身体が前のめりに傾いた。

「わわっ、わっ」

支えようとした円も空の重みに堪えきれずに引っ張られる。重なって倒れてきた二人を良明は慌てて受け止めた。

「大丈夫か」

「あたたた、ごめんね」

苦笑しながら返事をしたのは円だった。円は即座に起き上がったものの、空は未だ腕の中でぐったりとしている。良明は不審に思い、彼女を仰向けにして頬を軽く叩いた。

「おい、空」

「大丈夫だよ、寝てるだけだから」

その場に正座しながら円が言い、良明は顔を上げた。漸く、円の傍らになえが佇んでいるのに気付いた。彼女は不安そうな面持ちで空を見下ろしている。

「あの……空さん、どうしたんですか」

「……さあな……おれにも分からん」

軽く肩をすくめ、良明は空に目をやった。そしてゆっくり床に横たえてやる。起きる気配はなさそうだ。

「なえの治療……でいいのか分からんが、終わったのか？」

「うん、無事にね」

そう言って、円がなえに目配せする。急に円と目が合い、なえは戸惑ったようだった。そしておずおずと話し出す。

「あの……私、本当に治ったのでしょうか」

病気を治してやると夜中に家を連れ出されたのだが、何をしたかと言うと、明け方の今まで外で円と向き合っていただけなのだ。

そりゃあ疑うだろうな。そう思いながら良明は苦笑した。何せ良明自身も最初は半信半疑だったのだから。

「何か、身体に変わったことはないか？」

「身体に、ですか」

なえは困惑しながら変化を捉えようとしたが、それらしいのが見付からず首を傾げた。そして暫くうんうん唸ってから、ハッと何かを思い出したのか、急に手で耳の後ろを探る。途端、彼女の目が見開かれた。

良明は「何かあった？」と優しく笑い、首を傾げた。なえは興奮したように勢いよく何度も頷く。

「あのっ、ここっ、耳の後ろにしこりがあったんです……それが……」

「なくなった」

「は、はい――」

感極まったのか、彼女は涙ぐんだ。

「これが原因だと言われてました……治ることはないと言われて、諦めるしかなくて……」

なえは鼻をすすりながら円に目を向ける。つられるように良明もそちらを見ると、いつの間にか円は空に寄り添って寝息を立てていた。夜通し術を使って疲れたのだろう。小さな二人がすやすやと眠る様子はとても無邪気で、少しばかり口元が緩んでしまう。

「何者なんでしょう、この子」

不意になえが呟き、良明は暫く考え込んだ。

一日、何も考えなかった訳ではない。円には不思議な能力があり、空に至っては先程少し事のあらましが分かったぐらいで、考えても謎は深まるだけだった。予想の範疇だったが、良明はポツリと呟いた。

「……神の類、かな」

「神様、ですか」

なえが怪しむような視線を良明に投げる。

「あ、疑ったな。こんなことできるやつなんて、その道に精通してるか、元からできるかのどっちかだろ」

少しぶっきらぼうになりながら、良明は腰を上げた。自分だって

信じ切れている訳ではない。しかし、「神の類」と考えるのはごく自然のことように思えた。それぐらい、円は卓越した存在だった。

こちらを見上げ、なえが首を傾げる。

「……それが正しいのか、私にはわかりません。病気が本当に治ったかも、まだ信じられていませんから」

「じゃあ、朝飯食ったら、医者にでも診てもらうんだな」

そう言って、良明は僅かに苦笑する。「家まで送るよ」と言い、戸口へ振り返って漸く、堂の中に朝日が差し込んでいるのに気付いた。

また一日が始まる。

良明は吸い寄せられるように戸へ近付いた。なえの病気はきっと完治していると、妙に確信していた。しかし、なえの病気を治したことは果たしてよかったことなのか。良明達がなえとその家族の人生を変えてしまったのだ。ただならぬ事をしてしまった気がする。そう考えて良明は僅かに息を詰まらせた。

悪い事をした訳じゃない、と自分に言い聞かせながら、良明は戸を開け朝日の降り注ぐ中へ身を投じた。

重い瞼を上げ、空はきょろと目を動かした。

（……あれ）

光が差し込む堂の中に良明の姿が見えず、空は頭を持ち上げた。

円が隣で寝息を立てている。

（どこ行ったんだろ）

そう考えながら身体を起こして大きく伸びをする。

「んんーっ……っいって……っ」

急に刺すような鋭い痛みが頭に走り、顔をしかめた。

「……くっそ、やっぱり出てきたな」

頭を押さえて低く呟き、無意識に歯を食い縛る。海が出た日の朝、目覚めると必ずと言っていいほど頭痛や腹痛が起こる。しかも激痛なのだ。数ある海が嫌いな理由の一つにこれが入る。しばらく我慢すれば治まるけれど、やはり厄介なものであることに変わりはなかった。

痛む頭で、空は良明のことを考えた。海が出てきたということは、良明も彼女を見たはずだ。

海についてどう思ったのだろう。気味悪がったりしただろうか。何故今ここにいないのだろう。とりとめなく疑問を浮かべたが、答えは返ってこない。

ため息を吐いて目を閉じた時、急に頭を撫でられ空は顔を上げた。円が心配そうな顔で空の頭に小さな手を添えている。

（いつの間に）

内心空が驚いていると、円が口を開く。

「――水の守、風の守、あめつち渡りて」

大きな声ではないはずが、円の声は耳の奥、いや身体中で大きく反響するようだった。

「よの玉、ひの玉、流るるままに」

円の胸元にある石が、淡い柔らかな光を放っている。惹かれるようにそれを見つめていると、急に身体の緊張がほぐれ、頭痛が和らいだ。空はふっと力を抜いた。

石が光るのを止めるのと同時に、円は手を下ろして穏やかに微笑む。

「大丈夫？」

「へ？　……あ、ああ。大丈夫」

静まり返った石を名残惜しむように見つめていた空は、慌てて頷いた。不思議と身体が温かい。

「……今度は何やったんだ」

ぬくもった手を揉みながら尋ねると、円は無邪気に笑って言った。

「脈を整えただけだよ。頭痛くなるのはしょっちゅうなの？」

「ああ……子供のときからずっとだ。それで昔はよく泣いてたな」
空は疲れたように肩をすくめる。
「そっか……でも血の巡りがよくなったから、しばらくは大丈夫だと思うよ」
「え……海が出てきても？」
「うん」
円が頷いた時、戸が大きく開き、堂の中が眩しくなった。空は目を細めてそちらを見、良明の姿を捉えた途端、ほっと息を吐いた。彼は戸を開けたままこちらに近寄ってくる。
「起きてたのか。なえが握り飯作ってくれたぞ」
ほら、と竹の皮の包みを投げて渡す。そして二人の前に腰を下ろしてあぐらをかいた。何も言わずに包みを開ける良明を、空は静かに眺めていた。空の視線に気付いた彼は、握り飯を頬張りながら眉をひそめる。
「何だよ」
「……別に。なえは帰ったのか？」
尋ねながら空も包みを開き、綺麗に握られた三角を一つ掴む。
「ああ。病気も治ったみたいだしな」

「ふーん」と呟いて空が握り飯を一口食べた頃には、良明は既に一つを食べ終わっていた。その速さに内心呆気に取られながら、円に目をやった。円は包みを開かずに、膝の上に置いたまま良明を興味深そうに眺めている。

「食べないのか？」

空が尋ねると、円はううんと首を振った。

「これはここにお供えしようと思って。それにわたし、食べ物には制限があるから」

「えっ、米も？」

空も良明も驚いた顔をする。

「あ、違うよ、何でも食べられるんだけど、お供え物しか食べちゃダメって決まりがあってね」

円がわたわたと両手を振って説明する一方で、空と良明は互いに顔を見合わせた。そして二人は怪訝そうに円へと振り向く。

「……それってただの盗み食いじゃん」

「ええっ？」

思ってもいなかった返答だったのか、円は仰天した。

「そうじゃなくてぇ……わたし、家に奉納されたものしか食べられないの」

「奉納とか、城の子供じゃあるまい……身体が弱いのか？　そんな風には見えないけど」

空は一層不思議そうに首を捻る。

「そういうのでもないんだけどなぁ」

弱り果て、円は身体をすくめた。

「まあわたしは食べなくても大丈夫だから」

「何で」

「何ででも」

「お前今説明放棄したろ」

空はムッと眉を上げた。

「だって空質問ばっかりなんだもん」

「あーわかるわかる、たまに面倒臭くなるんだよなぁ、疲れてる時とか」

円の返答に良明が相槌を打ち、空は唇を尖らした。

「何だよ、別にいいだろ質問の一つや二つ。心の狭いやつらだな」

「一つや二つで利いた例しがないけどな」

良明がやれやれと首を振る。そして急に何かを思い出したように顔を上げた。

「そうだ、お前の盗んだ金半分以上なえ達に渡したって言ったら切れ――」

「はぁぁぁぁ！？」

良明が言い切らぬ内に空は叫んでいた。

「ますよね」

ごもっとも、と良明が頷く。怒りの余り腰を浮かせ、空は訳がわからないと、信じられないと言わんばかりの視線を彼に投げつけた。

「お、おおお前バカだろ！　何で金まで置いてくんだよ！」

「何でと聞かれてもなぁ、何ででも？」

「……うがーっ！　腹立つ！」

良明の飄々とした様子を見て空は叫びながら自身の髪を掻きむしった。

「人が苦労して手に入れた金を！」

「どうせ綺麗な金じゃねえんだからいいじゃん」

「そういう問題じゃねえ！」

ダンッと床を踏み鳴らすと埃が舞い上がった。良明も円も、握り飯を包みごとサッと持ち上げて埃から離す。

「金を渡した理由を聞かせてもらおう」

良明をギッと睨みながら、空は唸るように問いただした。何事もなかったかのようにのんびり握り飯を口に運んでいる彼が、怪訝そうに尋ね返す。

「逆にこっちが聞きてえよ、何でそんなに金に厳しいのか」

「そういう風に育てられたからだ。悪いか」

空はぶっきらぼうに言ってフンと鼻を鳴らす。

「ふーん、政長ってやつに？」

良明の言葉に空はうろたえて一瞬閉口し、慌てて尋ねる。

「その名前、何で知って……」

良明は少し考えを巡らせ、肩をすくめながら口を開いた。

「海が言ってたからな、何となく覚えてたんだ」

背筋が寒くなったような気がした。良明の口から「海」という言葉が出ただけだと言うのに。やはり彼は海に会っていたのだ。

空は俯き、座り直した。急に静かになった空を、良明は見つめていた。

暫く宙を睨んでから、空は重い口を開く。

「……どう思った」

「海のこと？」

空が小さく頷くと、良明は頭を掻いた。

「どう思ったかねえ、少ししか話してないしな……まあ妙な感覚がしたぐらいかな」

うーん、と首を捻りながらも淡々と話す彼を、空はポカンとした表情で見つめ続けた。予想していた反応と全く違う。

不意に良明と視線が重なり、空はたじろいだ。

「厄介そうなの抱えてるなお前。いつからだ？」

「……それは……七つの時から」

視線を外して、空はぽつりぽつりと話し始める。

「育ての親が死んで、その……政長って人と行動始めてから出てきたんだ。それより前は出てなかったと思う……聞いたことなかったし」

「毎日？」

「いや、海が出てくるのには条件がある」

「へえ、どんな条件」

良明が真剣に聞いてくれるため、少し話しやすかった。何も喋らないが円が傍らにいることも心強い。膝の上で手を握り締め、一呼吸入れてから更に続ける。

「満月の次の日から新月までの、うちが寝てる間だけ」

「月が欠けていく間、か」

空は頷き、何か考え込んでいる良明にチラと視線をやった。

「その間も、出てくるのは海の気分次第らしい。毎日だったり、そうでなかったり」

「……わかった。次に海が出てきたら色々聞いてみる」

良明が頷いてみせ、空はキョトンとして首を傾げた。

「その様子だと、海が出てる間の記憶はないんだろ？　後から聞かされたって話し方だったからな。それなら海に直接聞いた方がよさそうだ」

「なるほど」と空は思わず呟いた。

良明の言う通り、海が表に出ている間の記憶はなかった。以前の連れだった政長は海のことを度々話してくれたが、自身が毛嫌いしているせいもあって余り気に留めずにいた。だから今良明に何か海について尋ねられても答えられないのだ。

「さっさと食って行こう。今日たくさん歩いておけば、明日には江戸に着くだろ」

そう言って良明は握り飯に添えられていた漬物を口に放り込んだ。

海のことを気味悪く思った様子は彼には見られなかった。嫌われていない。それだけで心底ホッとしてしまう。空は嬉しさを噛み締めるように、握り飯を頬張った。

握り飯を食べ終え、竹筒の水を飲もうとした時、堂の外で岩でも落ちたようなけたたましい音が鳴り響いた。空は身体を震わせ、良明は刀を取って素早く振り返り鯉口を切る。

「円様はここにいらっしゃいますか！？」

開けっぱなしだった戸から大声と共に足を踏み入れたのは、黒の袷と袴を身に付け頭を剃り上げた山のような大男だった。神社にいるせいか、住職を思わせるその風貌に違和感を覚えた。何より彼の天井につかんとする身体の大きさに威圧される。

空が唖然として座り込んでいると、良明が背を向けたまま空の前までやって来た。そして少し緊張した声で話す。

「円の知り合いみたいだが……でけぇな」

「あ、ああ……」

空は上擦った声で頷いた。

「斑！」

立ち上がった円が嬉しそうにぴょんと跳ね、斑（まだら）と呼ぶ大男に飛び付いた。

「よかったぁ迎えにきてくれたの？　よくここがわかったね」

「ええ、ええ。ご無事で安心いたしました」

円の前に両膝をつき、斑は目を潤ませて直も続ける。

「数日前、崖から川に落ちそのまま流されていく円様を追いかけるも見失い、私川沿いを走って海まで出てしまいました。かろうじて円様の術の痕跡を見つけそこから北上して参ったのであります」

「ああ、そうなの？　ごめんね、手間かけちゃったね」

円がオロオロしながらなだめるように言うが、斑の口は止まらない。

「円様も術を使わなければならぬ事態になっていたと言うのに、何という失態でありましょうか円様を見失ってしまうとは……　この斑、日輪様に合わす顔がありませぬ……！　ここは腹を切って詫びるしか」

「わーわー！　斑待って！」

どこからともなく刀を取り出す斑の腕を円は全力で押さえた。それでもこの体格差、敵う訳がない。

「斑は武士じゃなくてわたしのお付きでしょう！　腹なんて切ったらわたしが許さないんだからね！」

小さな身体で大男を必死に押さえ込む円と、それに聞く耳持たずな斑を見つめていた空は、思わず呟いた。

「何だこれ」

会話を聞いて二人が主従のような関係だということは分かったのだが、何だか主従とは程遠いような、まさに「何だこれ」の状態にしか見えない。

空の呟きが聞こえたのか、斑が動きを止めて振り返った。目が合った瞬間、彼が鬼のような形相になり、ゆらりと立ち上がる。空も良明も息を飲んだ。

「何故ここに人間がおるのだ……貴様等、円様に何かしたのではないだろうな」

斑が怒鳴った途端、首を絞められたかのように息ができなくなった。

「……っ！？」

首を押さえ息を吸おうとするも、苦しさが増すだけだった。円が斑を戒める声が聞こえるが、空には何と言っているのか分からない。一瞬にして感覚全てが遠くなったかのようだ。冷や汗と涙が浮き出る。

床に両手を付いて苦しさを耐えていると、不意に良明が抱えるように肩を引き寄せた。

一、遠い記憶　（6）

空は虚ろな目で彼を見上げた。良明には異変がなく、抜き身の竹光を右手に構えて斑を睨んでいる。そして刀を頭の高さまで上げ、一気に振り下ろす。風が吹き抜けたと思った次の瞬間、喉に空気の塊が入り、空は大きく咳き込んだ。

「ほう」

良明をまじまじと眺め、斑が感心したように顎を撫でる。そんな彼に円が怒鳴る。

「こら！　あの二人はわたしの命の恩人なんだよ！　何てことするの！」

「何ですと！？」

斑が目をひん剥いた。

「何と何と！　そうでありましたか……申し訳ござらん、私が早合点してしまったばかりに」

「お許しくだされ」と斑は慌ててその場に正座し、深々と頭を下げた。

むせていた空は口を拭って床に額を擦りつける彼を睨んだ。

「とんだ早合点だよ……ゲホッ……いい迷惑だ」

「大丈夫か？」

良明に顔を覗き込まれ、空は頷きながら座り直した。

「はあ……死ぬかと思った。よっしーは何ともなかったのか？」

「……まあな」

「えー何でうちだけ……」

また空が小さく咳をしたところに、円が慌てて駆け寄った。

「空、ごめんなさい。大丈夫？」

「死にかけた」

空は憤然と言って円の後ろで縮こまっている斑に目をやった。身をすくめていてもやはりかなりでかい。

「斑はちゃんと叱っておくから、今回は許して、ね？」

お願い、と両手を合わせて懇願する円を見て、空は盛大なため息を吐いた。

「叱るだけで早とちりが治るとは思わねえけどな……まあいいよ、今は怒る気力もない」

「ホント？　ありがとう」

円はホッと胸を撫で下ろし、改まって話し始めた。

「わたし、斑に連れて行ってもらうから、二人とはここでお別れするね」

「ああ、わかった」

空が頷くと、円はニカと無邪気に笑った。

「あと二人を家に招けるように、母上と話しておくね。いつになるかわからないけど……その時は遣いを寄越すから」

「いいのか？　まあ円の母親とは一度話したかったから、うちは有難いけど」

「うん、海に関してはわたしも気になるし……このことはまた会った時に話そう」

「お二人は何処まで参られる」

いつの間にか斑が円のすぐ側まで近寄ってきていて、空は驚き彼を見上げた。

「江戸だけど」

良明が平然と答え、斑は顎を撫でながらニッと口の端を上げた。

「江戸ならば四半刻もかからん、私が送ろう。さっきの詫びだ」

「四半刻って……どうやって？」

空は首を傾げた。良明の話だと、江戸まであと一日はかかるようだった。それを四半刻（約三十分）で行くとなると、どれだけの速さで進むのか想像もつかなかった。いや、まずどういう手段を使うのかすら分からない。

不思議そうに良明に目をやると、彼もこちらに顔を向け首を傾げた。すると斑が大声で笑う。

「案ずるな、そなた達はただ私の背に捕まっていればいい。荷をまとめてついてきて下され」

むくりと立ち上がった大男は、床板を踏み鳴らしながら外へ出ていく。彼を見送り、空と良明は同時に円へ振り返った。

「大丈夫なんだろうな、あれ」

「あーうん、危険ではないよ。速く移動できることは保証する。でもおすすめはしないかなーあはは」

ケラケラ笑ってから斑を追う円の背を見て、二人は毎度ながら脱力感を覚えた。そして目配せし合ってから、観念したように荷をまとめ始める。

「なーんかイヤな予感する」

「おれもだ。あの粗さを見てると……色々不安だ」

「でも四半刻で着くのは魅力的だよな」

「……ホントにそうだったらな」

二人は荷物片手に立ち上がり、堂の外へと向かった。

「よいか、絶対に手を放すでないぞ。男は女を支えてやれ」

「……」

「あ、こら、毛は引っ張るでない」

「じゃあどこ掴めってんだよ！」

良明の後ろから顔を出し空は怒鳴った。二人は今、犬のような獣の姿になった斑の背にまたがっている。空と良明、それから円が乗ってもまだ数人は乗れそうな大きな獣だ。全体的に黒い毛並だが、左耳のところに白い毛が円状に点々と生えている。まさに斑模様。

良明は一つため息を吐いて、空の両手を掴み自身の腰に回した。

「離すなよ」

「お、おう……」

突然のことで僅かにたじろぎながらも、空は彼の着物を握り締めた。

「では、行くぞ」

斑は地面を確かめるように数回足踏みし、前足を折って姿勢を低くした次の瞬間、天高く飛び上がった。身体を押さえ付けられるような余りの衝撃に、空は悲鳴を上げることさえできなかった。

目をきつく閉じて良明にしがみついていると、不意に彼が苦笑混じりに口を開いた。

「ここまでぶっ飛んだことされると笑いしか出ないな……空、見てみろ」

「へ？」

目を開き、良明が指差す方へ視線を向けると、青々とした山並みと細くうねる山道、所々に立つ民家が非常に小さく見えた。そして遠くには紺碧の海。

「すげえ……って、高すぎだろ！」

真下を眺めた途端下腹を締め付けられる感覚に襲われ、思わず良明に身体を寄せた。良明は短く笑い、斑の背中をぽんぽんと叩いた。

「馬に乗ってる感覚と結構似てるな。でも馬より低いから安定してる」

「ふむ。人間を乗せるのは初めて故、比べられるのも初めてだな。だが馬も神聖な生き物だ、似ていてもおかしくない」

宙に着地し、そして宙を蹴りながら斑は答えた。人間に不可能な行動を彼ができるその原理は、空達にはこれから先もきっと分からない。

良明の背後から斑の頭を覗き見、空は尋ねる。

「斑は何の生き物なんだ？」

「生き物と言うか、私は狛犬だ」

「神社にある？」

「そうだ、円様のお家の番人である。いや番犬か」

そう言って斑は豪快に笑う。

「狛犬って普通対になってるものじゃねえの？」

良明が質問を継ぎ、斑の代わりに円が答える。

「もう一人いるよ。縞って言ってね、その子は母上に付いてるの。斑のお兄さんなんだよ」

縞（しま）という名前と斑の兄ということを踏まえ、二人はそれぞれ思うままに縞の想像をした。声にはしないが、考えたことは、大体一致している。たぶん身体のどこかに縞模様があるはずだ。

すると急に円がクスクスと笑い出す。

「兄弟なのに、全然似てないの」

「うーむ、私は似てると思うんですがね」

少し拗ねたような声で斑が言い、円は更に笑った。

眼下の景色を眺め、時折会話をしながら四人は宙を進んだ。四半

刻もまだ経たない頃、斑が急に呟いた。

「もうすぐ江戸だ。少し手前でそなた達を下ろす」

前方には、大きな町並みが見えていた。

「あれが城？」

町のほぼ中央にある広い敷地を見ながら、空は良明の袖を引っ張った。

「ああ。久しぶりに見るな」

ぽつりと呟き、良明はため息を吐いた。

「戻るつもりはなかったけど……仕方ないか」

「？」

独り言を言う良明を背後から見上げ、空は首を傾げた。不意に、江戸が故郷だから寄ると彼が言っていたことを思い出し、視線を外して少し考えを巡らせる。　江戸は寄るだけで、またそこに住み着く訳ではないようだ。多分、何か目的があるのだろう。

空はもう一度、良明に目を向けた。今思うと、彼も自身のことや考えは余り言葉にしない。良明が何を思って江戸の町を見つめているのか、空には分からない。しかしその表情からは、明るい思考をしている訳ではないことが、はっきりと見て取れた。陽気な良明の中にも暗い影は潜んでいる。

（……ちょっとくらい、話してくれてもいいのに）

少し口を尖らせ、空は良明の背中に頭を載せた。斑が口を開いたのはその時だった。

「よし、ここで下ろす」

「へ？」と空がポカンとした途端、斑がぐるりと一回転した。天地が逆になり、何も知らされていない空と良明は当然のごとく振り落とされる。

「へっ！？　ちょっ……」

斑の毛を掴もうと手を伸ばしたが、宙を切るだけだった。落ちていく二人に、斑が大声で告げる。

「着地は任せるぞー。では円様、お願い致します」

「はいはい」

揚揚と頷き、円は懐から乳白色の石を取り出し、両手で握り締めた。

「あまの守、あめつちの御空に、きよめの御風を吹きおこしたまえ」

円はそれだけを呟き、空達が地に到達するのさえ見届けずに、二人はそのまま風のように去っていった。

落下しながら、良明は彼等が消えるのを見ていた。円が石を取り

出したのも確認している。

（大丈夫そうだな）

落とすだけ落として何もしないということはないだろう。そう考えながら、瞼をきつく閉じて風圧に耐えている空に目をやった。斑に振り落とされた時、良明は咄嗟に彼女の腕を掴んでいた。

そういえば、初めて会った時も空は上から降ってきた。空という名前故に、彼女は天に好かれるのだろうか。

良明は短く笑い、腕を引き寄せて空の身体を肩に抱えた。下に目をやると、地面はすぐそこまで迫っている。

「空」

「はっ？　なっ、なに！？」

空が余りにもせっぱ詰まった声をしていたため、良明は更に笑い声を上げた。

「このまま死んだりしてな」

「ちょっ、それ洒落になってねえから……っ！」

未だ笑う良明を空は涙目で睨む。彼女の身体を抱え直し、良明は着地する体勢を取った。

「掴んでろよ」

言われるまでもなく、空は良明の着物を握り締めている。

地面まであと少し、となったところで不意に風の様子が変わった。急に身体が浮いたような感覚がしたが、それは落下の速さが落ちたからだった。二人の周りを温かで柔かい風が包んでいる。そのままゆっくりと下り続け、短い草の生える野原に良明は足を付けた。途端、空の重みが肩にのしかかる。

地面に下り立った空は、噛み締めるように土の感触を確かめ、そして盛大にため息を吐いた。

「だから嫌な予感がするって言ったんだ」

「随分高いとこから落ちてきたな」

宙を仰ぎながら、良明は呟いた。空も顔を上に向けた。浅葱色が眩しく、目を細めて遠くまで眺めた。円達の姿は完全に見えなくなっていた。

「生きてたからよかったものを……斑……次会ったらただじゃおかねえ」

「同感だ」

良明は頷き、空を促して町の方へと歩き始めた。

宙を駆けながら、斑は背に乗る円に話しかけた。

「先程の、女の方は何やら危険なものを抱えていましたな。焔に似

ている気がしたのですが……彼女が乗っている間、背の毛が逆立っていました」

「そうだねえ……わたしの力じゃどうしようもなかったから、母上に相談しようと思ってるんだ」

「ええ、それが最善策でしょう。そういえば男の方も、普通に見えて面白い者でしたな」

「うん、良明もちょっと稀な体質かな。やり方は独特だったけど、術を解くなんて誰でもできるわけじゃないし。どこで教わったんだろう」

円の声が弾んでいるのに気付き、斑は耳をぴくぴくと動かした。

「……円様、あの二人を気に入っていらっしゃるので？」

「うふふ、どうでしょう」

意味深な笑みを浮かべ、円は斑の頭を優しく撫でた。

江戸の町は人が多く、皆がいきいきとして見えた。

すれ違う人の中には、道具を持って仕事に向かう者、魚を売って歩く者、それに腰に刀を二本差して歩く武士の姿もある。そして撫子色の着物を着た大店の娘らしき若い女が、従者を連れてにこやかに歩いて行く。その華やかな様子に空が見惚れていると、良明はいつの間にか大分先に進んでいた。

慌てて彼を追い、隣に並んでまた辺りを見渡す。落ち着きない彼

女を見下ろして良明は尋ねた。

「そんなに珍しいのか？」

「うちこんな人が多い町に入るのは初めてなんだ」

少し興奮しながら空が言った。

「それで、どこに行くんだ？　よっしーの家か？」

空が首を傾げると、良明は「いや」と軽く頭を振った。

「帰る場所はないんだ。知り合いのとこに行く」

「知り合いって？」

「もう見えてる」

良明が前方を指差し、その先を追って空は視線を動かした。そこにある建物に思わず目を丸くする。

町中にも関わらずその一角を白壁の塀がぐるりと囲っており、異質な威厳を放っていた。表から見ただけではその敷地の広さは計り知れないが、それはかなりのものと思われた。よく見ると、広い門の横に松葉屋と書かれた大きな提灯がぶら下がっている。それがこの店の名なのだろう。余りの存在感に口があんぐりと開いてしまう。

「ここ何」

「旅籠屋。金があるやつとか……城のやつらも使う」

「へえー」

空は感心しながら良明について行き、彼の背中越しに門を見やった。同時に、群青色の袷に藍染めの前掛けを付けた少女が門から出てきた。そして手水桶から杓で店先に打ち水を始める。

「栞」

少女に近寄り良明が小さく声をかけると、彼女は手を休めて顔を上げる。良明の姿を捉えた途端、少女は瞠目した。

「……良明さん」

「どうも。菫さんいるか」

「ま、待っててください。呼んできます」

桶も置いたまま、栞（しおり）は杓片手にバタバタと旅籠屋へ引き返していった。彼女を見送ってから、空は良明を見上げた。

「菫さん？」

「ここで働いてる人だ。店主の次に偉い人」

「……女将みたいなもんか」

「ああ」

良明が短く頷いた時、店の中から騒々しい足音が二つ聞こえ始めた。その足音は次第に近付き、すぐ藤紫の袷を着た女が表へ飛び出

してきた。
振り返った彼女の容姿に、空は目を見張った。
女将と聞いて想像していたのは、年のいった厳しそうな女だった。だが出てきた彼女は予想よりはるかに若く、丁寧に化粧を施した目元も紅を引いた唇も凛としていた。花の香りがしそうな姿に、空は知らず知らずにため息を漏らす。
彼女は良明の姿を認めて、整った眉をつり上げた。その表情のまま良明に近寄るなり、右手を振り上げる。パシン、と妙に小気味いい音が鳴り響いた。
突然のことに空は呆気に取られてポカンと口を開いた。良明を殴った女は怒りの余り肩で息をしながら口を開く。
「……何やねん、そのしんきくさい面。わざわざ見せに来よったんか？　そらご苦労なこっちゃ。このドアホ」
「……菫さん、くに訛り出てますよ」
叩かれた頬を擦り、良明は少し拗ねたように言った。
「やかましわ。アンタの面見て苛ついてんねや」
そう言って、菫（すみれ）は叩いた方とは逆の頬を抓った。良明のしかめっ面を覗き込み、ため息を吐く。
「二年もふらふらしよって……まあええわ。部屋貸したるさかい、中入り。説教はそれからや」
「えー……いてて」
良明が不満そうな声を上げると、菫は頬を抓る手に更に力を入れ

た。

「えーて何や、えーて。アンタらおらん間、どんだけ……ん？　女の子がおるやないの、良明の連れ？」

良明の背後に立ちすくむ空に気付き、菫が朗らかに笑う。

「良明が誰か連れてるなんて、珍しい」

唐突に訛りが消え、空は面食らった。空が僅かに頬を引き吊らせているのにも構わず、菫は空の高さに合わせるように腰を折り、柔らかく話す。

「可愛らしいお嬢ちゃんね。お名前は？」

ニコニコと笑いかける菫を見上げ、空も歪んだ笑みを浮かべる。

「空だけど……すっげーガキ扱いされた気分」

空の呟きに、頬を抓られたままの良明が吹き出す。菫は怪訝に思い彼を睨んだ。

「何がおかしいのよ」

「いや、そいつ十六だよ」

良明の言葉に菫は一瞬ポカンとし、そして笑い出した。

「こんな小さいのに十六とか聞いたこともないわ。それだと栞と同い年じゃない、ねえ」

菫が振り返り、背後に佇んでいた栞は頷いて良明へ怪訝そうに視線を投げる。

「良明さんの妹でしょう、年の離れた」

「いやちょっと待て、おれ妹がいるとか言ったことあるか？」

「あら、生き別れた妹を捜し回ってたとばかり」

うふふ、と口元を押さえて笑う栞を見て、良明はげんなりとする。

「何勝手に想像膨らませてんだよ。てかこんな妹こっちが願い下げだ」

「どういう意味だそれ！」

聞き捨てならんとばかりに空が怒鳴る。

「それにお前らも何で信じねえんだよ！　うち十六だっての！」

「嘘ね」

「うーん、大きく見てもせいぜい十二ぐらいじゃないの」

菫と栞が次々と言い、「何で！？」と空は驚いた。この背丈のせいで幼く見られることはしょっちゅうだったが、年齢を言えば驚きはしても大体の人が理解してくれた。だが、この二人ははなから疑ってかかっている。こちらだって、好きで小さく生まれたんじゃない。

良明の頬を放し、菫はまた空に笑いかけた。

「空ちゃん、江戸は初めて？」

「え、うん」

急に話題が変わり、空は思わずたじろいだ。

「そう。それじゃあ町中見ておいでよ、栞に案内させるから」

「えー私がですかー？」

栞が面倒くさそうな顔をし、菫はやれやれと肩をすくめた。

「あんた、今日は外に出る用があったでしょ。そのついでよ」

「いいですけどー、なら私、今日は暇もらいますからね」

「はいはい」

苦笑しながら菫が頷き、栞は「やった」と心底嬉しそうに万歳した。

「空ちゃん待ってて、ちょっと準備してくるわ」

空に満面の笑みを見せ、栞は喜々と前掛けを外し門をくぐっていく。彼女を見送り、空は傍らの良明を見上げた。

「よっしーは？」

「おれはいい。ずっと住んでたとこだし、今更見て回ろうとは思わない」

「それに今から説教が待ってるしね」

ニヤニヤと言う菫に、良明は恨めしそうな視線を向ける。

その様子を見たことで自分が少し気落ちしているのに、空は気付かなかった。

二人の少女を見送り、良明は菫に促されて松葉屋の門をくぐった。丁寧に手入れされた庭を横目に、玄関へと足を踏み入れる。忙しく働いているのか、広い玄関に使用人は一人もいなかった。ちらと下足棚に目をやると、数人分の下駄や草履があるだけで団体の客はいないことが窺える。使用人の多く他の仕事に出ているのだろう。そう考えながら框に腰を下ろし、水を張った桶で足を洗いつつ小さく尋ねる。

「菫さん、何人ぐらいいた」

「せやなぁ……三人ぐらいやろか」

くに訛りで菫が答え、良明はギョッとした。

「そんなに？　一人しかわからなかった……感覚鈍ってんのかな」

はあと短くため息を吐き立ち上がる良明を、菫はケラケラ笑いながら見上げた。

「うちもアンタとしゃべってると地が出てしゃあないわ。よし、ここからはちゃんとする」

一呼吸入れ、菫は声を抑えた。

「あんたらがいなかった間、ここも大変だったのよ」

「……部屋入ってから聞く。こっちのことも全部話すから」

「そ、私の話は高いわよ。と言いたいとこだけど、そっちとこっちの話の質は同等そうね。一陽のことでもあるし」

廊下を歩きながら疲れたように肩をすくめる菫から目をそらして、良明は僅かに目を伏せた。

「ごめん」

「謝るのは話を済ませてから。いい？　話しの最中は謝罪抜きよ、煩わしいから」

「わかった……あ、そういやあいつら大丈夫か。三人もいたなら、一人ぐらいあっちに行きそうだけど」

「大丈夫でしょ」

そう言って、菫は不安などみじんにも感じさせない笑顔を見せる。まるで母親のような、全てを包み込む笑顔だ。

「栞だって、立派な忍。女の子一人ぐらいなら守れるわよ。あんただって栞に投げ飛ばされたことあるでしょ」

「……記憶にない」

良明がつっけんどんに言い、菫は呆れてため息を吐いた。

「はあー、男はこれだから。都合悪いとそうやってごまかして」

「……凛は？」

唐突に話を変える良明に、菫は不満そうな視線を向ける。

「いるわよ。あんたのこと、覚えてるかわからないけど」

「えー、あんなにかわいがってやったのに？」

一、遠い記憶　（7）

「二年も離れるから」

ふんと、菫が勝ち誇ったように笑う。

二人は階段を上がり、奥にある部屋の前で立ち止まった。障子に手をかけ、菫は一瞬動きを止めた。不審に思っていると、不意に思い詰めた表情で彼女が振り返り、良明は思わず顔を強張らせた。

「入る前に一つ聞いていい」

「……ああ」

「一陽は……生きてるよね」

菫の祈るような視線に、良明は口をつぐみ、神妙に頷いた。確かに江戸に向かう道中で彼には会っている。だが、菫に聞かせてやれるような再会の仕方ではなかったのだ。頷く以外に菫を安心させる方法は良明には思いつかなかった。

「そ、ならいいの」

いかにも繕った平坦な声音で菫が言い、障子を横に滑らせる。

部屋の中には、文机の前で姿勢良く正座し書物を読む幼い少年の姿があった。髪を頭の高い位置で結い、鶸色の袷に銀鼠の袴をつけている。障子を開く音に振り返り、彼はパッと表情を明るくした。

「母上」

「偉いわね凛、今日も本読んでたの」

菫は優しく微笑み、少年に歩み寄って頭を撫でてやる。

「凛、良明って覚えてる？　昔よく一緒に遊んでくれてた、お兄ちゃん」

そう言って菫は背後に立つ良明を指差し、少年が顔を上げた。向けられた無垢な眼差しに良明は一瞬たじろいだが、同時に懐かしさも込み上げてきた。菫の息子・凛太郎が生まれた時から二年前まで、良明は度々彼の面倒を見ていた。正確には、面倒を見ろと半ば強引に命令されていた。その頃を思い返すと、今目の前にいる凛太郎はかなり大きくなっている。

良明の顔を暫く眺めていた凛太郎は、次第に顔を輝かせていく。

「良明って、あんちゃん？」

「……覚えてるじゃん」

良明が怪訝そうに視線をやると、菫は嫌味たっぷりにチッと舌打ちした。

「忘れてる、って断言してない。凛が忘れたことなんてなかったわよ。一陽が親しくしてた、あんたら二人のこともね」

「へえ、凛は記憶力がいいんだな。どっちに似たんだか」

良明がニヤリと笑いながら菫に言っている時、凛太郎が立ち上がって良明に飛びついた。そして必死な表情でこちらを見上げる。

「あんちゃん、父上とおじちゃんは？」

凛太郎を見下ろし、良明は暫く口をつぐんだ。この幼い子どもは、どれぐらい寂しい思いをしながら、父と自分達を待っていたのだろう。どんなに悲しくても、きっと、健気に明るく振る舞っていたに違いない。せっぱ詰まった表情がそれを物語っている。その場に腰を下ろし、良明は真っ直ぐに凛太郎を見つめた。

「凛はいくつになった？」

「いつつ」

「そうか……父親もおれらもいなくて寂しかったな」

良明が労るように頭を撫でてやると、凛太郎は眉を下げて瞳を潤ませた。唇を噛みながら暫く堪えていたが、良明の肩にすがり小さく嗚咽を漏らし始める。良明は苦笑を浮かべ、凛太郎の小さな背中をぽんぽんと叩いてやった。

「一陽はちゃんと帰ってくる。だからもうちょっと、待ってような」

不意に菫が吐息を漏らし、良明は彼女に目を向けた。　菫は頬に手を当て、感心したようにこちらを見ている。

「凛が泣くとこ久しぶりに見た気がするわ……私の前じゃ我慢してたのね」

「心配かけないようにしてたんだろ、凛なりに」

「んー、良明の方に何かあるんだと思うけど。小さい子を安心させる、何か」

「何かって何」

良明が眉をひそめ、菫は肩をすくめた。

「空ちゃんも小さいし」

「……まだそれ言ってるのか」

「あはは、あの子ムキになるから面白くてさ。余計からかっちゃった」

菫はひとしきり笑い、唐突に姿勢を正した。一瞬で彼女に隙がなくなり、良明は視線を外せなくなった。

殺気とはまた違う雰囲気をまとう彼女は、徳川の忍の内でも、一隊を率いれる程の実力の持ち主である。忍ゆえか、良明でも、彼女の素性は詳しくは知らない。小さい頃からこの旅籠屋には訪れていたし、菫とも接してきたが、分かることは伴侶が一陽で、子が凛太郎であるという程度だった。それからたまに出るくに訛りからして、どうやら生まれは江戸ではないようだ。

良明の目を見つめたまま、菫は静かに尋ねた。

「あの日、何があったの」

「……凛に聞かせても大丈夫か」

「たぶん、聞いても分からないわよ。それに私にもあらかたの話は入ってきてるから、そんなに驚かないつもり……ただ」

「ただ？」

凛太郎の背中を撫でながら良明は首を傾げた。

「あの場にいた、あんたの口から聞きたい」

「……わかった」

菫の真剣な視線を受け、良明は観念したように頷いた。そして、凛太郎の身体を持ち上げて膝の上に座らせ、彼の頭を一回撫でてからぽつぽつと話し始める。

良明の視線は、当時を思い返すかのように遠くへ向けられた。

江戸の町を歩き回っていた空と栞は、一件の蕎麦屋に入り早目の昼餉を取っていた。

この若い二人、年が同じなせいか、出掛けてものの数分ですっかり意気投合していた。今も運ばれてきた蕎麦をつつきながら途切れない会話を繰り広げている。

「え、空ちゃん甲斐生まれなの？」

「生まれは知らない。育ったのが甲斐ってだけで」

「ふうん、結構近くね」

「栞は江戸生まれなのか？」

「そ、江戸生まれの江戸育ち」

頷いてから栞は音を立てて蕎麦をすする。空も箸を動かしながら直も喋る。

「よっしーも江戸生まれなんだろ」

「ぷふーっ！　やっぱその呼び方おかしいわ。あははっ、良明さんもよく許してるよねー、私も帰ったらよっしーって呼んじゃお」

空が良明のあだ名を言う度、栞はケラケラ笑った。正直なところ空にはどこがおかしいのか分からないのだが、良明は本来そう言うのは許さないような堅物な性格なのかもしれない。

（そいや初めの内は嫌そうな顔してたような）

彼のしかめっ面を思い返して、空は内心渇いた笑い声を上げた。また蕎麦をすすりながら、栞に尋ねた。

「あのさ、菫さん？　は、訛り出てたけど、どこの人？」

「……うーん、それは仕事柄話しちゃいけないことになってるの、ごめんね」

「仕事？」

「そう。味方のことは漏らすことなかれ、が私たちの掟。菫さんは上に立つ人だからもっと話しちゃダメ」

「そんなに偉い人なのか。菫さん、若いのに」

感心しながら空は栞を見つめた。その菫と仲良さげに話していた栞は、どんな立場なのだろう。疑問に思ったが、彼女たちの信条を聞いた後に尋ねることは躊躇われる。

急に栞がにやと笑い、身を乗り出した。

「私のことは聞いてもいいのよ。自分自身のことは、自己責任に任せられているから」

「え、そんなもん？」

「そんなもん。だってもう出生も喋っちゃったし。まあ仕事の中身は話せないけど、得意なことぐらいは話しても大丈夫かな。あ、得意なことって人探しなんだけど」

躊躇いもなく栞が話すため空は呆気にとられていた。空が口をつぐんでいる内に栞は更に続けた。

「これも仕事柄、私顔が広いんだ。だから色んな話が入ってくるわけ。空ちゃんも誰か探してほしい人がいる？　なんちゃって」

栞はおどけたように小首を傾げた。

彼女の顔を凝視して、空は大きく息を吸い込んだ。言われてみれば、この蕎麦屋に至るまで栞に話し掛けてくる者が後を立たなかった。行く先々で彼女は誰かと親しげに話していたのである。栞が自ら得意と言ったことは外れていないのかもしれない。

栞なら、もしかしたら見付けてくれるのだろうか。空が、幼い頃から望んで、焦がれた人を。期待は膨らんだが、それはすぐに萎んでいった。空自身でさえ顔を知らないというのに、彼女が見付けられるとは到底思えなかったのだ。

空が何か言いたそうにしているのに気付いたのか、栞は僅かに眉をひそめた。

「もしかして、いるんだ」

笊に視線を落とし、空は重い口を開いた。

「……両親」

「え？　甲斐に住んでたって言ったよね、その時親はいなかったんだ」

「……物心つく前から別の夫婦と暮らしてた。七つでその夫婦が死んで……その後は浪人と、あと女の人に育ててもらった」

小さく語る空を見つめ、栞は怪訝そうに呟いた。

「浪人」

「ああ。夫婦が死んだその日にうちを連れて行ってくれて……あの人がいなきゃたぶんうちは死んでた。でも酷いやつだったよ、酒癖悪いし文句ばっかりだし」

政長のことを思い返し、空は疲れたように肩をすくめた。一方で、栞はプッと吹き出す。

「あはは、会ってみたいかもその浪人。でもそのことは今は置いておこう。両親のことは何か覚えてる？」

「ううん、何も。顔も知らない」

「そう……そういう親はごまんといるからな」

そう言って、栞は口に手を当てしばらく考え込む。彼女の様子を窺いながら空は茶の入った湯飲みに手を伸ばした。会ってまだ数刻しか経っていない人にここまで自分のことを話すのは初めてだった。良明の知り合いだから安心してしまったからかもしれないし、年の近い女の子と接するのが久しぶりだからかもしれない。何故か栞には多くを語っても害はない気がしたのだ。

いや、栞もだが、むしろ菫の方が昔会ったことがあるような、懐かしい雰囲気をしていたのが一番の要因だった。どこかで会ったことがあるのだろうかと空は思考を巡らせ、あることにたどり着いた時急に「あ、」と声を漏らした。向かいで栞が首を傾げた。

「何か思い出した？」

「あ、ごめん違う。菫さんってうちと暮らしてた人と似てるなーと思って。雰囲気が、だけど」

「七つの時に亡くなった人？」

「いや、その後から暮らしてた人。実知姉さんて言って、優しい人なんだ」

彼女がいたからこうして生きていられるのだと言っても過言ではない。何せ政長は基本的に放任していたのだから。空が無意識に穏やかな表情をしていると、栞がフッと微笑んだ。

「菫さんと似てるんだもの、きっといい人ね。空ちゃんの両親のことは頭に入れておくわ。何かあったらすぐ教えるから」

「……ありがと。あっ忘れてた。手掛かりになるかわからんけど、これ」

空は懐から真っ黒に塗られた懐剣を抜き取り栞に差し出した。それを受け取って栞は「ふむ」と両手で感触を確かめた。

「抜いても？」

「いいよ。それ、母親のものらしいんだ」

鞘から少し刀身を出し、それをまじまじと見ている栞に空は教えた。

「うちが赤ん坊の時に預かった、って聞いた」

「ふむ」ともう一度呟き、栞は刀を鞘に仕舞った。そして今度は、漆塗りの鞘や柄を眺め始める。

「私は刀の目利きはできないんだけど、結構いいものな気がするな。その浪人とか良明さんとかには見せた？」

「政長……浪人はいいものだって言ってたよ、よく手入れもしてくれたし。よっしーは……何て言ってたかな……おれはあまり持っていたくない、だったかな。意味わかる？」

空が首を傾げると、栞は若干険しい表情をした。

「良明さんがそう言ったのか……ちょっと不安ね」

栞はぽつりと呟いて、懐剣を空に返した。

「どういうことだ？」

「んー、良明さんって、その手については敏感というか、長けてるから」

「その手って……」

空が怪訝に見つめていると、栞は苦笑して視線をそらし口を開く。

「術のこと」

二人は蕎麦屋をあとにし、栞は用があるからとその場で別れた。栞の用が仕事であることは明らかだったので、空は詳しくは聞かずに済ませた。また半刻程したら橋の近くにある小さな稲荷の前で待ち合わすことになっている。旅籠屋まで一人で戻れる自信はなかったから、それにはホッとした。

空は大通りをゆっくりと歩いていた。軒を連ねた店に家屋、それから人の多さに軽く目がくらみそうだ。時々人にぶつかりそうになりながら、先程の栞との会話を思い返した。

何やら良明は、術に対しての耐性があるようだった。術と聞いても空にはピンとこなかったので、呪いのようなものだろうと解釈している。そういえば、良明は今朝不可思議な行動をした。息が出来ずに空が苦しんでいた時、彼が刀を振り下ろしただけで苦しさがなくなったのだ。あれが斑の術だったと考えると、良明はそれを解いたことになる。いつも飄々としていてとらえどころがない彼にそんなことが出来るとは、驚くと共に妙に納得もした。良明は円どころ

か、海のことさえ気味悪く思わず、すんなりと受け入れられている。彼は元から、あのような現象に慣れていたのかもしれない。

（実はすごいやつだったりして）

戻ったら色々聞いてみよう。自分だって、聞かれたら話すことが出来たのだ。良明も尋ねればたぶん話してくれるだろう。全てを話してくれるとは、思わないけれど。

気付けば川に架かる橋に足を踏み入れていた。空は欄干に手を置き、短くため息を吐いた。

暇潰しに入っていた小間物屋から出て、空は稲荷へと歩を進めた。少し時間をかけすぎた。半刻はとうに過ぎている。慌てて足を早めると、突然、横から人にぶつかられ空は吹っ飛ぶように転んだ。

「……っすまない」

急なことに呆然としていると、男の焦った声が上から降ってきた。顔を上げれば、そこには月代に鬢を結った青年が片膝を立てて空に手を差し伸べていた。彼の腰には二本の差し料がある。侍だ。

空がおずおずと手を上げると、彼がそれを素早く掴み、空の身体を軽々と引っ張り起こした。

「急いでいた。怪我はないな」

「あ、はい」

侍に早口で尋ねられ、空は思わず丁寧に返した。そしてぎこちな

い動作で着物の埃を払い落とし始めた時、侍はまた口を開いた。

「無事ならいい。では、急ぐ故」

それだけ言って、彼は走り去った。

空は不思議に思いながら侍の背を見送った。侍にしては、偉そうな態度がなかった。それに、彼は空を相手に子供扱いの喋り方をしなかった。ぶつかっても怒鳴ったりしない侍は初めて見たかもしれない。空は首を捻り、彼が現れた方へ目を向けた。

家と家の間に暗い小道がある。光はなく、闇がその小道だけを覆っているようだ。空は惹かれるように、小道に近寄り、躊躇いなく足を踏み入れた。後から思い返しても、何故この時恐怖を覚えなかったのか不思議だった。

小道に入ってみると日差しは少ないものの、案外視界は良好だった。かろうじて見える青空を見上げながら進んでいくと、どこからか人のうめき声が聞こえ空はようやく自分の行動にハッとした。

（何やってんだうち）

まずい、と思った時はすでに遅く、うめき声はすぐ近くから聞こえていた。

空は目を凝らし、前方を見た。人が立っている。立ちすくんだまま見つめていると、彼は囁くような声で何かを喋った。小さすぎて空には聞こえなかったが、次の瞬間、別の悲鳴のような声が響いた。恐怖に怯えたその声に空は縮み上がった。怯えた声は叫ぶように言った。

「たっ頼む……！　命だけは……」

「命乞い？　ははは、笑わせる」

感情のない笑い声がした後、ドッと何かが突き刺さる音と一瞬の断末魔が耳を貫いた。

ああ、人が殺された。空は瞬時に理解した。ここにいてはいけない。そう頭が警告しているのに、足が震え、もう一歩も動けない。逃げることは叶わない。唇を噛み締めて恐怖に耐えていると、突然目の前に男がぬっと現れ思わず飛び上がった。彼の顔が間近に迫り、空は息を詰めた。

この男、見たことがある。ぼさぼさの黒髪、黒い眼、歪んだ笑み。そして一番に覚えていたのは、眼の奥の光。良明の師を殺した男だ。

彼は空の顔をまじまじと眺め、しばらくしてからポンと拳で手の平を叩いた。

「お前、この間良明の後ろに隠れてたやつだな」

面白そうに男が言い、空はギクリと顔を強張らせた。空が何も言えずにいると、男は更に顔を近付けふんと鼻を鳴らす。

「こんなガキ連れて、あいつは何をやってんだ。そんなに大事なやつなのか」

唐突に男は空の顎を掴み、上を向かせる。目を覗き込んでくる男の手からは、血生臭い匂いがしていた。

「……お前を殺したら、良明は狂うかな」

ニヤリと笑う男の顔に、空は背筋が寒くなった。この男が作り出した血の海を忘れてなどいない。人を殺すことは、この者には容易いことなのだ。悪寒が止まらず、冷や汗が首筋を伝う。それでも、

空は彼から視線をそらさなかった。
視線を合わせていた彼は、つまらなそうに空の顎を放した。次の瞬間、背後から空の脇を何かが掠めた。目の前にいた男はそれを避けて後ずさり、飛んできた何かは地面に突き刺さる。
空が振り替えると同時に黒い影が隣に立ち、またも飛び上がった。よく見れば、それは栞だった。彼女は空を庇うように男と対峙する。空は彼らの様子を固唾を飲んで見守った。

「町ん中でそんなもん振り回してると、仕事バレるぞ」

「え、うそ……その声……一陽さんですか？」

栞が信じられないと言うような声を上げた。

（一陽……）

暗がりで顔が見えなくなる程離れている彼を見つめて、空はそれが彼の名前なのだろうと考えた。良明と顔見知りの栞が彼のことを知っていても何の不思議もない。
空はチラと地面に目を向け、栞が投げたと思われる物を確かめた。暗くてはっきりは見えないが、空には見たことのない細長い形状をしている。何だろうと首を捻っていると、突然栞が大声を発した。

「いつ戻って来られたんですか！　良明さんも今日松葉屋に来て……もしかして、菫さんには会わないんですか！？」

「……会うつもりはない。栞、このことは菫には言うなよ」

それだけ言い、一陽は身体の向きを変えるなり足早に去っていった。

「一陽さん！」

栞が呼び止めるも、彼は振り返ることなく姿を消した。その後もしばらく、二人は無言で佇んでいた。空が心配に思いながら栞の顔を窺うと、彼女は盛大にため息を吐いた。

「一陽さん攻撃しちゃった……空ちゃん怪我はなかった？」

「ああ、大丈夫……」

「そっか、よかった。空ちゃんに何かあったら良明さんに怒られるもの」

そう言って栞は苦笑する。

「ちょっとここで待ってて、確かめてくるから」

「何を？」と空が首を傾げたが、彼女は何も言わずに空から離れて行った。数歩歩いたところで栞がしゃがみ、空はようやく気付いた。彼女は死体の確認に行ったのだ。

「まずいな、この人、私たちをつけてた人だよ」

「つけてた？」

空はギョッとした。誰かが後からついてきていたなど、全く気付かなかった。

「何もしないようだったから放っておいたけど……私がつけられて

るんじゃなかったし」

小さな声で栞が話したため最後は聞き取れなかった。彼女は地面に刺さっていた物を拾い、空の下まで帰ってきた。

「二人いたはずなのに、死体はひとつだけだ。空ちゃん、他に誰か見なかった？」

栞の問いに、空は先程の侍を思い出した。

「いた、侍が走っていった」

「本当？　それだとなおさらまずいな。早く帰ろう、菫さんたちの話も終わってる頃だろうし」

空の腕を掴み、栞は足早に引き返し始めた。駆け足で彼女を追い、空は尋ねる。

「つけてたやつらって誰なんだ」

「さあ、私には分からないな。でもただの浪人って訳ではなさそう。普通の町人の女の子つけ回すだなんて、気持ち悪い」

嫌悪した様子を隠さずに栞は言葉を吐き捨てた。小道から出ると、そこは余りに眩しく空は顔をしかめた。それほど今までいた場所が暗かったのだ。

二人は無言で松葉屋を目指す。しばらくしてから前を歩く栞がチラと振り返り、微かに笑った。

「空ちゃん、今日一陽さんに会ったことは誰にも言わないでくれる

かな」

「……ああ」

「ごめんね……はあ」

言い様のないため息を吐く栞に、空は慌てて話した。

「ここに来る前に一度、あの人に会ったんだ」

「えっ」

栞が目を見開く。

「よっしーに初めて会った日に、あの人にも会った。その時も、今日みたいに人を……」

「いいよ、言わなくて。怖かったね……でも、本当は悪い人じゃないの。私も小さい頃から遊んでもらってたし、それに何よりあの人は菫さんの旦那さんだし」

「そうなのか」

驚いた空が声を大きくすると、栞は微かに頷いた。

「何を思って行動してるのか分からないけど、私は一陽さんを信じてる。そうじゃなきゃ、菫さんを信じてないことになるもの……だけど菫さんのとこに帰れない理由は何なんだろう」

栞はもう一度ため息を吐いた。空は口をつぐんだまま彼女を見つ

めていた。出会ったばかりの空に言えることは何もなかった。

一、遠い記憶　（8）

無言の時間が長いこと続いていた。

泣き疲れたのか、話の最中に凛太郎は良明の膝を枕に寝息を立て始め、今も眠っている。彼の頭を撫でながら、良明は内心大きくため息を吐いた。

菫には包み隠さずに全てを話した。事前に話を聞いていたと言っていたけれど、彼女は衝撃を受けたような表情でこちらを見つめていた。菫の視線が余りに痛く、いたたまれなかった。だが、それは自分がしたことへの仕打ちなのだと全てを受け入れ話し続けた。

良明の話が終わり、菫も良明がいなかった二年間の江戸の状況を話してくれた。どうやら、良明が行方を眩ましてからしばらく、この松葉屋にも良明の行方を尋ねてくる者が後を絶たなかったようだ。もちろん、一陽に関しても同様である。松葉屋には消えた二人について知る者がいなかったので、皆の生業故に疑われはしたが、使者は一年程で来なくなったとのことだった。

関ヶ原での合戦が徳川方の勝利で終わった後、西軍の石田や宇喜多等、捕らえられた大名は処刑された。そして西軍についた他大名の処理に追われ、今も徳川はごたついている。

どちらが勝ったとか誰が死んだとか、良明には興味はなかった。自分はもうどこにも仕官していないただの浪人で、気にする必要はないのだ。だが、自分を捜し回られているということには納得いっていない。

良明がやれやれとため息を吐いた時、同時に菫もため息を吐いた。目をやると、彼女は申し訳なさそうに苦笑する。

「ごめんね、あんたにとっても辛いことなのに」

「いや……もうだいぶ吹っ切れてはいたから。二年何も考えてなかったわけでもないし」

「……そう」

菫は小さく呟いてしばらく瞼を伏せた。一陽のことを考えているのだろう。一陽がしでかした事を知っている分、凛太郎よりも菫の方がきつい日々を送ったに違いない。それでも松葉屋に留まって、帰るとも分からない旦那を待ち続けている姿には胸を打たれる。

少し沈んだ表情の彼女を見つめ良明は尋ねた。どうしても尋ねておかねばならないことだった。

「菫さん……宗佑さんにご新造がいたとか聞いたことあるか？」

顔を上げた菫が少し驚いた顔をする。

「ご新造？　いやぁ、私は聞いたことないわ。ずっと独り身だって思ってたけど、違うの？」

「おれもよくは分からないんだ……ただ、戦の前に宗佑さんがそういうことを匂わせてたから」

「どういう風に」

菫が首を傾げ、良明は少し記憶を辿った。

戦の前日、陣内で宗佑が話してくれたことを思い返しては、一人考え続けていた。良明は僅かに躊躇いながら話した。

「何か……おれもいつか誰かを娶るんだろうなって宗佑さんが話し出して。宗佑さんは何で独り身なんですかって聞いたら『愛する女はいるぞ、訳あって一緒にはなれないがな』って」

「へえ……確かに匂うわね」

顎に手を当て、菫は宙を仰いだ。途端、何か思い至ったのか微かに眉をひそめる。

「そういえば、一陽が前に何か……」

「一陽が？」と、良明が怪訝に首を傾げる。

「……ごめん、今は思い出せないわ」

菫が肩をすくめる。

「……捜すの、手伝ってもらえないか。本当かどうか分からないし、手掛かりもないけど」

「いいけど、私に頼むと高く付くわよ」

「……金を取るのか」

良明は不服そうに頬を膨らませ、にやと口の端を上げている菫を睨んだ。すると彼女はケラケラと声にして笑い出した。

「冗談。宗佑さんには私も世話になったし、一陽の弟分の良明の頼みを断る理由はない。ちょっと時間かかるだろうけど、手伝いましょ」

「……ああ、ありがとう」

良明はホッと胸を撫で下ろした。江戸に戻った理由の一つは宗佑の新造を捜すためだった。予想が本当だったとしたら、宗佑について伝えなければならないと思っていた。だがさっき言った通り、良明には手掛かりもなければ一人で捜し出す能もない。だから菫を頼るしかなかった。その彼女が――からかいはしたが――快諾してくれたため、ひとまずは安心だろう。

良明は肩の力を抜いて、少し座り直した。凛太郎がうーんと寝返りを打った。

「ねえ。あんたもしかして城に戻るつもりなの？」

不意に菫が尋ね、良明は内心ギクリとした。

「……戻るつもりはないけど、一度でいいから中に入りたいと思ってる。刀置いてあるんだ」

「え？　それは？」

良明の傍らにある刀を指差し、菫は首を傾げる。

「これは竹光。城の中にあるのは宗佑さんからもらったものだから、取りに行きたくてさ」

「……あんた、前に殿様から刀拝領してたわよね。ずっとそれ差してたじゃない、どうしたの」

菫の表情に険しさが増す。良明は気まずそうに視線をそらし、言

いにくそうに口を開いた。

「……う……売った」

「はあ！？　売ったって、それ仮にも主君から頂いたものでしょう」

「いや、だって金がなかったから……」

苦笑する良明に、菫が詰め寄る。彼女の形相に良明は思わず身を引いた。

「この馬鹿！　それがあればまだ城に入りやすかったかもしれないのに」

「だって持っていたくもなかったし……でもそうなんだよな、ちょっと失敗したかな」

「ちょっとどころなもんですか、大失態よ」

菫が眉をつり上げ、良明は苦笑したまま視線をそらした。

「刀なくても、清宏に話が通れば何とかなると思うんだけど……」

「ん？　誰がそいつに話つけに行くのかしら。二年も戻らなかったあんたに行けるの、ん？」

菫に冷め切った笑顔で首を傾げられ、良明は背筋が寒くなった。だが、負けじと首を傾げ返す。

「菫さんに、頼んでも、いいかな」

「まったく。この放浪者。感謝なさい」

ぴしゃりと言い、菫は唐突に文机に向かって硯と筆を取り出した。無言で墨をすり始める彼女を良明は不思議に思いながら見つめた。

「私が動き回るわけにもいかないから、あんたのことは栞に任せる。用があったら栞に言いなさい。私に用がある時もね」

「だけど栞にも勤めがあるだろ」

「私が調整する、気にしなくていいわ。ああ、店主にも言わないとだわ」

紙にすらすらと筆を走らせ、菫は息を吐いた。

松葉屋の店主は普通の――とは言っても良明より城に顔のきく――人で、菫たちのように二つ目の顔がある訳ではない。数年前に還暦を迎えた、好好爺だ。城や菫たちのために松葉屋を切り盛りしている。良明も何度か会ったことがあるが、関わりが深い訳ではなかった。宗佑とはよく話していたようだが。

「帰ってきた」

不意に菫が呟き、良明はすぐにはその意味が分からず彼女を見つめ続けた。途端、障子が勢いよく開き二人の少女が雪崩れ込むように入ってきた。

「あー疲れた！」

「菫さん、ただいま戻りました！」

空と栞だ。

「どうしたの、そんな慌てて」

筆を動かしながら菫が尋ねた。菫は文机に視線を落としていたが、良明は空と栞が表情を強張らせたのを見ていた。栞が何かを言いたそうに良明に目配せし、動揺を押さえた口調で言う。

「いえ、ちょっと人につけられていたので、走ってきたんです」

「そう。何ともなかったのよね」

「はい」

栞が大きく頷いた。良明は二人の少女の様子を眺めていた。空の顔がどこか暗く、それに先程の栞の表情からして、何もなかった訳ではないことが明らかだった。菫に悟らせてはならないことなのだろうが、空までもが浮かない顔をしているのは何故だろう。

そう考えて、良明はハッとした。栞と良明はもう一度目配せし合う。

「栞、戻ってきてすぐで悪いんだけど、城に遣いに行ってきてくれない？」

「城に、ですか」

突然のことに栞はきょとんとする。菫は頷きながら何かを書いた紙を丁寧に折り始めた。

「そこの阿呆のために、これを届けてきてほしいの」
「阿呆って、ああ、良明さんのことですね」
紙を受け取り、栞がこくりと頷く。良明が心外そうな顔をしているのにも構わず栞は尋ねた。
「誰に届ければいいんですか？」
「清宏」
「えー、あの人ですかー？」
心底嫌がる声で栞が呟き、良明は吹き出した。
「その反応変わらねえな。あいつも相変わらずなのか」
「相変わらずですよ、もう。あの女たらし」
口を尖らせながら栞が立ち上がった。
「さっさと行ってすぐ戻ってきます」
「頼むわね」
菫が軽く手を振り、部屋を出た栞は軽快に階段を下りて行った。
彼女の足音が聞こえなくなってから、菫も腰を上げる。
「じゃあ私は店主のとこに行ってくるから。ゆっくりしてなさい」

にこりと微笑みを浮かべて言い、菫も部屋を後にした。

残された空と良明の間に沈黙が流れた。空は俯いて息を吐き出した。菫が席を外し、ようやく息苦しさが取れたような気がした。一陽と再び出会ったことで少し気分が悪く、喋る気力もあまりわかなかった。彼のことは誰にも話さないと栞と約束した。だが、このことを一人で抱えるには空には荷が重すぎる。せめて良明には伝えておけないかと、ちらと窺うと、彼は膝の上で寝ていた少年を床にゆっくり横たえている最中だった。

空の視線に気付き、良明は肩をすくめて見せた。

「こいつが膝を枕にしてたせいでずっと同じ体勢だったからさ、足が痺れた」

「あはは、そいつは？」

「凛太郎。菫さんの息子」

と言うことは一陽の息子でもあるのか。そう考えながら空は凛太郎の無邪気な寝顔を見つめた。目元は菫に似ているように思う。

「一陽に会ったろ」

良明の低い呟きに空は弾かれたように顔を上げた。良明はまだ凛太郎に目を向けている。自分の中の緊張が急にほぐれたのに空は気付いた。良明の勘のよさには舌を巻く。空は大きく息を吸い込み静かに尋ねた。

「どうして……わかったんだ」

「何となくだ。菫さんの前では言うなよ」

良明がそっけなく返した。

「栞にもそう言われた。さすがにうちは何も言えないよ」

「……あいつは、何をやってんだかな、帰ってもこないつもりかよ」

あぐらに頬杖をつき、良明はため息をついた。顔をしかめている彼を見つめ、空は一陽が言ったことを思い返した。

『お前を殺したら――』

一陽の言葉が何故かずっと頭でこだましている。自分が死んだら良明に何か影響を及ぼすことがあるのだろうか。良明にとって自分の立場はやはりただの旅仲間だと空自身が思っているため、影響がどうこう等とは考えたことがなかった。

だが江戸に入って菫たちと出会い、良明と彼女たちのやりとりを見ている内に、良明が何だか離れてしまったような感覚を覚えていた。出会って数日しか経っていないため繋がりは当然小さいのだが、良明と昔馴染みの人たちと接する度、その小ささが身に染みてしまうのだった。

自身が彼に影響を与えているどころか、これでは自身が影響を受けすぎているではないか。今も良明は側にいるのに、寂しさが残っている。

先が見えないということも不安要因の一つだった。なにしろ、江戸で空がやることは何もないのだ。空は内心ため息を吐き、小さく

尋ねた。

「よっしーは、これから何をするつもりなんだ？」

「ん？　近いうち城に行くけど」

「城？」と空は思わず顔を輝かせた。それを見た良明が一瞬ポカンとし、ぷっと吹き出した。

「ああ、空も行くか？」

「行く！」

城など、入れる機会なんて滅多にない。こんな面白そうなこと断る訳がないではないか。自然と声が弾んだ。

「でもおれ、くにを抜けた身だから案内はできないぞ」

「くにを抜けたって……城に仕えてたのか」

空が首を傾げると、良明は「あー」と気の抜けた声を発した。あまり話したくないことであることが空にははっきり見てとれた。頭を掻きながら良明が告げる。

「仕えてたのは否定しないけど、城じゃなくて個人にだよ。と、おれは思ってる」

「誰に。って聞いても支障ないか？」

空は急いで付け足した。人から何かを聞き出すことは難しいと、

初めて思った。

「まあ、お前も城に行くんならどうせ会うしな。家康様だよ」

良明があまりにさらりと答えたため、ことの重大さに気付くのにしばらくかかった。空は目を見開き良明を凝視した。その名前は聞いたことがある。

「家康って……」

「徳川家康。城の殿様だ、おれは小姓やってたんだ」

「う……うそ」

良明が一国の頂点の小姓。ということはそれなりにいい所の武家生まれなのだろう。予想外のことに空は目が眩んだ。それに今までかなり失礼な言動をしてきてしまった。それはもう怒られても仕方ない程にだ。

空の考えを見抜いたかのように、良明がため息を吐く。

「一応もう一度言っておくが、おれはくにを抜けた。もうただの浪人、戻る気もない」

そう言った彼の声や表情には断固とした雰囲気が出ていた。空は口をつぐみ、良明を見つめた。良明の考えていることは、こうやって向き合っていても分からなかった。

この日は菫の薦めから、空と良明、それから栞も一緒になって近

くの湯屋へ行った。湯殿に浸かるのが久しぶり故に、身体は温まり心もほぐれて気分がよかった。それから松葉屋で夕餉を取り、空は栞の部屋で、良明は貸してもらった部屋でそれぞれ休むことになった。

今まで二人で一つの部屋に泊まっていたと告げたら、菫が良明の頭をはたいた。金がなかったんだ、と良明が言い返していたが、菫はしばらく怒っていた。「いい年した男女が」とか「信じられない」とか彼女はぶつぶつ呟いていたように思う。

空と栞は布団に入ってからも喋り続け――清宏のことを聞いてみたら栞は次から次に愚痴を言った――いつの間にか夜は更けていた。栞が行灯の火を吹き消して部屋が暗くなったとき、空はようやく海の存在を思い出し焦りを覚えた。良明ならまだしも、今隣に眠るのは栞なのだ。

海のことを言うか言うまいか迷っている内に、栞の小さな寝息を聞こえ始め、空はとうとう諦めた。今夜は出てこないことを祈るしかない。そう考えながら枕に頭を埋め、目を閉じた。

どこからか唄が聞こえ良明は急激に現実へ引き戻された。しかし目を開けて暗闇の中で耳をすましても何も聞こえない。夢だったのだろうかと思ったが、先程まで見ていた夢はまた宗佑たちのことだった。その証拠に、額にじわりと冷や汗が浮かんでいる。

手で汗を拭いながらふと横に目を向けると、そこには正座して窓から差し込む月明かりを見上げる空の姿があった。いや、これは海だ。そう即座に感じた。彼女がまとう青白い光と月明かりが混じり合い、妖しさが増している。良明は自ずと鳥肌を立てた。

不意に海の青い瞳がこちらを向き、良明を見てにこりと微笑んだ。

「貴方の馴染みの人たち、面白い人ばかりね」

「……それはどうも」

良明は呟きながら身体を起こし、彼女に向き合った。

「何か唄ってたか？」

「ええ、故郷の唄を思い出したから」

「へえ……海の故郷ってどこなんだ？」

そう尋ねると、海は一瞬険しい表情を浮かべた。

「……南だったような、北だったような。はっきりとは覚えてないの。でも、私にはそんなこと思い出す必要ないわ」

きっぱりと言い、海もこちらに身体を向けた。

「貴方、城に行くのかしら」

「そうだよ」

良明が頷くと、彼女は一層笑顔を深め、膝を寄せる。

「この子も連れていってくれるのでしょう？」

自身の胸に手を当てて言う海の声には期待の色が溢れていた。良明は急に不安を覚え、眉をひそめる。

「空は行くって言ってたけど……海も城に用があるのか」

「あら、私も興味からよ？」

にこにこと笑い続ける彼女の言葉が何故か意味深に思えた。一度疑ってしまうと簡単には信じられない。何故なら海の正体が何なのか全く掴めていないのだ。良明は深呼吸をしてから口を開いた。

「なあ、海は何で空の中にいるんだ？」

そう尋ねた途端、海は笑みを消し、つまらなそうに宙を仰ぐ。

「貴方といい政長といい……この身体は私のもので、空が入ってきた。とは考えないのかしら」

「……昨日の内に一通り考えたつもりだ。でもこうやって改めて海と向き合ってわかる、あんたは異質だ。それに空の言ってることの方が真実味がある。小さい頃の記憶とか」

トンとこめかみに指を当てながら良明は話した。すると海がまた微笑んだ。急にその大人びた笑みが目前まで迫り、良明は息を飲んだ。

彼女は空の顔をした別の誰かだと、はっきり分かった気がした。空は絶対にしないであろう表情を彼女は容易く浮かべる。そのせいか、視線を外せなくなった。

「勘のいい子は嫌いじゃないわ。そうだ、一つ教えてあげる」

青く潤んだ瞳を見つめるあまり、良明の思考はゆるゆると止まっていった。海は良明の膝に触れ、更に顔を寄せる。

「あなたがあの女たちと話してると、空はとても寂しがってるの。話しに入る余地がないんですもの」

既に海に呑み込まれて始めていた。頭には彼女の声しか響いてこない。目の前で微笑む少女が誰なのか、もう知る必要はない気がした。海の顔は、今や吐く息が届きそうなところまで迫っている。

「あなたは空の深いところまで関わり、私のことも知ってしまった。ねえ、今更離れたりしないわよね。そして私の望みを叶えてちょうだい」

海の手が自身の手に触れたとき、良明は僅かに意識が戻り、頷きそうになっていた頭を慌てて止めた。

ぼうっとする頭を動かして、必死に逃げ道を探す。昨夜海と話したときはどうやって凌いだのだったろう。あの時は誰かがいた。小さくて、でも大きく全てを包み込む、無邪気な……。

そうだ、円だ。円はどうやって海を引かせていた？

良明は歯を食い縛り、自身の股を力一杯抓った。鋭い痛みを感じると共に、ようやく意識が隅々まで冴え渡っていった。曇りと入れ替わるようにやるべきことが頭に浮かび、良明は瞬時に動いた。さっと片手を上げ、海の両目を覆い隠す。

「ごめん」

良明は彼女の鳩尾に拳を当て、グッと押し込んだ。海は一瞬低く唸り、ドサッと良明の腕に崩れ落ちて動かなくなった。

そっと彼女を仰向けにして空が寝息を立てているのを確認し、良明はホッと息を吐いた。

また海は現れたが、結局彼女が何者なのかは分からず仕舞いだっ

た。収穫あることすら聞けない程余裕のなかった自分にため息が出る。

声がしたのはその時だった。

「……良明さん、今の空ちゃんなんですか」

驚き振り返ると、少し開かれた障子の向こうに立ちすくむ栞の姿があった。彼女の気配に今まで全く気付かなかった。これだから忍は、と良明は思わず眉をひそめる。

「盗み見してたのか」

「空ちゃんが部屋から出てってここに入った気配がしたから……見られたらまずいものでしたか」

申し訳なさそうに視線を落とす栞を手招き、部屋に入れて座らせた。彼女の手に忍道具である苦無が握り締められており、良明はギョッとした。警戒するほど栞には怖く見えたのだろうか。

「見たもんはしょうがない。おれもまだ理解できてないんだ。ただ、思った以上に深刻なかもしれないな」

城に関係しているのやも、とは言えなかった。栞が怪しむように首を傾げる。

「……術か何か？」

「いや、術だったら空自身にも違和感を覚えるはずだ。今は無害そのものだよ」

そう言って、良明は抱えたままだった空を見下ろし、畳の上に横たえた。眠る空を、二人はしばらく見つめた。

「昼間、空ちゃんの懐刀見せてもらいました。良明さんも見たことあるのでしょう？　あれには術が？」

「ああ、あれは術と言うよりまじないに近いな。護りのまじない、って言えばいいか。空のために掛けられたものだと思う。だから空以外が持つと反発するんだよ」

「……術とまじないの区別がつかないんですけど」

栞は眉をひそめ、唇を尖らせた。訳が分からないと言わんばかりの彼女の表情を見、良明は軽く肩をすくめる。

「術は意図的に、もしくは故意に掛けるもの。まじないは、祈りみたいなもんだ。っておれは教わった」

「じゃあ、あれには空ちゃんの母親のまじないが」

「母親？」

今度は良明が眉をひそめた。

一、遠い記憶　（9）

「聞いてないんですか？　空ちゃんの懐刀は母親から授かったものらしいです。それから彼女、両親を捜しているそうです。これは聞いてますよね」

「いや、初耳だ。そういや誰かを捜してるって言ってたな」

忘れてた、と良明は頭を掻く。

「両親か……見つかるといいな」

「そんな他人事みたいに……良明さんも手伝ってくださいよ。それぐらいしたってバチは当たりません」

「……はい」

栞がぷりぷりと怒り、良明は苦笑を浮かべて頷いた。ちらと空を見てから良明は栞に向き直った。

「一応海のことを教えとく。海ってのはさっき見たやつな。おれがいないときに出てきたら、栞が対応してくれ」

「はい」

栞は真剣に頷き、空に目を向けた。

「そういえば、昼に一陽に会ったんだろ？」

海について話し終えた後、良明は唐突に話題を変えた。栞が一瞬目を見開き、慌てた様子で背後の障子へと振り返った。

「いきなりそんなこと聞かないでください。菫さんがいたらどうするんです」

栞は障子を開き、首だけ部屋の外に出してきょろきょろと廊下を見渡す。誰もいないことを確認してから障子を閉め、また良明の下へ戻る。良明が苦笑しているのを見て、栞は眉を上げた。

「菫さん、気配隠すの私より遥かに上手いんですよ、私でさえ気付けない時があるんですから」

「わかってるよ、おれだって何度も驚かされてんだ。で、一陽は何て？」

「……菫さんには会うつもりはない、って。それより、一陽さん……私たちをつけてた人を斬ったんです」

重苦しい口調で栞が言う。膝に頬杖をつき、良明は彼女に詳しく話すよう促した。

「松葉屋を出て、すぐに人がつけてきました。男が……武士が二人、知らない人でした。私じゃなくて、たぶん空ちゃんを見張ってたんだと思います。何もしないようだったんで撒かなかったんですが……私が仕事を終わらせて空ちゃんのとこに行ったら、一陽さんがいて――」

それ以上は言わなくていい、と言うように良明は手を挙げて栞の言葉を遮る。

「つけられたのはおれのせいだろ。ここに着いた時には、菫さん曰く三人はいたらしい。たぶんその内の二人だ」

「何で良明さんが見張られるんですか……？」

「……勝手にくにを抜けたからな、主家を裏切ったと思われてもおかしくない」

やれやれと良明が頭を振ると、状況を感じ取った栞は急ききったように話した。

「一陽さんが斬ったのは一人だけなんです。もう一人はその場から逃げたらしくて……も、もしその人たちがお城に関係してたら」

「一陽のことも知られたな。菫さんに隠しておくのが難しくなりそうだ」

「どうしましょう？」と栞が不安そうに眉を下げて首を傾げる。良明は少し考えてから口を開いた。

「おれたちが先に一陽を捕まえられたらいいが……とりあえず城に行ったら状況を探ってくるから、栞はまだ黙っておけよ」

「はい」と栞が小さく頷き、良明は微かに笑った。栞のいいところは、菫を心から尊敬して彼女のために尽くしているところだ。栞が素直で純だから出来ることなのだろう。そう言うところは昔から全く変わっていない。

「もう遅いから寝よう、空もお前の部屋に運ぶぞ。ここにこいつがいたらまた菫さんに叩かれる」

そう言って立ち上がる良明に、栞は笑った。少しも起きる気配のない空を良明が両手で抱え上げ、二人は障子を開け、暗い廊下へと出た。この時ふと、何故空が一陽の側にいたのか二人は疑問に思っていたのだが、近くに菫が寝ている手前、互いにその疑問を口にすることはなかった。

「空ちゃん起きてー！」

障子を勢いよく開いて栞が大声を発した。

「……んー？」

布団の中で空はもそと寝返りを打ち、寝ぼけ眼を彼女に向ける。眩しい朝日が差し込んでいる中で栞は腰に手を当てていた。彼女は既に松葉屋指定の群青色の袷に着替え、長い髪も頭の高い位置で一つに結い上げ、いつもの働く格好になっている。

「ほらほら、早く。和平さん、待ってるよ」

近寄ってくるなり、栞は空の掛け布団を剥ぎ取った。

空たちが松葉屋に来て今日で十日目だ。清宏から未だ返事がないので、空たちは時間を持て余していた。のだが、部屋を貸してやる代わりに働けと菫に命令され、二人は松葉屋の手伝いをやらされていた。空がやることは掃除や洗い物が主で、客が多い時は食事の配

膳をすることもある。やることがなかった空にはこれはこれで有り難かったし、また初めてのことに楽しさも見出だしていた。栞と揃いの袷と前掛けも貸してもらい、空はすっかり奉公人の様相になっていた。

空は身体を起こし、うんと伸びをした。

「着替えたら下りておいでね」

「うん」

部屋から出ていく栞に、空は目を擦りながら手を振った。一人になってのろのろと寝間着を脱ぎ、群青色の袷に腕を通す。腰紐を結んでいる最中に、空はぼんやりと海のことを考えた。

良明によると松葉屋に着いた日の夜に海が現れたらしいが、それからは出ていないとのことだった。大したことは聞けなかったと良明は詫びた。

今までこんなに海について気にしたことはなかったのに、良明が海を知ってからと言うもの、何故か自身も気に掛かり始めたのだ。こんなことなら政長の話をしっかり聞いておけばよかったと、今になって少し後悔していた。

空は思わずため息を漏らし、布団を畳んで部屋を後にした。

「よおチビスケ、遅い目覚めだな」

賄い部屋に降りると、側にいた男が真っ先に声をかけた。空は僅かに眉をつり上げた。

「チビって言うな！」

「じゃあマメ」

ケラケラ笑いながら言い、椀に飯を盛り始める男を空は唇を尖らせながら見つめた。彼は名を和平（わへい）と言い、黒の作務衣に前掛け、頭には手拭いを巻いている。目が大きく、目元の笑い皺が印象的で、年は聞いていないが空の推測からすると三十そこそこの男だった。彼は松葉屋の料理人であり、客に出すものから使用人の賄いまで料理全てを担っている。ここに来た日から口にしているが、流石と言っていい程、和平の料理には文句のつけようがなかった。

「おら」と彼に椀を差し出され、空はそれを両手で受け取った。飯の上にほぐした魚と切った海苔が掛けられ出汁が並々と注がれており、食欲をそそるように湯気が立っている。その匂いに空は思わず喉を鳴らした。

「そこにチビッ子がいるから一緒に食ってきな」

「チビッ子？」

和平が指差す方を見ると、賄い部屋の板張りになったところで凛太郎がちまちまと飯を口に運んでいる。空に気付いた彼は嬉しそうに笑った。

「空ちゃん、おはよう」

「おはよう……前から思ってたんだけど何でうちのことは“姉ちゃん”て呼ばないんだ？　栞は栞姉ちゃんて呼んでるのに」

「お前が小さいからだろ」

和平が即座に言ってぷっと吹き出す。笑い声を上げる彼を空は睨み上げた。

「年も教えてるんだぞ！」

「そんなことにいちいちこだわるなよ、凛は悪気ないんだから。さっさと食って洗い物してろ。そろそろ客の膳が下がってくるぞ」

厠行ってくるわ、と和平は手を振って裏から出ていった。

彼を見送り、空は近くの棚から箸を取り出して凛太郎の隣に腰を下ろした。椀に口をつけて出汁をすすると、空っぽの腹に染み渡っていった。簡単な料理をこんなに美味しく出来るなんて、料理人はすごいなとしみじみ思った。ことある毎に揶揄を言うのはどうかと思うが。

ほう、と息を吐き、しばらく無言で料理を口に運ぶ。先に凛太郎が食べ終え、椀を置いて手を合わせた。

「ごちそうさまでした」

「そうだ凛、お前よっしー見たか？」

空が尋ねると、立ち上がりかけていた凛太郎は振り返って首を振った。

「ううん。あんちゃん、おそとに出ていったみたいだよ」

「外か。よっしーたまに何の仕事させられてるのか分かんない時があるんだよな」

そう独り言を言って、残りの飯を一気に口に流し込む。流し台に

碗を運ぶ凛太郎を見送り、空はぼんやりと考え込んだ。
良明は昼どころか夜にも仕事を回されているようだった。それにここのところろくに話もしていない気がする。覚えている限りでは、最後に話をしたのは三日前の晩だ。床の支度をしていた時、良明が清宏からの返事がないかひょっこり栞に尋ねてきた。その時に二三言葉を交わしたぐらいだ。
良明の仕事について栞に尋ねてもいいのだが、何となくはぐらかされそうな気がして口には出来なかった。和平に聞いても「知らねえな」と言われるだけだろう。仕事内容に関して松葉屋の者たちの口の固さは承知済みである。
空はため息と共に立ち上がり、流し台へと向かう途中でハッとした。最近ため息ばかり吐いていないか。自分で考えても答えが出ないときは、特にため息が出ている気がする。それに気付いて急におかしくなった。シケたことは好きじゃない。元気なことが取り柄だろ、と良明も言っていた。
悩んでばかりいるのも自分らしくないなと思い直した。そう考えると急に気分が軽くなり、空は手早く襷を掛けて洗い物を始めるのだった。

客の膳まで洗い終わり、和平と共に昼餉の簡単な下拵えを始めたとき、玄関が何やら騒がしくなって空は顔を上げた。

「何だぁ？　うるさい客でも来たのか」

和平が怪訝そうに呟く。二人して何事かと思っていると、ドタバタとやかましい足音と共に栞が顔を見せた。彼女の様子に空はギョッとした。何故か眉がつり上がっている。

「空ちゃん、手は空いてない？」

「えっ、えっと今下拵えしてんだけど」

空がおどおど答えると、和平がぶっきらぼうに手を振る。

「あーあー、いい、お前がいなくても手は足りてる。行ってこい」

「すみません和平さん、ちょっと空ちゃんお借りしますね」

栞が軽く頭を下げ、空の腕を掴むなり足早に賄い部屋を出て廊下を突き進んだ。空は訳が分からず、栞について行くほかなかった。

二人は階段を上り、良明がいつも寝ている部屋の前で立ち止まった。良明が帰ってきたのだろうか、と空は首を捻った。栞が無言のまま障子を開け、部屋に足を踏み入れる。中を伺うと、そこには丁度座ったばかりという体勢の男が一人いた。

良明と同じく総髪だが、良明程長くはないし綺麗に整えている。ただなるがままに伸ばしただけではないようだ。黒の羽織袴によれは一つもなく、育ちの良さが窺える。傍らには二本の差し料もあり、武家の者だとすぐに気付いた。

不意に彼が顔を上げ、未だ廊下に立ちすくむ空と目が合った。途端にパッと表情を明るくする彼に、空はたじろぐ。

「君が、良明が連れてるって女の子？」

「は、はあ」

男にニコニコと尋ねられ、空は曖昧に返事をした。もしやこの人懐っこそうな人が清宏という人物なのだろうか。この疑問は栞の言葉で確定となる。

「清宏さんが頼むから連れてきたんですよ、空ちゃんに何かしたら

承知しませんからね。私も良明さんも！」

最後は妙に力強く付け足したように空には聞こえた。すると清宏（きよひろ）が口を尖らす。

「俺はお話をしてみたかっただけなのに。そこまで言わなくてもよくない？」

「信じませんから！　あと、もちろん触るのも禁止ですよ！」

何を触るんだろうと思っていると、栞が勢いよく振り返り、空は驚いた。

「空ちゃん、これ、苦無渡しておくわ」

懐から取り出した苦無を空に手渡し、栞はずいっと顔を近付けた。

「何かされそうになったら、これで刺していいからね」

「栞物騒すぎ。何もしないよ、失礼だな」

清宏が心外そうに頬を膨らませると、栞は彼の顔を見るなり眉を上げた。

「信じませんから！」

「……俺、栞になんかしたかなぁ。記憶にないんだけど」

がっくりと肩を落とす清宏を無視して、栞は空へと向き直る。

「私、良明さんを呼んでくるわ。空ちゃん、申し訳ないけど、この人の相手兼見張りしててね」

「え、相手って……」

何したらいいんだ、と空が聞けないまま、栞は部屋を出て二人を閉じ込めるように障子を閉めてしまった。彼女の袖を掴もうとしていた空の手は、むなしく宙を漂った後に下ろされる。

「ねえねえ、名前何て言うの？　俺は清宏って言うの、よろしく」

愛想いい笑顔で清宏が尋ね、空は思わず身を固くした。栞から聞いた彼に関する悪い話が頭の中でぐるぐると回っている。女の子を見ると見境がないだとか騙してるだとか、知り合った女の子は必ずと言っていいほど寝取るとか。空はゾッとして無意識に障子まで後退っていた。すると清宏は、おかしそうに眉を歪めた。

「栞が何か吹き込んだんだな、まったく。そんなに警戒してると、ホントに栞が言ってるようなことやっちゃうぞ。　……あ、嘘嘘、本気にしないでよー」

空が素早く苦無を両手で握り締めると、彼はケラケラと笑い出した。そして空を手招き、前に座るよう薦める。

空はしばらく躊躇った後に、彼から十分に、すぐに逃げられるであろう距離を置いて腰を下ろした。清宏は膝に頬杖をついて興味深げにこちらを見ている。彼に目を向け、おずおずと空は尋ねた。

「あ……あんたは、よ、良明の何なんだ？」

「うん、俺が答える前に君の名前を教えて？」

ニコニコと切り返され空は一瞬口をつぐんだ。

「……空」

「空か、いい名前だね」

一層にっこりとして清宏は続ける。

「俺は良明の何かと聞かれたら、うーん、同僚であって友でもある。ああ、今じゃ元同僚、だな。聞いたことない？　良明が家康様の小姓だったってこと。俺もなんだよ」

「あ、うん、前よっしーが言ってた……」

良明が頼み事を出来るくらいなのだから、彼は良明にも家康にも近しいのだろうと予想していたため、もうどんな役柄だったとしても驚きはしなかった。ただ何となく良明がまた少し遠くにいったような感覚を覚えた。

僅かに俯いていると、清宏がキョトンとした表情を浮かべているのにすぐには気付かなかった。

「何々、よっしーて何？　空はあいつをそう呼んでんの？　あいつも許してるの？　何それ俺もよっしーって呼びたい！」

清宏はその場に突っ伏し、何故か悔しそうに畳を拳で叩いた。空が呆気に取られていると、彼が勢いよく起き上がり顔を寄せた。すかさず空は身を引いた。

「空はいつから良明と一緒にいるんだ？　あいつ、他人とつるむよ

うなやつじゃないのに」

「あ……やっぱりそうなのか。うち勝手についてきたから、迷惑だったんだろうなってちょっと思っててさ」

そう言って空は肩をすくめる。清宏は何やら面白いものを見るかのような目で空を眺め、しばらくしてから首を傾げた。

「勝手にねぇ。あいつの口から迷惑だとか聞いたことある？」

「んー、初めて会ったときはついてくんなって言われたけど……それからはない……かな」

考え込みながら空は話した。すると清宏は笑い声を上げた。

「じゃあ迷惑とは思ってないはずだよ。それに本気で嫌だったら空を置いて消えるだろうし。良明って相変わらず好みが分かりにくいのな」

「そうだといいけど……城にいたときのよっしーって、どんなだった？」

ずっと浮かんでいた疑問を空は呟いた。良明本人や栞たちには聞きづらかったことも、この人になら聞いてもいいような気がした。予想通り、清宏は軽い口調で話し出す。

「そうだな。ちょっと尖ってたけど真面目だし笑いもするし、普通にいいやつだったよ。目配り気配りが細やかでさ、男のくせに。小姓に向いてんのかもな。でもあいつ関心が薄くて、女にもなかなか興味持たないからつまんなかったんだよな」

つらつらと述べていく彼を見つめたまま、空はポカンとしていた。どうやら清宏には、人の事情を話すことに躊躇いというものはないらしい。遠慮はいらない相手なのだと段々分かってきて空は力が抜けた気分だった。

「あと宗佑さんにはべったりだったなぁ、一番懐いてる人だったからな」

「あ、なあ、その宗佑さんってどういう人なんだ？　よっしーは師匠みたいな人だって言ってたけど」

空が尋ねると、清宏は一瞬険しい表情を浮かべた。

「……宗佑さんは良明の親代わり、って言うか義父だよ。確か。俺も詳しくはないんだよね」

「義父？」

養子にも出されたのだろうか、と空は首を傾げた。

「ああ。良明、二親ともいないからさ。宗佑さんに育ててもらってたらし――」

「何喋ってんだ、人のことを勝手にべらべらと」

背後からの声に空は飛び上がった。振り返れば、呆れた表情の良明が立っている。

帰りが予想外に早く空が呆気に取られていると、突然、いつの間にか腰を上げた清宏が空の横を通り過ぎ、良明の前に立ちはだかっ

た。何が始まるのだろうと空はハラハラしながら二人を見上げていた。先程、ちらと見えた清宏の横顔が怒っているように見えたのだ。

「……殴られる覚悟はある？」

清宏が冷やかに言い、良明は怖じ気づいた様子も見せずに首を振った。

「あるわけねえじゃん。もう菫さんに殴られたんだ、それだけで十分」

「……ははは、何だよ変わってないな。俺だって怒ってんだぞ、勝手にいなくなりやがって」

清宏は笑いながら良明の肩を小突いた。良明も小突き返しながら話す。

「清宏も全然変わってねえな。その調子じゃまだ女できてないだろ」

「うっ、うるせー！　その通りだよ！」

わっと泣き真似をする清宏を一瞥し、良明は空へ近寄った。

「こいつに何かされたか？」

「え？　ううん、話してただけ」

急に尋ねられ、空は驚きながら答えた。良明が傍らに腰を下ろし、次いで清宏も二人の前に座った。清宏の顔を見ながら良明はニヤと笑う。

「ま、こいつにそんな度胸はねえよ」

「おい、お前、俺の武勇伝を忘れたのか。もう何人の女の子を泣かせてきたことやら」

「逆だ逆。何人の女の子に泣かされてきたか、だろ」

「そ、そんなことないもん……」

図星を突かれ、清宏は両手をついて沈み込んだ。怒ったり落ち込んだり忙しいやつだと空は半ば呆れたが、逆に妙な親近感も覚えていた。それは清宏の性格がどことなく空と似通っているせいでもだった。

あぐらに頬杖をついて良明が呟く。

「そうか、お前まだ栞狙ってんだな」

「……そうだったの？」

空は仰天して良明に顔を向けた。彼は視線を合わせて頷く。

「十歳から八年間ずっとだ。なのに本人を前にするとてんでダメで。女遊びが祟ったな」

「十歳からかぁ、長いな。でもさ、栞って清宏のことかなり嫌ってない？」

「そう、それが問題なんだ。おれにも理由が分からないからどうしようもなくてさ」

「うちが聞いてみようか」

空と良明が面白そうに話す一方で、清宏は顔を赤らめ、鯉のように口をパクパクさせている。それを無視して二人は直も続けた。

「今まで栞から何も聞いてないのか？」

「うーん、悪口しか聞いてない」

「ちょっと待って！　それ以上聞いたら俺泣きそう……！」

清宏が涙目になりながら二人の会話に割り込んだ。

「ていうか、栞が来たらどうすんの！」

「私がどうかしました？」

湯呑みの載った盆を持つ栞が障子を開いた。途端、清宏が奇声を発した。その声に三人はそれぞれ顔をしかめた。栞が眉を上げて清宏を睨む。

「何なんですか、もう。どうせまた変なこと喋ってたんでしょう」

「違う違う俺じゃない！　良明が変なこと言ったんだよ！」

「どっちでもいいです。それより、お城に行く話はしてるんですか？」

栞が怪訝そうに尋ねると、他の三人は「そうだった」という表情

を浮かべ、慌てて姿勢を正した。その様子を見た栞は呆れたようにため息を吐き、茶の入った湯呑みを配り始める。先に口を開いたのは清宏だった。

「遅くなってごめんな。色々立て込んでて、家康様も一昨日伏見から戻られたんだ」

「何だ、こっちにいなかったのか。入れ違いとかにならなくてよかった。で、いつなら城に入れそう？」

良明が首を傾げると、清宏はにこりと笑う。

「今日、今から」

「……はあ？」

頓狂な声を出す良明の隣で空はポカンとしていた。この清宏という男、何もかもが突発すぎやしないか。

「家康様と話をしたいって言ったのはそっちだろう。家康様、昼から暇を取られるんだ。話通してあるからすぐ行くぞ」

「だけど急すぎ……あーもう、いいよ、分かった。空もそれでいいだろ」

諦めた良明に同意を求められ、空は目を見開いた。

「へっ？　うちも会うの？　殿様に？」

「……城をうろつくつもりだったのか」

良明があからさまに呆れた表情をする。

「言っただろ、城の中は自由に動けない。それが不満なら置いてくからな」

「えっ、イヤだ、絶対行く！」

「じゃあ勝手に動き回るなよ」

良明の言葉に空が頷くと、少し離れた所に座っていた栞が腰を浮かせた。

「空ちゃん、もしかしてその格好で行くんじゃないでしょうね」

「え、そのつもりだけど」

空がキョトンとして振り返ると栞が怒鳴った。

「あかーーん！！　お城に行くんだよ！　綺麗にしなきゃ！」

「ええーいいよ、うちが着てたやつより遥かに綺麗だし」

「駄目！　私の貸してあげるから、着替えるよ！」

栞は立ち上がって空の腕を掴み、空を引きずるように部屋を出ていった。静まり返った部屋で、良明と清宏は呆気に取られた表情のまま顔を見合わせた。

「栞のやつ、前にも増して菫さんに似てきてないか」

「あかーん、てねぇ。訛りってうつるものなのかな」

それぞれ呟いて同時に吹き出した。一頻り笑った後、清宏が浮いた涙を拭いながら尋ねた。

「なあ、空って良明の何なの？」

「は？　な、何って……」

唐突な問いに一瞬たじろいだ良明は、それを悟らせないように視線を背けて考え込む素振りをする。

「旅仲間」

「ふーん、旅仲間ね。お前、最近空と余り喋ってないだろ」

清宏が何故そのようなことを言うのか分からず、良明は眉をひそめた。

「菫さんから頼まれた仕事で忙しかったんだよ。それがどうした」

そう言うと、清宏はやれやれと首を振る。

「あのな、あの子ちょっと寂しそうだったよ。お前についてきたの迷惑だったんじゃないかって。女の子を不安がらせるなんてなってないぞ」

「寂しそう……か。前にもそんなこと言われた気がするな」

良明は考えを巡らせ、海が言ったことを思い返した。自分が菫たちと話していると、空は寂しがっているらしい。そういうことは空も顔に出さないため、良明は気付いていなかったのだ。いや、顔に出ていてもたぶん気付けていなかっただろうが。

「……まあ、江戸が初めてだって言ってたし、寂しくなるのもしょうがな――」

「馬鹿」

急に清宏に言葉を遮られ、良明は閉口した。清宏がため息混じりに更に続ける。

「馬鹿だし鈍感だ……ま、俺も勘だから多くは言わないけど。あんまり関わろうとしないでいると、お前自身も駄目になるよ」

彼の言葉の真意が読み取れず、良明はただ首を捻るだけだった。

一、遠い記憶　（１０）

松葉屋を出た空と良明、それから清宏は城までの道のりを歩いていた。日は真上まで昇っているが、薄く雲がかかり青空がくすんで見える。

もうすぐ昼九つになるため、あちこちから昼餉の美味そうな匂いが漂ってくる。朝食べてからもちろん何も口にしていない。客の呼び込みをする飯屋の使用人を見て、空は微かに腹を鳴らしていた。城で何か美味いものでも食べさせてくれるのでは等とあり得ないことを考え、余計に空腹を募らせるのだった。

一方で空たちの少し前を歩く清宏がちらちら振り返っては感心したように空を眺めていた。何度目かのその行為に空は嫌気が差してついに怒鳴った。

「うっとうしい！」

「あ、ごめんごめん。あまりの変貌ぶりにびっくりしてさ」

清宏が頭を掻いて謝ったが、空はそれには答えなかった。

栞に帯をきつく締められ、苦しくて喋る気すら起きないのだ。着ている袷は小さな梅の柄が控え目に散りばめられた薄紅色で、帯は青碧。無造作に伸びて跳ねていた髪は櫛けずられ、珊瑚の飾り玉がついた髪紐で束ねられている。そして極めつけと言わんばかりに、唇に紅を引かれた。

「空ちゃん、お化粧は？」

「しない」

「じゃあ紅だけでも」

「いやいやいやしないってばー！」

という会話の後、空は栞の強引さに敗れたのだった。空を着替えさせていた間の栞がどれだけ楽しそうな表情をしていたか。それを思い返して空はげんなりし、帯を撫でた。

未だにこちらを見ていた清宏は、急に良明に笑いかけた。

「それなりの格好したら、空も年相応に見えるんだな。すごいなー女の子って」

「え、本当か？」

空は思わず声を弾ませた。紅にはそんか効果があるのだろうか。そういえば栞はあまり化粧っ気はないが薄く紅を塗っていて、そのせいか大人っぽさが出ていた。菫も丁寧に化粧をしている。菫は二十五という女盛りであることも相まって、紅を重ねた唇はとても艶やかだった。

空が密かに喜んでいると、不意に隣を歩く良明が鼻で笑った。

「大人ぶってるガキって感じ」

「ガッ……！？」

予想外の言葉に空は眉をつり上げた。良明に食って掛かろうとしたとき、清宏が盛大にため息を吐いたため空は口を閉じて彼に目を向けた。

「こら良明、おめかしした女性にそれはないぞ。空も、せっかく綺

麗にしてもらったんだ、少しおしとやかにしてみたら」

清宏に柔らかく諭され、空は一瞬息を詰めた。彼の言っていることも一理ある。だが良明ときらたら誉めることも、ましてや世辞を言うことすらしないのだ。空にはそれがつまらなかった。紅を引いたのも初めてだというのに。

空は良明を一度睨み付け、つんとそっぽを向いた。

「ほらー、空怒った」

「おれのせいかよ」

清宏が良明に軽蔑するような眼差しを向け、良明が面倒臭そうな表情をするのを、空は少しも見ていなかった。

そのまま歩を進めていくと次第にどしりと構えた門が見え始めた。あれが城の門なのだろうと空にもすぐ分かる程力強い佇まいだった。城の周囲を水堀が囲っており、門まで橋が渡されてある。門の両脇には槍を手にした男が二人立っていて、険しい表情で通りを見渡している。その様子を眺めていると、急に自分の鼓動が速くなったのに空は気付いた。初めて一国の主という人物に会うから、緊張しているのだろうか。

どんな人なのだろう、どう接したらいいのだろうと考えれば考える程混乱は増していく。一人で行動をしていた時は、まさか自分が城に入るとは思いもしなかったし、江戸に来ることすら考えていなかった。緊張するのも当然なのかも、と思い空は落ち着かせるように胸に手を当て、大きく深呼吸する。

「どうした」

突然良明に顔を覗き込まれ、空は驚いた。自分でさえ首を捻る程度の微かな異変だったのに、彼はそれに気付いたのだ。

「……ちょっと息苦しくなって……」

「着物のせいとか？」

「わかんない。ただ急に動悸が」

「……無理すんなよ」

そう言って良明がぽんと頭を撫でた。すると空はふっと息が軽くなった気がした。ただ頭を撫でただけなのにまるで彼が何か施したのではないかと思うくらいに早い効果だった。これも術に対する耐性のおかげなのだろうか、と空は良明を見上げてぼんやりと考えた。昔から共に行動してきたかのような安心感は日に日に募っていく。

照れ隠しに前髪を撫で付けたとき、前を歩く清宏が唐突に振り返り、口を開いた。

「さて、そろそろ段取りの確認をしておこう」

「ああ」

良明が頷く隣で、空は「段取り？」と首を傾げた。清宏は立ち止まり、門番から隠れるように通りの脇に寄って直も続ける。

「城に入るにはそこの大手門をくぐらないといけないが俺たちは北側から入る。一応内密に進めてるからな。そんで、離れにある茶室にお前らを連れていく。本丸の奥にある茶室だ、良明は覚えてるだろ？　それから家康様をお連れするから、そこで待ってろな」

「分かった。清宏にしてはしっかりした段取り踏むな。行き当たりばったりだったらどうしようかと」

良明が思わず安堵しながら言うと、清宏は胸を張った。

「俺にしては、っていうのは余計だ。配慮深いと言え」

「へぇへぇ」と良明がため息混じりに言う。一方で、空は不安そうな表情を浮かべ、二人に尋ねた。

「なあ、うちはどうしてればいい？」

すると彼らは一旦顔を見合わせて、先に良明が戸惑いつつ話し始めた。

「そうだな……とりあえず、家康様がいる間は顔を伏せているべきだな。顔を上げろって言われても見ていいのは喉元までって思っとくといい」

良明が手で首の高さを示す。

顔を見てはいけないのだろうか。空が訳が分からないという顔をしていると、清宏が付け足した。

「下位の武士は上位の人の顔をなるべく見ないようにするのが基本的な礼節みたいなものでね。ただ空はいわゆる町人だから馴染みはないと思うけど……本当は空が会えるような人じゃないんだよ、城主っていうのは。今回はまあしょうがないと言うか、特別ってことで」

おどけたように言って清宏が笑う。

「そういや、何で空も城に行くこと分かってたんだ？」

良明が怪訝そうに清宏の顔を見ると、彼はきょとんとした。

「文に書かれてたけど？」

「……菫さんか」

やれやれと良明がため息を吐き、その意を解した清宏が明るく笑って言う。

「松葉屋の人たちってすごいよな。先読みの手練れっていうか。栞も武家の娘に見えるように仕立てたみたいだし」

そう言って清宏はちらと空に目をやった。彼の視線に「なるほど」と空は感嘆した。

松葉屋の着物はいかにも旅籠屋の使用人と呼べるものだった。城に行くには余りに相応しくない。武家の娘ならまだ不自然ではないのだろう。

空は薄紅色の袷を見下ろし、栞の気遣いに感謝した。

すると急に清宏が「あっ」と声を漏らした。

「先に詫びておく。お前らが城に入ること、俺と家康様以外に知ってるやつがいるんだ」

そこまで言って清宏は誰のことなのかは口にしなかった。彼は無言で二人を促して歩き出し、大手門のある通りより一つ手前の通りへと曲がる。顎に手を当てて考え込む良明を、空は歩きながら見上

げた。彼はすぐにハッとしたように呟いた。

「勝重か」

「当たり、よく分かったな」

「お前が毛嫌いしてるやつを考えれば簡単だ。それより何であいつが？」

良明が不思議そうに首を捻ると、清宏は肩をすくめた。

「家康様と話してたとき、あいつも側にいたんだよ。あいつも今は小姓組だ」

「へえ、勝重がね」

「お前そんな他人事みたいに……良明が抜けたから入ったんだぞ。あいつはお前の後釜ってことを嫌がってるみたいだが、俺だってあいつがいるのは嫌だ。馬が合わないんだよ」

「そうか？　勝重が言ってることも結構正論だったりするし、ああいうやつもたまには必要だろ」

無頓着に良明が言うと、清宏は哀れんだ視線を投げた。

「お前が一番嫌われてるくせによくそんなこと言えるな」

「勝重がおれのことをどう思ってても、おれはあいつをどうとも思ってねえからな」

良明はあっさりと言ってのけ、清宏は一瞬喉を詰まらせたように唸った。

「……お前らしいというか……そういうとこがあいつの癪に障るんだと思うよ」

そう言って清宏は深くため息を吐いた。「そうなのか」と特に気にした様子もなく良明は呟いた。

北側の門は大手門ほど大きくはなかった。そこに人がいなかったのは清宏の手筈によるものだろうと考えながら空は櫓門も抜けた。

その時、急に声が聞こえ空は飛び上がった。

「栞です。近くにいますので、何かあったら」

声のする方へ目をやると、櫓門の屋根の上に黒装束姿の栞が腰を下ろしていた。高い位置で結った髪が風になびいている。空と視線を合わせ彼女はひらひらと手を振った。頬かむりをしているため表情はよく見えない。

良明がちらりと栞を見上げ軽くため息を吐く。

「目立つなよ」

「承知」

小さく頷いて栞は姿を眩ました。空は振り返って即座に尋ねた。

「栞は何者なんだ」

「忍」

良明がさらりと答え、清宏も話し出す。

「松葉屋の人たちは大体そうだよ。徳川の忍なんだ。本来なら人一人のために動くことなんてないんだけど」

そう言って清宏は良明に恨めしそうな視線を向ける。良明のために彼女が動くのが面白くない、とでも言うように。良明は敢えて何も言わない。

「忍って間者のことだよな。栞はあの年でもうそんなことやってるのか」

忍がどういった仕事をするのかは知らないが、単身で敵地に赴くこともあるのかもしれない。そう考え、少し哀れむように空は呟いた。

「能力があれば使われる、それだけのことさ。栞も辛い時期があったことは確かだ、今は吹っ切れてるみたいだけどな。割り切らなきゃやってられないよ、あの仕事は」

声を低くして良明が話した。

「まあ今日は確実に楽しんでるよな、あいつ」

そう言って彼が短く笑い、空も頷きながら笑った。その傍らで、清宏がぶつぶつと呟く。

「何なんだろうな、俺の方が栞のこと分かってますーみたいなこと

言ってさ、自慢かっての。俺だって栞のこと詳しいも――あいたっ！」

突然頭に固い物が当たり清宏は叫んだ。そして親指の先ぐらいの大きさの石が地面に転がる。眉を上げて空たちへと振り返るも、彼女らは両手を上げ何もしていないと言うように首を振る。そして良明が上を指差した。そちらに顔を向けると、生い茂った木の枝に栞が立っていた。

「変なこと言ってないでさっさと行ったらどうです」

「石投げるとか危ないな！　当たりどころが悪かったら死ぬよ！」

「……一回死んでくれればいいのに」

「聞こえた！　小声で言っても聞こえたからね！」

面倒臭そうな顔で栞は盛大にため息を吐いた。

「早く行ってください、人がこっちに向かってます」

そう言って、栞は空たちの行き先とは別の方向を見つめた。良明が眉をひそめ、低く尋ねる。

「誰か分かるか」

「いえ、でも数日前も見ました」

「数日前？」と空は不思議そうに首を傾げたが、良明にはその意味が分かったらしく即座に腕を掴まれ空は驚き振り返った。良明は一

瞬空と目を合わせてから、清宏、そして栞に目配せする。

「おれたちは会わない方が賢明だろ、お前らに任せるぞ」

「承知」

栞はすぐ頷いた。一方で清宏は腕を組んで考え込み、しばらくしてから急に何か納得したようにポンと手の平を打った。

「ああ、なるほどね。わかったわかった。茶室に行ってろ」

清宏が軽く手を振り、空と良明に早く行くよう促した。良明に腕を引っ張られ、空は訳も分からないままその場を離れた。

抜け道のような小道を歩きながら、城の中にもこんな場所があるのだなと空は考えていた。道の両脇の木々は青々と茂り、森にいるような緑の匂いが辺り一面に立ち込めていた。

何気なく上を向くと、いつの間にか重い雲が空を覆い隠していた。先程まで晴れていたような気がするのに、と空は首を傾げた。そういえば、風が出てきており、木立もざわめいている。

ふと空は前を歩く良明に目を向け、少し考えてから彼の隣に並んだ。

「栞が言ってた人って？」

そう尋ねると、良明はちらと視線を向けた。

「……お前をつけてたやつだよ」

「へ！？」

空は思わず瞠目し、一瞬声を失った。慌てて良明に詰め寄る。

「何でうちが城のやつらにつけられなきゃならねえんだ」

「おれのせい。と言いたいんだが、少し違う気がするんだよな。探れたらそれも探るか」

彼の言葉の意味が分からず、空は眉をひそめた。

「……どういう風に違うんだよ」

「さあ、おれには分からないな」

そう言って良明は肩をすくめた。

空と良明を見送り、清宏は近付いてくる男を待った。

「清宏さん」

「うん？」

栞の声に、上を向かずに清宏は答えた。それを気にした様子もなく栞は言葉を続ける。

「あの人、いつから城に勤めるようになったんですか？　私、あの人のことを把握できてないことが不思議でならないんです」

「勤め始めたのは確か……一年ぐらい前かな。俺は昔から知ってるよ、勝重んとこの人間なんだ。ま、表にはほとんど出てこない人だから栞が知らなくてもおかしくはないって」

「それじゃ駄目なんですよ、私は」

栞が拗ねたように言い、清宏は苦笑して木にもたれかかった。要は彼女は自分から彼のことを聞き出したいのだ。栞は様々な情報を集めるのが一番の役目だった。

「名は久臣って言って、年は二十六。悪い人ではないよ、勝重のお守りみたいな人だ。ま、勝重側だと思うと俺は好きになれないけど」

最後は嫌味も込めて付け足した。

「……勝重さんが、何か企んでいると思いますか」

栞は一層声を低めて訊いた。清宏はうーんと唸ってから口を開く。

「いや、あの直球馬鹿が何か企むとか、そんな器用なことができるとは俺は思わない。あいつじゃなくて、あいつの後ろを見るべきじゃないのか」

「……いつも思いますけど、そういう読みだけは鋭いですよね。参考にします。久臣って人、来ました」

それだけ言って栞は静かになった。褒められたのかな、と思いながら清宏は身体を起こして木から離れた。

それからすぐに久臣が姿を表す。月代に鬢を結い、目鼻立ちのい

い好青年だ。見た目では誰もが優しそうな印象を受ける。清宏の姿を認めて、彼は僅かに眉を上げる。

「こんなところにいたのですか」

「ども、何か用でも？」

清宏はにこやかに聞き返した。確かに久臣は勝重側の人間だが、人となりは嫌いではなかった。いくらか堅いところはあるが真面目で誠実なところに親しみを持てる。

久臣は疲れたようにため息を吐き、腕を組む。

「家康様に急な用が入りました。だから貴方の用を早く済ませたいそうです」

「えーっ。殿、今日はゆっくりするんだと思ってたのに」

清宏が残念そうに言った時、何かに気付いたように久臣が不意に上を向いた。

「――そこの貴女、隠れて話を聞くなら気配ぐらい消したらどうです。それか堂々と姿を見せるか」

清宏はギョッとして久臣の見る方へ顔を向けた。てっきり栞は傍観するものとばかり思っていた。栞が枝に腰掛けこちらを見下ろしている。彼女の目が細められ、清宏は思わず息を呑んだ。何かに怒っているのだろうか。

栞の鋭い視線が一瞬清宏を射たが、すぐに久臣へと戻る。

「わざとです。貴方が気付くかどうか試したかったので」

栞が冷ややかに言い、久臣はやれやれと肩をすくめる。
「そうですか。ならば殺気は放つべきではない。忍なら忍らしくありなさい」
栞と久臣はしばらく睨み合うように視線を交えていた。清宏が内心ハラハラしていると、唐突に久臣が振り向き、清宏は驚いた。
「早く殿の下に行くように。私はしっかり伝えましたよ」
「あ、久臣さん、彼女のことは……」
「心配しなくても誰にも話しません。ですが、護衛をつけるなら人は選ぶべきかと」
久臣はもう一度ちらと栞を見上げてから、清宏に会釈をして踵を返した。
「護衛じゃないんだけどな」と久臣を見送りながら清宏は頭を掻いた。すると急に栞が音もなく隣に降り立ち、清宏は飛び上がった。彼女はしばらく、久臣が消えた方を静かに見つめていた。清宏はおずおずと栞の顔を覗き込む。
「栞、どうしたんだ」
そう尋ねると、栞は頬被りを下げながら振り返って短く笑った。
「空ちゃんつけたやつだから眼飛ばしただけです。喧嘩売る形になっちゃったけど」

「……何だ、また俺何かしちゃったのかと思った」

清宏がホッと胸を撫で下ろすと、栞がくすりと微かに笑った。しかしその笑みはすぐに頬被りの下に隠れてしまい、清宏はこっそり残念に思った。

「久臣さんが悪い人じゃないことは分かりました、何となくですけど。でも、清宏さんはもう少し警戒心を持つべきです。じゃあ私はちょっと探りたいことがあるので」

「……参考にします。じゃ、またあとで」

清宏が軽く手を振ると、栞は姿を眩ませた。消え方があまりに一瞬で思わず見上げたが、当然彼女の姿はどこにも見えなかった。代わりに暗く淀んだ空が広がっている。

（雨降りそうだな……さて、何事もなく終わるといいけど）

ふうと息を吐き、清宏は本丸へと歩を進め始めた。

一、遠い記憶　（１１）

茶室は人が四五人入るぐらいの広さで、四角の間取りに畳が敷き詰められていた。中央には小さな囲炉裏があり、茶をたてるための道具が揃えて置かれている。茶について知識のない空にはそれらが何に使うものなのか分からない。

空と良明は障子を背に並んで腰を下ろしていた。不慣れな格好と場所に空は居心地悪く思いながら身体を揺らし、時折隣の良明の様子を窺った。彼は特に思い詰めているようでもなく、のんびりと構えている。家康と会うことに緊張はしていないようだ。

その一方で、空は自分の動悸の速さに戸惑っていた。先程治まったときより更に強く、全身で脈がわかるくらいの速さで波打っている。緊張ではないような気がするが、一体何なのかは解せない。

ふと、茶室の外から何人分かの足音が聞こえ空は顔を上げた。その足音は確実にこちらに向かっている。土を踏む荒々しい音がまるで心中を掻き乱しているようで、空は僅かに具合が悪くなり思わず良明の袖を掴んでいた。

振り返った良明が怪訝そうに顔を覗き込んでくる。

「どうした。また息苦しいのか」

「……何か……恐い」

言葉にしてようやく、自分が抱いていた感情が恐怖だということに気付いた。

城にいることも、家康に会うということも怖い。それだけではなく胸の中に黒い波が押し寄せてくるようで不安が拭えない。何故ついてきてしまっただろう、松葉屋で待っていればこのような思いはしなかったはずだと後悔してしまう程だった。この時ばかりは自分の好奇心を恨んだ。

顔をしかめていると、不意に良明に頭を撫でられ空は彼に目を向けた。

「何か唱えとくか？　まじないって言うより、気休めだけど」

「唱え……」

「ああ。そうだな……オン、カカカ、ビサンマエイ、ソワカ。これは地蔵菩薩の真言」

「お、おん、かか……？」

馴染みのない言葉に空は何度も瞬き、首を傾げた。良明がふっと笑い、今度はゆっくりと繰り返す。

「オン、カカカ、ビサンマエイ、ソワカ」

彼の言葉は包み込むように空の耳に届いた。空は良明の顔を見つめたまま小さく呟いた。

「……オン、カカカ、ビサンマエイ、ソワカ」

「そう。しんどいときは唱えてみろ。印を結ばないとあまり意味はないけど、まあそれは今度教えてやるよ。でも何度も言うが、気休めだからな」

そう言って良明は肩をすくめた。不思議だった。急に身体の力が抜け、呼吸が楽になった。言葉による効果というよりは、ここに一人でいるのではないと再認識できたことが大きい気がした。
空は良明を見つめ続けていた。自分が知らないことを良明は知っている。彼は一体、今までにどんな経験をしてきたのだろう。

「……よっしーは修行か何かしてたのか？」

「いや、精神統一の一環で色々教わったんだ。旅の間は寺や神社に世話になったからな。まあ昔からそういうのを教わってたってのもあるけど」

苦笑混じりに良明は答えた。その時、近付いていた足音が茶室のすぐ側で止まり、外から話し声が聞こえ二人は同時に口を閉じた。

「――私一人でよい。お前たちは外で待っていろ」

「――はい」

「――何かあったらすぐに呼んで下さい」

「――ははは、何もない何もない」

短い笑い声がしてすぐ、障子ががたんと揺れた。空が身体を強張らせていると、良明が顔を寄せ囁いた。

「顔、伏せてろ」

空は慌てて頭を下げた。その直後、がたがたと音を立てながら障子が開かれる。

「うーむ、相変わらず立て付けが悪いな。清宏、何とかならんか」

「蝋でも塗っときましょうか？」

「いやそういうのでなくて、業者に頼むとか……まあいい、蝋で」

家康のものと思われるため息が聞こえ、また煩い音と共に障子が閉められた。顔を伏せている空は横目で家康の足を見ていた。濃紺の袴を揺らしながら彼は茶室の上座に向かい、どかっとあぐらをかいた。

「面を上げろ。ここでは堅苦しいのは一切なしだと言ってあったはずだが、良明」

隣で良明が顔を上げる気配がしたが、空はまだ上げなかった。家康から放たれる空気が重苦しく、身動きする勇気が湧かなかった。

「……お変わりないようで」

良明が家康を見据えて言うと、彼はニッと口の端を上げた。

「ふん、お前もな。いや、少しは変わったか、目付きがよくなった」

そう言って、家康は懐から扇子を取り出し、閉じたまま手の平を打った。その視線は既に良明の隣の少女へと移されていた。家康は閉じた扇子で少女を指した。

「その者は？　城の者の娘か？」

家康の言葉に、俯いていた空は息を止めた。自分が何かを言うべきでないことは分かっている。この場は全て良明に任せるしかない。

「彼女は旅の道中で会い、以来行動を共にしています。江戸の者ではないので放っておくわけにもいかず、ここまで連れてきました」

あらかじめ準備していたのであろう言葉を良明は淡々と話した。すると家康が興味を持ったように目を光らせる。

「ほう、あの良明がな。お前も面を上げよ」

空の心臓が大きく跳ね上がった。一瞬で頭が真っ白になり、顔を見せるだけの行為にどうすればいいのか分からなくなった。

俯いたまま硬直していると不意に良明に肘で小突かれ、空は驚いて勢いよく顔を上げた。すると囲炉裏を挟んで座る家康と視線が重なった。

貫禄のある体格で、頭は月代に髷を結っている。顔には年相応の皺が刻み込まれ、幾多もの戦場を駆け巡ってきたその眼光は鋭く空を射た。

家康の表情に一瞬驚嘆が混じったのに空は気付いた。それはすぐに消えたが、空の中に疑念が残った。自身の丸い顎を撫でながら家康が尋ねる。

「……これは……お前、名は何と申す」

「空……です」

「空か、覚えたぞ。お前も顔を上げていろ、無礼にはならん」

家康にそう言われ、空はようやく事前に顔を見るなと言われていたことを思い出した。慌てて良明に目を向けると、彼はこちらを見ていて、しょうがないと言わんばかりに肩をすくめた。

空から視線を外した家康は良明へ話しかけた。

「それで、話とは何だ。いや、それよりもまず今まで何をしていたのか話すのが道理だろう。話の前に私の問いに答えろ」

家康の口調は厳しかった。良明の傍らで聞いている空が怖じ気づいてしまう程だった。ちらと良明の様子を窺うと、彼は目を閉じて覚悟したように頷いていた。

家康はしばらく無言で良明を眺め、口を開いた。

「何故あの日戻ってこなかった」

「……宗佑さんが死んだためです」

良明の返答に感情は込められていなかった。短く息を吐き、家康が続ける。

「宗佑の死は私にとっても痛手だった。だがその程度でくにを抜けようなどと思うまい。他に何かあったのではないか」

「いえ……全て自分の意思です。それ以上のことは――」

「一陽が戻らないことは関係しているのか」

家康に言葉を遮られ、良明は一瞬躊躇った。あの日のことを家康

がどれだけ把握しているのか分からないため、下手なことを言うのは避けたかった。

「一陽は……関係ありません」

「やつの今の居場所も知らないな？」

「はい。家康様も掴めていないのですか」

良明が意外そうに尋ね返すと、家康は低く唸った。

「あいつは昔から痕跡を残さないのに長けていたからな、忍のようだ。だが数日前、一陽を見たという話を聞いた」

「……そうですか」

特に関心を示してないように良明は呟いた。家康が扇子で自分の膝を叩く。

「まあよい。それで、城に戻る気はあるのか」

「いえ、戻りません」

「うむ、お前のその素っ気なさ、気に入っているぞ」

あっさりと断った良明に対し、家康は怒った様子もなくこれまたあっさりと言った。

呆気にとられていた空は、不意に室内の張りつめた雰囲気が消えたのに気付いた。家康の表情もどこか和らいでいるように見える。

「二年もどこで何をしていたんだ？　旅をしていたのか」
「はい。西に下って他のくにを見て回っていました」
「西か、向こうはまだまだごたついておるな。やっかいなのは豊臣。島津とはやっと和解できたばかりだ。西国だけでない、豊臣恩顧の将も油断ならん。東諸国もな。徳川は敵だらけだ」
そう言って家康が疲れたため息を吐く。
「敵ばかり見るのもいかがかと思いますが」
良明が呟くと家康はにやりと笑った。
「そう返すのはお前ぐらいのものだ。まあ、敵も多いが味方も多い、それが徳川だ」

「殿、嬉しそうに喋ってるなぁ」
茶室の障子にぴたっと耳を付け、清宏は中の会話を聞いていた。その傍らに立つ少年の額に青筋が浮かんでいる。
「いい加減にしないか。盗み聞きなど無礼にも程があるぞ」
清宏に向かって少年が苛々と呟き、清宏は振り返って眉を上げた。
「うるさいな、でかい声出すと中に聞こえるだろ」

「誰もでかい声は出していない。盗み聞きを止めろと言っただけだ」

少年が憤然と言い、清宏は大袈裟にため息を吐いた。

この少年の名は勝重（かつしげ）といい、清宏同様、彼も家康の小姓を勤めている。年は一つ下だが、ことある毎に食って掛かり、喋れば何かと一言多く、清宏にとっては接するだけで苛々を募らせるだけの相手だった。

思い返せば、まだ良明がいた以前から勝重は二人に対して険悪な態度を取っている。しかし同じ役柄故に、切り離せない相手であることも確かだった。そして余計に不満が溜まっていく。

清宏が無視を決め込んでいると、勝重は更に話した。

「良明が今更戻ってきた理由が解せない。てっきり死んだとばかり思っていたのだが」

「……あいつが死ぬわけないだろ。お前じゃあるまい」

「その言葉、そっくりそのままお前に返すぞ」

一瞬、清宏と勝重は冷たく睨み合う。その時、ぽつと何かが頬を打った。二人して空を見上げると、更に大粒の雫が落ちてきた。

「やっぱり降ってきたな」

清宏はやれやれと呟き、茶室の縁側に腰を下ろした。その隣に少し距離を置いて勝重が立つ。二人の間の無言は続き、今や土砂降りとなった雨の音だけが辺りに響いていた。

良明と家康の会話を静かに聞いていて、ふと空は彼らの声が次第に遠くなっていくのに気付いた。家康の口が動くのを見ているのだが、何を言っているのかよく聞こえない。

（あれ？）

土砂降りの雨のせいだろうかと首を傾げた空が、自分の意識が遠のいているのだと気付くことはついぞなかった。

目を閉じ、ゆっくり開いて、確かめるように両手を握り締める。彼女の動きに気付いた良明は、振り返った。そして絶句した。

いつの間にか空がいない。

空の姿をした彼女がこちらに顔を向け、紅を引いた唇が妖しく笑みを形取る。昼間のせいかいつもの青白い光は見えない。その代わりに潤んだ青い瞳が際立ち、良明を穏やかに見つめる。

海が出てきてしまった。原因は分からないが、これからよからぬことが起こることは明白だった。その証拠か、悪寒が止まらない。

「良明、どうした」

囲炉裏の向こうから家康が怪訝そうに尋ねた。海の視線が、良明から家康へと移る。

「この時をずっと待っていたわ」

そう呟き、海は懐から漆の塗られた黒い懐刀を取り出した。突然の海の出現に言葉を失っていた良明は、懐刀が鞘から抜かれるのを見て驚愕した。

「おい……何する気だ」

慌てて海の腕を掴むと、彼女は振り返り刺すような眼差しで良明を睨んだ。

「離しなさい……邪魔をするな！」

荒げた海の声に心臓がドクンと震えた次の瞬間、金縛りが良明を襲った。声も出せず、指一本すら動かせない。

良明の手を振り払い、海は音もなく立ち上がった。彼女の視線は家康へ注がれている。懐刀を持った右手が波のように揺れるのを、良明は視界の端で見ていた。

不味いことになった。海が城に興味を持っていたことは知っていたのだ。もっとも、海が出てくるのは空が寝ている間だけと聞いていたため、用心を欠いていた。しかも予想外の海の出現に心底驚いたせいで油断し、この有り様だ。良明は心の中で自分を罵った。

それよりも早くこの状態を解かなければ彼女を止められない。全身を縛られた時の一番の対処法は、術者以外の誰かに触れてもらうことだった。家康はそのことをきっと知らないだろう。外にいる清宏たちに助けを呼ぼうにも、声が出せないのでは不可能だ。

確か真言があったはずだと記憶を辿るも、焦る余り何も思い付かない。そうしている内に海は家康の前に立ち、彼を見下ろしていた。

「徳川家康……貴方が死んだらどうなるかしら」

「さて？　私が死んだら、土に埋められるんじゃないか」

怖じた様子を微塵にも見せない家康を見下ろしたまま、海は目を

細めた。

「ふん、戯れ言を」

冷たい表情の海は両手で懐刀を握り締め、頭より高く振り上げた。そして家康の胸目掛けて振り下ろす。どっと懐刀が突き刺さる音が茶室に鈍く響いた。

しかし懐刀が刺さったのは、家康の胸でもどこでもなく、横から伸びた良明の腕だった。庇うことに必死で、護身など良明の頭にはなかった。

「いっ……て」

良明は激痛に顔を歪め、思わずよろけた。家康が良明の肩を掴んで支えた。その手には脇差が握られている。

懐刀を良明の腕に残したまま海は手を離し、二人から少し距離を取った。そして顔をしかめて一度舌打ちし、目を閉じた。すると、彼女は崩れるように座り込み、頭を前に垂れてしばらく動かなかった。

次に彼女が顔を上げた時、その表情は夢から覚めたばかりのようにキョトンとしていた。しかし良明と家康の様子を見、良明の腕に刺さる懐刀と滴り落ちる血を見た彼女の顔は、一瞬で恐怖の色に染まる。

良明はちらと彼女に目を向け、口を開いた。

「空だな」

「……」

声が出ず、空は小さく頷いた。良明の一言とどこか安堵した表情で空は全てを悟ってしまった。
海が表に出てきた。記憶が飛んでいることもそのせいだ。そして海は、空の懐刀で家康を襲ったのだろう。それを庇って良明が代わりに刺されたのだ。
分かった途端、恐怖は一気に押し寄せ軽い目眩を引き起こした。そして胃から込み上がってくるものを覚え慌てて口を押さえる。

「おい、清宏、勝重！」

突然、家康が大声を出し空は飛び上がった。間髪入れず障子が素早く開き、呼ばれた二人の小姓が姿を見せる。彼らに向かって家康は言った。

「清宏、良明の怪我の処置をしろ。勝重は薬だ」

「承知」

二人は同時に頷き、勝重は茶室を後にした。清宏は座り込んでいる空の肩を掴み、軽く揺さぶった。

「空、大丈夫か？　ちょっと下がっててもらえるかな」

そう言っても空は放心したように一点を見つめたまま動かなかった。その顔はハッとする程青ざめている。清宏がちらと良明に目を向けると、彼は視線を合わせ微かに首を振り、口を開いた。

「栞」

突然、栞が入り口に現れた。彼女は黒装束ではなく、花浅葱の袷

に白橡の細帯を締めた格好に着替えていて、一瞬城の侍女と見間違えそうだった。彼女は静かに良明を見つめている。

「空を頼む」

そう良明が言い、栞は一度頷き空に近付いた。

「空ちゃん、一緒に外に出よう」

空の耳元で栞が優しく言うと、空はゆっくり振り返り今にも泣き出しそうな顔で頷いた。大丈夫と言うように栞は微笑み、空の腕を掴む。

空がよろめきながら立ち上がったその時、家康が唐突に口を開いた。

「待て。これだけのことをしていてお前は去るのか？　私には何もなかったが、それで収まると思うのか」

家康の厳しい口調に空は震え、顔を強張らせた。彼の言う通りだ。記憶がないとはいえ、彼に刃を向けたのは事実である。

「あ……あの……」

何か言わなければと声を絞り出したが、それに続く言葉が出ず、空は俯いて黙り込んだ。

「……空は、どうしてこうなったのか何も分かっていないんです」

家康に向き直って良明が告げた。彼の助け船に空は心底安堵すると共に、逆の感情も奥深くに抱いていた。

「おれが説明します。だから今は彼女は退室させてください」
お願いします、と良明は家康に向かって頭を下げる。家康は顎を撫でながら良明と空を交互に眺め、しばらくしてからため息を吐いた。その目は良明の懐刀が刺さったままの腕に向けられた。
「良明への借りはなしだぞ」
「はい」
良明はホッと息を吐き、栞に目配せした。栞は空を連れて茶室を後にする。
茶室を出る前に空は不安に思い振り返ったが、良明は「いいから行け」と小さく言った。空は唇を噛み締め、栞を追った。

栞に連れられ、空は茶室の裏の茂みまでやってきた。雨はまだ降っているが大分弱まっている。
頭の中は恐怖と混乱で渦巻いていた。昼間に海が出てきたことなど聞いたことがなかった。自分が起きている間は一度も入れ替わったりしなかった。今まで信じてきたものが崩れてしまったような感覚を覚えた。
月が欠けていく間だけという条件も覆ったのではないかと考えると、背筋が寒くなった。もしそうだとしたら、いつ自分の意図していないところで急に入れ替わってもおかしくない。それだけは避けたかった。
海にこの身体の主導権を握られたら、二度と自分に戻れない気がした。

意識が戻った際、空は家康が脇差を手にしていたのを見た。恐らく、家康は抵抗するつもりだったのだろう。良明が間に入ってこなかったら、今頃自分は斬られていたかもしれない。ぞっとして空は自身の腕を擦った。

それに良明の腕に刺さる懐刀と、血の匂いを思い出すだけで胸を締め付けられた。今一番身近な人を自分のこの手が傷付けた。信じられなかったし、嘘だと思いたかった。しかしあの黒い懐刀は何度も見てきたため、見間違うはずがない。あれは、空のものなのだ。

空は今や小降りとなっている雨を見上げた。

傷はどの程度の深さになってしまっただろう。自分を庇ったことで家康から何か咎めがあるのではなかろうか。彼は海にも自分にも嫌気が差したかもしれない。

頭の中で何を問うても、答えは返ってはこない。ただ、考えている間も思い出すのは良明の笑い顔と、心配そうに頭を撫でてくれる彼の手の平の温かさだった。

空がいくらぶっきらぼうな態度を取っても彼は危機には助けてくれたし、不安なときは励ましてもくれた。短い間で良明に救われたことは何度もあったのだ。彼に安心感を抱かないはずがなかった。

次第に胸から込み上がってくるものを感じ、我慢していたがやがてそれは目から溢れ出た。

「……うっ……く……」

空は嗚咽を必死に堪え、手で何度も目を擦った。自分が泣くのは空にも妙に思えたけれど、先程の恐怖も相まって一度溢れたものはなかなか収まらない。

傍らに静かに立っていた栞が手を伸ばし空の頭を胸に引き寄せた。

「よしよし」

そう優しく言って、栞は空の背中をぽんぽんとゆっくり叩いた。しゃくり上げながら空は口を開く。

「ご……ごめ……」

「あはは、それは何に対する謝りなのかな。今はそんなこと気にしないでいいから、落ち着くまで泣きなよ」

短く笑い声を上げた栞が更に続ける。

「今日だけで色んなことがあったから心がついていかなかったんだよ。その反動ね、きっと」

話す間も栞は空の背中を擦り続けた。

しばらく泣き続けてようやく落ち着いた空は、目を拭いながら顔を上げた。

「ごめん……もう大丈夫」

「そう？」

栞はにこりと笑い手を離す。

「……空ちゃん、ごめんね、私も海のこと知ってるんだ」

「え……？」

「空ちゃんたちが松葉屋に来た日の夜に見ちゃって。良明さんにも聞いたの」

「……そっか」

栞の突然の告白にそれ程驚きはしなかった。いや、驚く余裕がなかったという方が合っているかもしれない。空は僅かに視線を落とし、黙り込んだ。

少し間を置いて栞は再び口を開く。

「あのさ、泣き寝入りしちゃ駄目なんじゃないかな。海のこと、何とかしなきゃ空ちゃんの身体にも負担が増すかもしれないよ」

「……うん。うちの身体だけじゃなくて、たぶんこれから他の人にももっと迷惑がかかる」

俯いたまま空は答えた。

「自分だけだったらよかったのかもしれないけど……人を、よっしーを傷付けたのはさすがにこたえてる。これからはちゃんと向き合うよ。だから政長に話聞きに――」

急に「しっ」と栞が口に人差し指を当てたので、空は言葉を切った。見上げると、栞は茶室へと視線を向けている。不思議に思いながら空も振り返った。

慌ただしい足音がして、茶室の障子が開き、閉まる音が聞こえた。

「勝重さんか。中はもう少しかかりそうだね。話もどそう。政長っ

て空ちゃんが言ってた浪人だよね、その人は色々分かってるんだ」

栞が首を傾げ、空は頷いた。

「うん、たぶんだけど。今すぐできるのはそれぐらいしか思いつかなくて……」

「ううん、相手のことを知るってすごく大事。忍もそのためにいるようなもんだし。そうとなると……」

栞は少し考えを巡らせ、右手を口に当てた。途端、微かに甲高い笛のような音が聞こえ、空は何度も瞬いた。

「あれ、聞こえた？　空ちゃん耳がいいんだね、忍に向いてるよ」

栞がおどけたように言うと同時に彼女の肩に黒いものが舞い降り、空は飛び上がった。

よく見るとそれは翼を持っていて、更によく見るとそれは鳩だった。鳩は大人しく栞の頭に身体を寄せて、時折彼女の髪をつついている。

空が面白そうに見ているのに気付き、栞はくすくすと笑った。

「この子は伝達用の鳩なんだ。菫さんのとこに飛ばそうと思って」

そう言って栞は懐から赤と白の布切れを取り出した。そして赤だけを鳩の足にくくりつけ、それを合図にしたかのように鳩は飛び立っていった。鳩を見送り、栞は腰に手を当てて空へと振り返った。

「よし、ひとまずは安心。でね、空ちゃん、もしかしてだけど、一人で行こうと思ってるんじゃない？」

「えっ」

空は目を見開いた。栞の言う通り、政長の下へは自分一人で行こうとしていた。叶うなら今すぐにでも発とうと思っていたのだ。

「やっぱり」と栞がため息を吐く。

「まあそう考えるのもしょうがないか。でも今はまだ行っちゃ駄目だよ。良明さんが出てくるの待ってからでも遅くはないから」

「……よくわからない。うちがいると迷惑にしかならないのに」

「そうだね、迷惑かもね。でもそうじゃないかもしれない。それは良明さんの考えを聞かなきゃ分からないことでしょう。自分の思い込みだけで行動するのは浅はかだよ」

彼女の声音は穏やかだったものの厳しさも含まれていて、空は閉口した。

浅はか。確かにそうかもしれない。それにやはり良明に何も告げずに行くのは余りに自分勝手だ。被害を与えてしまった今、もう彼は部外者なんかではない。

空は数回深呼吸を繰り返した。良明と顔を合わせるのも、今は怖い。だけど逃げてばかりいるのもよくないと分かっている。

空は目を閉じ、良明が教えてくれた言葉を心で呟いた。

一、遠い記憶　（１２）

「そういえば」と家康が唸るように呟いた。
二人の少女が出ていってから、良明は事情を話していた。腕の治療はもう終わっている。清宏や勝重に聞かせるのは気が引けたが、今となってはしようのないことだ。家康が口を開いたのは、良明が大体を話し終えた頃だった。

「神降ろしなどということができる者もいるな、巫（かんなぎ）と言ったか。空もそうなのか」

「……はっきりとは言えませんが、違うと思います。降ろすというより、元から空の中にいるという方が合っています。それに海は神じゃないし」

最後は小声で付け足した。しかし家康には聞こえたようで、彼は首を傾げた。

「何だ、その海とは」

「先程の者がそう名乗りました。空とは別物、と自覚があるようです」

「空と海なあ……奇っ怪な話だ。私の頭ではついていけん。清宏はどう思う」

「俺ですか」

急に話を振られ、脇に控えていた清宏は驚いて何度も瞬いた。そ

して困ったように視線を上に向け、言葉を選びながら彼は話し始める。

「俺は一部始終を見ていた訳ではないので予想の範疇ですが、正直なところ良明の話は信じられていません。現実離れしすぎています」

そう言って清宏はちらと良明に目を向ける。良明は一瞬視線を合わせたが、それっきりだった。清宏は更に話を続けた。

「ただ、ここに来るまでの空を思い返しても彼女は至って普通の女の子でしたし、殿に害をもたらすようには思えませんでした。城に入ることに少なからず不安はあったようですが、それは慣れない者には当然かと」

「うむ。勝重は」

家康は考え込みながら今度は勝重に尋ねた。勝重は堂々とした面持ちで話し出す。

「殿に歯向かったのであれば、敵とみなしていいのではないですか。そこの二人の話の様子では、またいつその者が襲ってきてもおかしくはない。捕らえて牢に入れておくのが上策かと」

「……牢に、か」

そう呟いた家康は扇子で手の平をゆっくり叩きながら、未だ何か思案に暮れている。清宏が慌てて口を挟んだ。

「ちょっと待って下さい。牢にって、空はただの女の子ですよ？」

「なら何でその『ただの女の子』が家康様を襲ったんだ」

勝重の鋭い切り返しに清宏は言葉を詰まらせた。

「それは……」

「ほらみろ、何も言い返せない。女が絡むとお前はいつもそうだ。第一、その場にいなかったお前に何が分かる」

「お前だっていなかっただろ！　決めるのは殿で、勝重じゃねえんだぞ！」

かっとなって腰を浮かした清宏の腕を掴み、良明は引っ張った。

「落ち着けよ」

「いやいやいや、逆に何でお前は落ち着いてるんだよ。空のことなのに」

清宏は振り返って怪訝そうに良明を見つめた。良明は短くため息を吐く。

「清宏が言ってることも勝重が言ってることも一理ある。おれはどちらかといえば加害者になるんだ、家康様のご意向に任せるよ」

どこか諦めたような良明の口調に、返す言葉がなくなった清弘は黙り込んで座り直した。考え込んでいた家康は、はたと良明に視線をやった。

「私の意向にか。じゃあ問おう、良明はどう思う」

急な問いかけに良明は僅かにたじろいだ。それからしばらく考え、ゆっくり口を開く。

「……おれは、海に関して詳しく分かっていません。何故家康様に敵意を持つのかも、何故空の中にいるのかも。ただ、先程の行動は空が意図してやったことではないということは分かっています。何が悪い、誰が悪いを考えるのではなくて、これから海を生じさせないようにするのがおれの役目なのだろうとは思います」

良明は一言一言をしっかりと発した。その眼は揺らぐことなく家康を見据えている。

「妙なことを言っているのも分かっています。でも海を消すのが最善なのではないでしょうか。こちらにとっても、そちらにとっても」

「……脅威がなくなるわけだしな。良明が対応するというのなら、よかろう、咎めはなしだ。捕らえることもしない」

そう言って家康は扇子で膝を叩いた。清宏が密かに握り拳を作り、良明は頭を下げて礼を言った。一方で勝重は不満げに良明を睨んでいた。

「私はそろそろ行くぞ、急用が入っているのでな」

一件落着とばかりに立ち上がった家康が「あ」と声を発した。

「この件の口外を禁ずる。いいな」

家康の命令に三人はそれぞれ頷いた。苦々しく承知した勝重が立

ち上がり家康に続く。茶室を出る際、家康は何かを思い出したかのように振り返った。

「良明」

「……はい」

良明は不思議に思いながら首を傾げた。

「お前にその気があるなら、いつでも戻ってきていいぞ」

それだけ言って良明の返答も待たずに、家康は茶室を後にした。勝重も二人を一睨みしてから出ていく。

ほっと息を吐いた清宏が振り返って苦笑した。

「どうなるかと思ったけど、よかったな」

「……ああ」

良明は上の空で返した。家康の去り際の言葉が妙にひっかかっていた。

「何か、納得いってないって顔だな」

「いや……考えすぎかもしれない。それより、責任重大だな、おれ。海をどうにもできなかったら、今度こそ首が飛ぶ」

「ははは、じゃあ空連れて遠くまで逃げるか」

清宏が笑いながら冷やかすように言った。しかし良明は首を左右に振る。

「海はおれが何とかする。もう腹はくくってる」

そう言って立ち上がった良明の表情には一つの覚悟が滲んでいた。清宏は眩しそうに良明を見上げていた。二年前まで見ていた彼とは随分違うように思えた。見ない間に成長したことが窺える。

「……良明、でかくなったな」

「背丈が？」

良明が怪訝そうに言い、清宏は吹き出した。

「そういやまだ俺のが高いか」

清宏は唐突に立ち上がり、良明の頭の天辺を眺めてケラケラと笑う。

「お前、俺の背を抜けなくて悔しがってたよな」

「昔の話だろ、もう気にしてねえよ」

鬱陶しそうに言い、良明は清宏を置いて茶室を出た。清宏は直も笑い、そして良明に続く。

今まで土砂降りの雨だったのが嘘のように空は晴れ渡っている。雨上がりの匂いが鼻先を掠め、良明は一度深呼吸をした。柔らかい空気が胸に溜まり、良明の意思を包み込んだ。

「空」

良明の声に空は飛び上がり、慌てて振り返った。日の当たる場所に彼は立っている。空がおどおどしていると突然、栞に背を力強く押されて空はつんのめりそうになった。

「ほら、行っておいで」

彼女はそう言ったが、空はなかなか彼の下に行く勇気が湧かなかった。不安げに栞を見つめていると、彼女は苦笑した。

「心配ないよ。大丈夫、信じて」

栞は再度空の背を押した。今度は空は足を止めずにゆっくり良明の所へと向かった。彼の前に俯きながら立ち、おずおずと口を開く。

「……ごめん」

「え？　何で空が謝る……ああ、腕のことか」

忘れていたとでも言うように、良明は頭を掻いた。

「お前が謝ることじゃねえよ。気にするな」

「い、痛いか？」

空は恐々視線を上げて良明の顔を窺った。

「痛いかと聞かれればそりゃあ痛いさ。が、これはおれの不注意によるものだ。護身してれば怪我はしてねえ」

良明は肩をすくめ、僅かに眉をひそめる。

この時、良明は疑問に思っていることが一つあった。それは海によってかけられた術が急に解けたことだ。お陰で大事に至らずに済んだが、情けない話、自分ではどうにも出来なかったのだ。

海が力を抜いたとも、空が何かしたとも思えなかった。

誰か目に見えぬ所で手助けしてくれたのだろうかと考え、城で術に長けている人がいたのを思い出した。だがあの人が助けてくれるなどまずあり得ない話だと、良明はそこで考えるのを止めた。

心配そうにこちらを見ていた空の顔を見下ろし、ふと首を傾げる。

「……泣いたのか？　目が赤いけど」

「うっ……な、泣いてない」

そう言って、空は決まり悪そうに顔を背けた。良明が苦笑を浮かべる。

「相変わらず素直じゃねえな。強がらんでも、誰も責めねえよ。それで、これからのことなんだが――」

そっぽ向いたまま空は顔を強張らせた。動悸が一気に速くなる。今後のことなど聞きたくなかった。耳を塞いでしまいたかった。だがそれも、空にはできないことだった。

良明は声を低くした。

「――海について知りたい。だから、おれを政長ってやつの所に連れていけ」

「……え……」

良明へと振り返り空は目を見張った。彼は真っ直ぐにこちらを見つめていた。

「円の知らせを待とうと思ってた。でもいつになるか分からないから、先に知れるだけ知っておきたい」

「知って……どうするんだ」

心からの疑問を空は呟いた。彼は真剣な眼差しのまま答える。

「お前の中から海を追い出す」

そんなこと出来るのか。その言葉は喉につっかえ、出てこない。信じられなかった。良明がこれほど海に関心を持つとは思っていなかった。彼は海と数回話したが、それだけのような気がしていた。海には何か惹かれるものがあったのだろうか。それとも自分のためにと言ってくれているのだろうか。

訳が分からず、気付いたら口を開いていた。

「何でそこまでしてくれるの……分かんないよ……」

急に泣きそうになり、情けない表情を隠すために空は俯いた。

「海のせいで……うちのせいで怪我までさせた。もう、よっしーには迷惑かけたくないのに……」

ああ、違う。言葉にして、不意に空はそう思った。

迷惑をかけたくないということではなく、ただ単に良明に嫌われたくないだけのだ。何よりも恐れていたのはそれなのだと、ようやく気付いて何だか少しおかしくなった。こういう感情を抱くのも空には初めてだった。

しばらく二人して黙り込んだ後、良明が小さく呟いた。

「理由がほしいならつけてやるよ」

空は顔を上げ、「え？」と首を傾げた。

「ほっとけないから。じゃ、不足か」

そう言う彼の表情は驚くほど真面目だった。

空は目をぱちくりとさせた。言葉を理解するのに何故か時間がかかった。空が何も言えずに佇んでいると、良明がふっと笑う。

「発つのは明日にするから、今日まで松葉屋に泊まるぞ」

そう言って良明は後ろを向き、歩き出す。彼の背を見つめたまま、空は動かなかった。

夢のような信じられない気持ちで一杯だった。それでも嬉しさは後から後から込み上げ、視界が明るくなったようだった。

今なら何が起きても大丈夫な気がする。良明を頼ってもいいのだ。

空は駆け足で良明を追い、両手で彼の腕を掴んだ。立ち止まった良明が少し驚いた表情で振り返った。

「どうした」

「あの……ありがとう」

そう礼を言った空の顔は自然と笑っていた。小さな花が綻んだような笑みに、良明は内心たじろいだ。この時から空を普通の女の子だと意識し始めるのだが、それに良明が気付くのはもう少し後の話になる。

良明は空の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「だぁーっ！　こら！　禿げるってば！」

空が大声で喚きながら良明の手から逃れ、良明は声にして笑った。互いにもう不安はほとんどなかった。

少し離れた所から二人の様子を見ていた清宏は、彼らの微笑ましさに苦笑した。そしてふと隣に目をやり、栞が佇んでいて仰天した。彼女は静かに遠ざかっていく良明たちを見つめている。本当にいつでも音を立てずに行動するのだなと感心してしまう。

栞を見下ろしていて、清宏は僅かに眉をひそめた。彼女の表情がどこか寂しそうで、見ていて辛い。清宏は思わず視線を背けた。栞がこんな顔をする理由に気付いてしまう自分が嫌だった。今のは見なかったことにしなければ、自分の胸が痛むだけだ。

清宏は気を取り直して栞に尋ねた。

「そいや、何で着替えたんだ？」

「え？　あ、奥で話を聞いてたので」

栞が振り返り、少し照れた様子で自身の袖を寄せた。彼女にして

は珍しい仕草が可愛らしく、思わず頬が緩みそうになった。清宏はそれを隠すために慌てて首を傾げる。

「何か収穫あった？」

「まあ、ぼちぼちです」

栞は肩をすくめるだけで、詳しくは話さなかった。

「あっ、いたいたー！　清宏様ー！」

突然、背後から少女の甲高い声がして清宏は振り返った。栞も彼の背中越しに覗き見る。

二人の年若い少女が手を振りながら、にこやかに走り寄ってきた。二人とも女中なのだろうが、どちらも華やかな袷を身にまとい、頬がほんのり上気していて愛らしい。栞は静かに清弘の背を見つめた。

「何か用か？」

清宏が不思議そうに訊く。すると少女らの一人が清宏の腕を掴んだ。

「お見せしたいものがあるんです、一緒に来てください」

「もう、ふみったら、私が見つけたんだよ！」

もう一人が不服そうに頬を膨らました。二人に挟まれ清宏は困惑しきっていた。

「えーと、事情が飲み込めないんだけど」

「いいから、とにかく来てください」

「そうそう、行きましょ」

二人の少女が更に詰め寄り、清宏はその勢いに圧された。

「……私、戻りますね」

背後で栞が小さく呟き、清宏はハッとした。急いで振り返った時には、彼女は既に背を向け足早に歩き出していた。

「し、栞」

清宏が恐る恐る声をかけるも、栞は振り向きもせずに歩き続け、右に折れて木立の向こうに姿を消してしまった。呆然としていると、少女らが決まり悪そうに呟いた。

「やだ……お話の最中でした？」

「怒っていらしたようね……」

「……ちょっとごめん」

少女たちから離れ、清宏は栞を追って木立の先まで行くも、彼女の姿はもうどこにもなかった。清宏はしばらくそこに佇み、大きくため息を吐いた。

いつも唐突に現れ、そして忽然と消える。そんな彼女を自分が捕まえることなど、無理なことのように思えた。せめて栞の胸の内が分かれば、と考えてはむなしさが募っていくのだった。

＊　＊　＊

「いかがでした？」

その男は待ち伏せていたかのように現れ、勝重を従えている家康に向かって尋ねた。彼の顔には微かに笑みが浮かんでいる。男を見た勝重は僅かに顔を強張らせ、数歩下がって俯いた。

家康は短くため息を吐いた。

「お前の言う通り、襲いかかってはきた。だが私が斬るまでもなかったぞ」

「それはそれは、一先ずご無事で何より。良明が庇ったのでありましょう。想定の内です」

「まああいつは、私を庇ったと言うより娘を庇ったのだろうがな、良明らしい」

そう言って家康はふんと鼻を鳴らす。

「娘のことはお前に任せる、定勝。お前の好きにしろ。ただし」

釘を打つように家康は間を開けて定勝（さだかつ）に一歩近寄る。

「蒼にもこのことは話しておく、いいな」

「承知いたしました」

定勝は笑みを貼り付けたまま頷いた。

しばらく探るように定勝の顔を見つめ、それから家康はまた歩き出した。勝重も顔を上げ、慌てて彼に続く。

「要領よく参れ」

すれ違い様に定勝が呟き、勝重は足を止めて振り返った。彼は既に歩き始めていて声を掛けられる距離ではなかった。

勝重はギリと歯を食い縛り、口の中で呟いた。

「分かっています……父上」

＊　＊　＊

少女が格子窓から外を眺めていた。一面緑一色なのだが、先程降った雨の雫が光を反射してきらきら輝いている。

肩より少し長めに切り揃えられた鳶色の髪が風でふわりと舞い上がった。その風の匂いを吸い込み、少女は少し眉をひそめた。いつもと違った匂いがする。

「何だかお天気が不安定ですね」

そう言って少女は振り返り、祭壇の前に座る女に目を向けた。彼

女からの反応がなく、少女は怪訝に思って立ち上がった。

「蒼様、祈祷なさっているのですか？」

近寄ってもう一度声をかけると、蒼（あおい）と呼ばれた女はハッとしたように顔を上げた。あどけなさの残る少女がこちらを見ていて、蒼はほっと息を吐く。

「ああびっくりした、明音だったの。ごめんなさい気付かなくて。ちょっと手助けをしていて……無事に帰れたようだわ」

「……どなたの話ですか？」

明音（あかね）が不思議そうに首を傾げても、蒼は優しく微笑むだけで何も言わなかった。

「そろそろ家康様がいらっしゃるわ、明音は寝所に行ってなさいな」

「……はい」

腑に落ちない顔をしながらも明音は素直に頷き、部屋を出て行った。

一人になって、蒼は細くため息を吐いた。

「もうすぐね……」

ようやくこの時がきた。長いこと待ち望み、逆に恐れていたことでもあった。だが逃げも隠れもしない。

蒼は大きく息を吸い込み、真言を唱えながら両手で印を結んだ。

（……あの子たちに加護を――）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5933z/

十六夜の月

2011年12月30日03時48分発行